

---

# インフィニット・ストラトスcross BLADE

ドレイク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス c r o s s    B L A D E

### 【Nコード】

N 5 4 3 8 R

### 【作者名】

ドレイク

### 【あらすじ】

衛宮士郎がIS世界にTS転生する話です。

6 / 6    タイトルを変更しました

## 第1話 (前書き)

TS要素があるので、苦手な人はバツクしてください。  
自身の文の粗さを実感し、一から書き直すことにしました。

## 第1話

懐かしい夢を見た。偽善と知り、滅びの道と知り、それでもなお綺麗なものがあると信じ、正義の味方として突き進んだ。

その果てにあつた、当然の帰結。魔術の師でもある最愛の女性との別れ、熱狂と怨嗟の声に満ちた処刑場、振り下ろされる断罪の刃。途切れ、奈落へと落ち往く意識、二度と目覚めぬ眠りであつた、筈だつた。

夢の内容は自身の死に際、死んだのであれば次などない、終わるから死なのだ。夢でしかありえぬ筈の事象は、かつて自分が歩んだ道だ。なのにそれを夢として見れる、その異常さ、どうやら自分がつくづく出鱈目なことに縁があるらしい。

そんな事を思いつつ、彼ではなく、彼女、衛宮志保 は布団から出る。赤い髪を伸ばした少女 少女というには不釣り合いな落ち着いた雰囲気がある は着替えを済ませ、朝食の準備を手伝うために台所に向かつた。

台所では母親が朝食の準備をし、父親が新聞を読みながら食卓に着く、ありふれた、だがかつては経験したことのない普通の家庭、それを見ながら、自身が二度目の人生を生きていることを実感する。この二度目の人生をどう生きるか、それはまだ定まっていない。

かつてのように正義の味方として生きる、それも考えた。だが、両親は前世 衛宮士郎 のことなど知らぬし、今の自分は結果的にはいえ、この体を奪って生きているようなものだ。だから、早死にする生き方はしたくない。先のことはまたいずれ決めるとしよう。そう考えていると、テレビではあるものを映していた。

まるで、漫画やアニメに出てきそうな機械を身に纏った女性が、華麗に空を舞う。現実味ののない光景は、れっきとした現実だ。

IS<インフィニット・ストラトス>、もとは宇宙開発用に作られたそれは、ある事件で一躍脚光を浴び、今では世界各国の軍事の中枢を担う兵器だ。また、女性にしか扱えず、女尊男卑という考えを広めたきっかけでもある。

この時はまだ、自分がISにかかわるとは欠片も思っていなかった。

数カ月後、私はドイツにいた。第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』の観戦ツアーを両親がテレビの懸賞で当てたからだ。

各国の最新鋭機体によると派手なバトルはかなりの見ごたえだった。それだけで済めばいいことなشتたんだが、あいにくと私は出鱈目なことと同じくらい、厄介事にも好かれる性質らしい。

目の前で現在進行形の誘拐現場に遭遇し、つい口癖が出た。

「なんでさ……」

気持ちを切り替えた私

は、魔術で視力を強化して、誘拐犯の追跡を開始した。

|||||

織斑一夏は膝を抱え、恐怖に震えていた。最愛の姉、織斑千冬が第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』に出場するため一緒にドイ

ツに来ていたのだが、大会開催中に正体不明の連中に拉致され、どこか見知らぬ廃工場に監禁されているのだ。

これからどうなるのだろうか、千冬姉は心配しているんじゃないか、ひよっとしてもう千冬姉には二度と会えないんじゃないか、そんな思考が頭の中を駆け巡っていた。

そんな時だった、廃工場のひび割れた窓ガラスを突き破り、ナイフが数本床に突き刺さった。

当然、誘拐犯たちは警戒したものの、さすがにナイフがいきなり、小規模とはいえ爆発を起こすとは予想がつくはずもなく、爆発の光と舞い上がる粉じんで視界が塞がれる。

その様子は一夏にも見えていた、すると、粉塵の中から怒号と何かが倒れる音が聞こえてきた。

視界が晴れた後に見えてきたのは、つい先ほどまで一夏に恐怖を与えていた誘拐犯たち、そいつらがかすかなうめき声を上げながら倒れ伏す姿、そして

赤い髪をたなびかせ、両手に白と黒の双剣を持った、少女の姿だった

事態の展開に思考が付いて行かなくなる一夏、目の前の少女が何者なのか、そんな当然の疑問すら浮かばず、茫然としていた。

「大丈夫か、君。待っている、今、戒めを解く」

その言葉通りに、近づいてきた少女が手に持った剣で一夏の戒めを切る。

戒めを解かれ自由になった一夏は、立ち上がりながらいまだまとまらぬ思考の中、とりあえず感謝の言葉を発した。

「ありがとう……助かったよ」

「ふむ、怪我はないようだな。せかすように悪いが早くここを離れよう」

少女の言葉で、一夏ははまだ安心できる状況ではないことに気付く。そうだ、誘拐犯たちの仲間がまだいるかもしれない、一刻も早く安全な場所に行かないとまずい。

「うん、わかった、早くここから」

「そううまくいくと思ってんのか？ 糞餓鬼ども」

一夏と少女の目論見は、第三者の声であっけなく打ち砕かれた。声の方向にいたのは一人の女性、ただし、ただの女性ではなかった。背部から八本の装甲脚をはやした、機械の鎧、それは間違いなく世界最強の兵器

ISだった

もはや一夏の精神は限界だった、ISなんか出てきたらもうお終いだ、ここで俺は死ぬんだと、生き残ることさえあきらめていた。

そんな一夏をかばうように、少女が一夏の前に、まるであのISから守るように立ち塞がった

あまりにも理解できない行動、これじゃまるで少女がISと戦うみたいじゃないか。

そんなの無茶だー！　そう言おうとした一夏に対し少女は振り向き  
「安心しろ少年、君は必ず私が守る」

笑顔でそう言ったのだ。

本来ならそんな言葉、妄言の類だ、いったいどこの誰がそんな言葉を信じるだろう。  
けど、一夏には、少女のその言葉を妄言とは思えなかった。  
理屈も何もかもなく、まるでアニメとかに出てくる正義の味方のよ  
うな頼もしさを一夏は感じていた。

だから、そんな彼女を応援するために

「がんばれよー！！　正義の味方が患者になんか負けるなー！！」

なんて言ったのだ

その言葉をどう感じたのか、少女は苦笑して

「フツ、そこまで期待されてしまったては無様はさせないな。全力を持って応えとしよう」

そんなことを言いつつ、改めてISと向き合った。

|||||

「世迷言は終わりか、餓鬼ども」

志保の目の前には、殺気を纏いまるでこちらを射殺さんとはかりに睨みつける女、ISを纏ったその姿は正に、形状も相まって悪鬼羅刹をほうふつとさせる。

「辞世の句など詠んだ覚えはないのだがね」

「なめてんのかテメエ、織斑一夏はともかくテメエはどうでもいい、さつきから世迷言いつてくれた礼だ………あの世に行つて来いや  
！！」

憤怒の言葉とともに、女はISの装甲脚のうちの一本をこちらに振り下ろす、轟音とともに振り下ろされる大質量のそれは、今の自分

どころか、大の男すら直撃すれば血肉をあたり一帯にまき散らすだろう。

もちろん、志保にはそんな代物、直撃させてやる義理など寸毫もない。

両手に持った双剣で、直に防御するのではなく、攻撃が当たる瞬間に刃をひねり力をいなくす。

ベクトルをそらされた一撃は、志保ではなく足元の地面にあたり、小さなクレーターを作るにとどまった。

「ハッ！！ やるじゃねえか餓鬼イ！！」

今の回避を偶然ととらえたのか、女は嘲るような笑みを浮かべながら地面にたたきつけた装甲脚を振り上げる、再び迫る死の一撃、しかし、それもまた双剣によっていなされ空振りに終わる。

「糞つたれ！！ 往生際が悪いんだよ餓鬼イ！！」

二度も不発に終わったことに業を煮やしたのか女は、装甲脚をもう一本攻撃に加える。

八本すべてを攻撃に使わないのは、ISに乗りながら生身の少女に全力を揮うことをよしとしなかったからか、いずれにせよ、攻撃の手が二本に増えたところで志保には意味はなかった。

二対の旋風、一人一人など木っ端みじんにしかねないそれ、事実、地面にたたきつけられるそれは小さいながらもクレーターを作り、床に散らばる廃材をまるで飴細工のようにひしゃげさせる。

しかし、それを志保はいなし続ける、すぐ目の前に絶死の鋼の旋風が通り過ぎても眉ひとつ変えず、冷淡に、冷静に、まるで単純な流れ作業をやっていると言わんばかりに攻撃をいなし続ける。

さすがに傷一つ負ってないというわけにはいかず、頬や腕などには切り傷がいくつもできているが、さほどダメージを追ってないのは

最初と変わらぬ体捌きを見れば一目瞭然だった。

「全く、こんなガキに本気で行くことになるとはよおっ!!」

さすがに、ここまでくれば女も出し惜しみをしている余裕はなかった。

一夏と志保は知らないが、この女、オータムの目的は一夏の誘拐そのものではない。本来の目的は一夏の姉、織斑千冬をおびき出すことだ。

第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』の決勝戦を棄権させて

そう、今回の事件の黒幕はドイツの一部の軍高官、ISによって日本に軍事的イニシアチブを取られ続けることを危惧した一部の軍高官が暴走、非合法な手段でもってして日本代表たる織斑千冬の優勝を阻止する。

それがオータムの所属する組織<亡国機業>への依頼だった、つまり、ここに織斑千冬が来ることは最初から想定済みなのだ、当初の予定では適当に金で雇った使い捨ての人員で織斑一夏を誘拐、後は依頼主のほうからころ合いを見計らい織斑千冬に監禁場所を伝える、あくまでオータムはアクシデントが起きた時の保険、なにもする必要などないはずだったのだ。

ところが、どこのだれかも知らぬ少女が現れ、織斑一夏を助け出すなどという超弩級のアクシデントが発生、すぐさまその少女を始末して当初の予定道理に事を運ぼうとしたものの、結果はご覧のとおり、いまだに始末するどころか戦闘などというありえない事態まで起こっているのだ。

強気の言葉を発し、強気の表情でいてもオータムは内心かなり焦っていた。

内心の焦りを隠しオータムは自身の駆るIS<アラクネ>の装甲脚、八本すべてを志保に叩きつける。

さすがにこの数すべては捌けまい、そう判断しての一撃、否、八撃、いくら目の前のガキの技量が並外れていようとそもそも数の差は、二本の腕に対し、四倍の八本、オータムの脳内にはすでに串刺しにされ無残な屍をさらす志保の姿があった。

しかし、その想像、いや、夢想は装甲脚から伝わる衝撃によって霧散した。

「なっ、馬鹿な!!」

驚きの声を上げるオータム、見れば八本の刀剣が、ライフル弾もかくやと言う速度を持って<アラクネ>の装甲脚の攻撃を妨害したのだ。しかもその刀剣はIS用の武装というわけでもない、古めかしい装飾を施した、むしろ、美術館に展示されているほうがお似合いな代物だ。

そんなものがISの攻撃を防いだ、まるでたちの悪い幻覚を見たかのようにオータムの思考はストップする。

「どうしたんだ？　まるで狸にでも化かされたような顔だが」

今度はそんなオータムをあざ笑うかのように、志保は厭味つたらしくそう言った。

見下すべき子供にそのようなことを言われ、なおかついまだ戦いを演じている自分への不甲斐無さも混じり、これまでになく怒りをあらわにするオータム。

「ふざけてんじゃねえぞおおおつつつ！！ この糞餓鬼がああつ  
！！」

怒号とともに、ついに重火器まで発射し始めたオータム、もはや対人ではなく、対戦車、対IS用の威力のそれは、正に鉄の嵐、触れるものすべて瓦礫に変えんとする死の風だった。

機関砲が廃工場の壁に弾痕を穿ち、グレネードが紅蓮の炎を巻き上げる、そんな中では、誰だって生き残れない、その筈だ、その筈なのだ！！

そんな中を志保は走る、走る、走る！！

少しでも足を緩めれば、志保の体などまたたきの間に弾丸に砕かれ、紅蓮の炎に焼かれ消し炭すら残らないだろう。

それでも志保はその猛攻を、自身の異能によって作り上げる刀剣を盾として駆使し、猛攻のわずかな隙を見切り、たぐいまれなる目を持ってオータムの視線からすら射線を読み取って、自身のありとあらゆる技能を以って回避し続けていた。

本来、人一人など即座に絶命してしかるべき攻撃の中を生き伸び続ける志保、余人には到底なしえぬそれは、なにも知らぬ一夏やオータムにとっしてみれば、変な言い方だが奇跡と言つていいほどで、しかし、衛宮士郎の経験・知識・技能を持つ志保にしてみれば、この程度、為し得て当然のことだった。

「っつ、のおおおおつつ！！ いい加減に死ねええッ！！」

その奇跡、オータムにとってしてみれば悪夢のその光景、もはや焦りを隠すことすらできなくなっていた。

当然、そこまで余裕がなくなれば、攻撃も精細を欠く、志保を殺すことしか頭になかったオータムはつい、一か所に過剰な攻撃をしまい、舞い上がる爆炎で自身の視界をふさいでしまう。

その一瞬のすきを見逃す衛宮志保ではなかった

爆炎にまぎれる形で志保は、自身の背後から刀剣を射出、目標はオータム ではなくその真上、廃工場の天井だった。

いくらオータムが、激昂しながらも建物の崩落による自滅、などという馬鹿を仕出かさないようにしていたとしても、これだけの攻撃で建物にはかなりのダメージが蓄積されていた。

志保はそこをつき、射出した剣弾で天井の一部を崩落させたのだ。圧倒的な質量を持つそれは、志保の剣弾で限界を超え、重力に引かれまっさかさまに落下した。

この戦闘で起こったどんな音よりも激しい轟音を響かせ、瓦礫はオータムを押しつぶさんとする。

ISのシールドエネルギーを大幅に消耗しながらも、何とか上半身を出したオータムは自分の体を舐める濃厚な、もはや、物理的な衝撃すら持ちえそうな死の気配を感じ取った

「 I am the bone of my sword .  
<わが骨子は捻じれ狂つ>」

志保は、厳かな雰囲気で、言霊を紡ぐ。

それは、奇跡の具現、神話の再現、衛宮志保の裡に内包された異能を発現させる鍵。

詠唱とともに、志保の手には黒塗りの弓と、見るものすべてに強烈な印象を与える捻じれた剣が顕現していた。

それを見たオータムは本能で、その危険を感じ取っていた。体の裡から、細胞一つ一つが警鐘を鳴らし、ニゲロニゲロニゲロ、と脳内がその一言で埋め尽くされた。

オータムはとつさに、装甲脚をすべてパージ、パージしたそれをすべて自爆させると同時に、瞬時加速<イグニションブースト>を行う、爆風の圧力すらも利用し目の前の死から逃れようとした。

そして、オータムが回避機動をとると同時に、志保が最後の言霊を紡ぐ。

「偽・螺旋剣<カラドボルグ>」

その名は、ケルト神話に記された『堅き稲妻』の意を持つ剣、志保の持つ弓から放たれたそれは、名に恥じぬ轟音を纏い、大気を捻じり、切り裂きながら突き進む。

そして一瞬前までオータムをからめとっていた瓦礫を粉碎し、オー

タムのわずかに横を通り過ぎ、廃工場の壁に大穴をあけながら遙か彼方へと消え去っていった。

オータムは直撃こそは避けたものの、余波で体中がズタボロになり、ISのほうも機能停止寸前にまで追い込まれた、もはやこれ以上の場にとどまってはマズイ、そう判断して先ほどの一撃の余波にまぎれる形で逃走した。

「やつは殺す、いつか殺す、必ず殺す……………」

復讐を誓う、呪詛をのこしながら

|||||

「……………逃げられたか」

少女の呟きで、一夏はあのISをまとった女性が逃げたのだと理解した。

しかし、ついさっきまで繰り広げられていた光景に、これは夢じゃないのか、そんなことまで思ってしまう。

思はず頬をつねり、痛みを感じ取るとようやくこれが現実だと理解した。

「さて、これだけ暴れたのだ、いつここが崩落してもおかしくない、さっさと外に出よう」

「あ、ああ……………」

そういう少女に対し、生返事しかできない一夏、外に出てみれば空はもう夕焼けだった。

「さすがにもう、誘拐犯の仲間はいないみたいだな。そろそろ私も立ち去るとしよう」

「えっ、もう行っっちゃうのか？」

一仕事を終えたのだから、あとは帰るだけ、そんな感じで少女はそう言った。

一夏はせめてちゃんとお礼をしたかったのだが、これほどのことをした少女が公の場に姿をさらしたくないのだと気づく。だからせめて、感謝の言葉くらいちゃんと伝えよう。

「あの……、今日はほんとにありがとう、おかげで助かった、えっ  
と」

そこで一夏はようやく、目の前の少女の名前すら知らないことに気づく。

「残念だが、名前も秘密にさせてもらおう、感謝の気持ちだけでもありがたくもらっておくことにしよう」

「そっか、わかったよ」

「ああ、そうしてくれ、今日の話は、通りすがりの正義の味方にも助けられたと思っておけばいいさ」

冗談めかして言う彼女の言葉に、つい笑いがこみあげてきそうになる。

「その様子じゃあ、もう大丈夫そうだな」



## 第2話

勝者、白っ!!

日本武道館で行われている剣道の全国大会、中学三年男子の部の予選で一人の少年が勝ちを収めた。一礼し、試合場から出た少年は、おもむろに防具を外した。  
防具を外した少年は。スポーツドリンクを飲みながら、タオルで試合で流した汗をぬぐう、その少年は、数年前、ドイツで志保に助けられた織斑一夏だった。

あの事件の後、一夏はドイツ政府から事情聴取を受けたものの、あの場で何があったかは黙して語らず、ドイツ側も、調査の過程で犯行に軍高官の一部がかかわっていたことが判明したため、被害者である一夏にあまり強気な追及はできなかつたため、被害者の少年は事件のショックで一時的な記憶喪失ということで、決着をつけたのだった。

一夏のほうは、誘拐されたからといって生活環境に変化があったわけでもなかった。

唯一、変わったところといえば、自分を助けてくれた少女に憧れ、これまで以上に剣の鍛錬に力を入れたぐらいだ。しかし、そのかいもあってこうして剣道の全国大会に出場できるまでになっていた。

予選を数回突破し、次の試合が始まるまで休憩していた一夏は、ふ

と視界に入った女の子の後姿が気になった。

長い黒髪をポニーテールにまとめ、白いリボンを結んだあの姿は

「……………もしかして、箒か？」

その姿に心当たりがあった俺は、その子に声をかけたのだった。

「ごめん君、ちょっといいかな？」

自分から言ってなんだけど、これじゃナンパだな

自身の語彙の貧弱さに、少しばかり辟易しつつ振り向いた女の子の顔を確認する、その子はやはり

||||||||||||||||||||

「ごめん君、ちょっといいかな？」

その声を聞いた時、篠ノ之箒は

よもや、こんな場所でナンパをする阿呆がいるとはな

せめて場所を選べ、そう注意しようと振り向き

「こんな場所で……………えっ!？」

振り向いた箒の目に飛び込んできたのは、片思いの人物、たとえ最

後にあったのは小学生だったとしても、決して見間違えようはずもない。

「……………い、一夏なのか？」

震えた声でそう言うのが精いっぱいだった、思わぬところで再会した思い人を前にして心臓はうるさいくらいにドキドキしっぱなしで、今の自分を鏡で見れば盛大に顔を真っ赤にしているだろう。

そんな自分の心情など意にも介さず、一夏はかつてと変わらぬ感じで笑顔を浮かべ

「おっ、やっぱり箒か〜ひさしぶりだな」

なんて言う、もうちょっと何か気のきいたことを言ってほしいと思うが、同時に思い人の笑顔に見とれてしまふ。

「いや、まさかこんな所で箒にあうとは思わなかった、ここにいるってことは箒も大会に出場しているのか？」

「あっ、ああ個人戦だな」

「そっか箒の腕前だったら優勝も夢じゃないかもな、時間の都合がつけば箒の試合応援しに行くよ」

「ほ、本当か!？」

「こんなことで嘘をつくわけないだろ」

いまだ頭の中はぐちゃぐちゃで、まともに言葉を発せなかったが、一夏の一言を聞いて混乱が解けた。

片想いの相手が自分を応援してくれる、降ってわいた幸運に心は晴れやかな気持ちになり、これまでにないくらい力がみなぎってくる。そうだ、一夏が応援してくれるのだ、ならば、優勝ぐらいできなく

てどうする！！

「ありがとう！！ 一夏が応援してくれるのならば百人力だ、私も一夏の試合を応援しに行くから負けるなよ！！」

「こつちも箒の応援があるなら百人力だ、二人一緒に優勝目指そうぜ！！」

「ああ、勿論だ」

この会話だけで大会に出てよかったと、心の底から思う箒だった。そして箒は、順当に勝ち進み決勝戦にまでたどり着く、礼をかわし、竹刀を相手に構える箒の視界の端には、約束通り、一夏の姿があった。全国大会の決勝戦ともなれば周囲の喧騒は凄まじいのだが、それでも、一夏の応援はしっかりと箒の耳に飛び込んできた。

頑張れよ箒、お前なら勝てる！！

その言葉は、ありふれた、陳腐な言葉だが箒にとっては、無敵の力を与えてくれる魔法の言葉だった。

その力をすべてため、箒は眼前の相手に竹刀を打ちこむ、そしてしばらくの後

勝者、赤！！

審判の宣言で勝者が告げられた。

|||||

全ての試合が終わり、表彰式が執り行われる。

勿論、表彰台の天辺には一夏と篤の姿があつた、二人とも個人戦で一位を収め、部活の仲間たちからは惜しみない称賛が贈られた。そして二人はこっそりと抜けだし、会場の裏手に来ていた。あたりに人影はなく、ここにいるのは一夏と篤だけ

「よかつたな篤、優勝なんてすごいじゃないか」

「一夏のおかげだ、一夏だって優勝おめでとう」

「篤が優勝したんだ、俺も優勝ぐらいしないと格好付かないからな」

お互い優勝を祝福していると、おもむろに一夏が携帯電話を取り出す。

「そうだ篤、今日の記念に一緒に写真を撮ろうぜ」

「いつ、一緒にか」

いきなりの発言に、篤は戸惑いを隠せない。

「だって俺たち数年ぶりに再会して、しかも二人とも優勝したんだぜ。何か記念に残しとかないともったいないじゃないか」

そう言つて密着してくる一夏、篤はいきなりのことに顔が真っ赤になる、吐息が当たりそうなくらいに思い人の顔がある、恋する乙女としては当然の反応だろう。

「じゃあ撮るぜ篤」

「……あつ、ああ」

そして携帯のフラッシュが輝き、ディスプレイには二人の写真が表

示された、それを一夏は箒の携帯にも転送する、自分の携帯に映し出される写真に、箒はつい顔がゆるみそうになる。

そこに一夏の携帯に着信が入る、一夏は携帯の表示を見ながら「やっべ、先生が呼んでる」と呟いていた。

「悪い箒、部活の先生が呼んでるみたいだ、そろそろ俺は行くよ」

「そうか、それならば仕方無いな……………」

やってきた別れに名残惜しさを感じる箒、今の箒の環境では今度はいつ会えるかわからない、そのことに深く沈鬱な気持ちになる。

その箒の表情を見てとった一夏は、こちらを元気づけるつもりなのか笑顔を浮かべた

「そう落ち込むなって、俺もまた箒としばらく会えないと思うと寂しいけどさ、今日みたいにいつかまた会えるさ」

そうだ、一夏の言うとおりだ、今日だってまさか一夏と会えるとは思っていなかったんだから、いつかまた会える日も来るだろう。

「じゃあな箒、またいつか会おうぜ」

「ああ、私もまた一夏に会える日を楽しみにしているぞ」

別れのあいさつを済ませると、一夏は部活の先生の元へ行くのだろう、あわてて走り去って行った。

それを見送った箒は、手元にある携帯、それに写る写真をまた見た、さっきとちがって今は箒以外誰もいない、そのせいで顔がにやけるのを隠そうとしない。

今にも踊りだしそうなくらいうれしそうなお表情で、箒はしばらくの間写真を見つめていた。

それは、部活の仲間が箒を探しに来るまで続き、当然写真も見られ、箒は帰り道で部活の仲間から盛大にからかわれていた。

|||||

翌年、IS操縦者を育てる学校、通称IS学園の一年一組の教室で、盛大に突っ伏している一人の男子生徒、本来女性にしか扱えぬはずのIS、当然、その操縦者を育てるIS学園は女子高である、たった一人しかいない男子生徒に、周囲の女生徒の視線が誇張なくすべて集中していた。

その男子生徒、織斑一夏がここにいるのは、出来てしまったからだ、本来女性にしか操縦できぬはずのISをだ、当然そんな人物が普通の高校になど入学できるはずもなく、このIS学園に入学させられてしまったのだ。

そんな一夏に声をかける、一人の女生徒

「確かに再会を約束したが、まさかこんな所で再会するとは思わなかったぞ」

「そりゃ俺も同感だ……」

「……………で、何故、ISなど操縦できたんだ」

「俺もわかんねえ……実はさ、高校受験の会場間違えてIS学園の受験会場に行っちゃって、気付いたらISに乗って試験官と戦って勝っちゃって、そんでめでたくIS学園入学おめでとぅってわけだ」

ちなみに試験官との戦いの顛末はというと、あまりにも無防備に突っ込んできた試験官の顔面に、つい反射的に一夏がブレードの一撃を決めてしまい、その場外ホームランにでもなりそうな一撃で試験

官のISの絶対防御が発動したのである。

それを聞いた篤はあきれ顔で

「馬鹿かお前は……………、去年の私のとときめきを返せ……………」

「ん？ 悪い最後のほう聞こえなかった、なんて言ったんだ？」

「別に、何も言っていない」

急にそっぽを向き拗ねてしまった篤と、それをなだめる一夏、はたから見ればまるつきり拗ねた恋人をなだめる彼氏にしか見えない、そんな一夏に声をかける人物がいた。

「ちょっと、よろしくて」

声をかけたのは、綺麗な金髪を縦ロールにした、いかにも名家のお嬢様といった雰囲気を持つ女生徒だった、その女生徒に見覚えのない一夏は、当然女生徒に素性を尋ねた。

「え〜と、君は？」

しかし、女生徒の中では、自分の名前など知っていてしかるべきという認識があつたのか、声を荒げ。

「まあっ！！ このセシリア・オルコットを知らないですって、イギリスの代表候補生、かつ入試主席であるこの私を！！」

無論一夏とて代表候補生という制度くらいは知っているが

「いや、そんなことを言われてもな、国家代表ならいざ知らず、代表候補生の名前まで覚えてるっていうのは、かなり無茶だと思うん

だが？」

「な……………、なんですって!!」

一夏の返しに一瞬絶句した女生徒、セシリアはものすごい剣幕を見せるものの

「じゃあ聞くけど、セシリアさんは世界各国の代表候補生の顔と名前記憶しているのか？」

「はい?……………」

一夏にその意思はなくとも放ってしまった、特大級のクロスカウナーに沈黙せざるを得なかった。

当然そんなもの、いくらセシリアでも記憶しているはずもなく、次第にその顔が赤く染まっていき。

「……………おっ」

「お?」

「覚えていなさい、この屈辱は必ず晴らしますわ……………」

陳腐な捨て台詞をのこし、金の縦ロールをなびかせながら教室から走り去って行った。

「なんだっ たんだ、あれ……………」

「私に聞くな……………」

後に残された一夏と篤は、ただただ茫然としているだけだった。

### 第3話

「納得いきませんわ!!!!!!」

教室にセシリア・オルコットの怒声が響き渡った。原因は数分前にさかのぼる。

「では、クラス代表を決めたいと思う、自薦・他薦は問わん、誰か候補はいるか？」

教壇に立つスーツ姿の麗人、織斑一夏の姉にして世界最強のIS操縦者、織斑千冬の凜とした声が教室に響く。

それに対し、幾人かの生徒が「織斑一夏君がいいと思います!!」と、非常に気楽なノリで答える。

仮にも、一年間クラスの代表となる人物を、そんな物珍しさだけで決めてしまえば当然、反感を抱くものが出てくる。

ただISに乗れるだけ、その一点のみで自分より上に立たれしまう。イギリス代表候補生セシリア・オルコットにしてみれば、自他共に認める高い能力、素質だけでなく努力もあつて得たそれを、そんな下らぬことでけなされたように感じたのだ。

そして、数時間前に織斑一夏に赤っ恥をかかされ（セシリアはそう認識している、ほとんど自業自得だが）、その時の怒りも合わさり、セシリアの堪忍袋の緒は、脳内で盛大に音を立てちぎれ飛んだ。

その結果が先ほどの怒声である。そしてその怒りは勿論、一夏へと向けられた。

「実力から言っても、この私こそがクラス代表にふさわしいのは自明の理、それを珍しさだけで選ぶなど不謹慎極まりないですわ！」

この発言には一夏も内心、大いに同意していた。一夏も詳しくは把握しているわけではないが、クラス代表は各種の試合において文字通りクラスの代表となるのだ、ほとんど素人の自分になったところで自分、引いてはクラスメイト全員に恥をかかせるだけに終わるだろうと、だからこそ、イギリス代表候補生たるセシリアがクラス代表になるのは、一夏にとっても自然な流れだった。

ここで終わればそれでお終いだっただが、悲しいことにセシリアという少女は結構歯止めが利かない性格なので、ついつい余計なことまで言ってしまったのだ。

「だいたいこの国に来たのもISの技術を学ぶためであって、断じて！！ その猿と一緒に見世物になるためではありませんわ！！  
ただでさえ文化として後進的なこの国で暮らすこと自体、私にとつては苦痛だというの」

勿論、セシリアは本気で日本という国を見下しているわけではない、単なる勢いだ。

だがそれでも、槍玉に挙げられている一夏にとってはいい気分では

なく

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

つい口からこぼれた一夏の反論は、事態を致命的に悪化させた。

「 なっ！？ あっ、あっ、あなたねえ！ 私の祖国を侮辱しますの！？ 」

怒髪天を突く、そんな表現がぴったりなほど、怒りをあらわにするセシリア。一夏のほうもセシリアのこれまでの言動や、まだ一日しか経ってないとはいえ周囲の女子から、まるで見世物のように見られていたせいで少々虫の居所が悪かった。

「侮辱って、じゃああなたの言動は侮辱じゃないってのか。ちょっとぐらい自分の言動見直したらどうだ」

「そこまで言われてはもう、我慢がなりませんわ。こうなれば

「こうなれば、どうするんだ？」

「決闘ですわ！！」

「いいぜ、四の五の言うよりそっちのほうか、後腐れなく片がつきそうだ」

たがいにヒートアップする両者、そこに教壇から割り込む声があった。

「話をついたようだな、では、織斑とオルコットの試合を行い、勝者をクラス代表に任命する、異論はないな」

「異論などありませんわ!!」

「こっちも異論なしだ!!」

こうして、織斑一夏とセシリアオルコットの試合が決定した。しかし、世界最強の兵器であるISを使うとはいえ、その実態は子供の喧嘩と何ら変わりはしなかった。

|||||

放課後、日も沈み始めたころ。

IS学園の敷地内にある学生寮の一室で、一人の男子が少女を押し倒していた。

少女の恰好は全裸であり、シャワーを浴びた直後のせいで顔はわずかに赤く染まり、綺麗な黒髪はしっとりとした艶を持っていた、胸元にはたわわに実った二つの果実が激しい自己主張をし、シャンプーの香りなのだろうか仄かな柑橘系の香りもしている。

その男女の名前は当然、織斑一夏と篠ノ之箒だ。二人の様子は、傍

から見ればこれから情事に及ぶとしか思えなかった。

こんな状況になった理由は、少し前に一夏の部屋が決まったが原因だ。

部屋が決まる　一夏はここが女子高なので割り当てられたのは一人部屋と予想　ノックもせずに部屋に入る　シャワーから上がったばかりの全裸の箒とエンカウント　羞恥からとっさに木刀を揮おうとした箒を一夏が止めようとした　そのままもみ合った結果今に至る

いっそ見事といえるようなラブコメっぷりだった、一夏の親友である五反田弾がこれを見れば、血涙を流しながらいい笑顔で「MO

GE　RO!」ということ必至だろう。

じっと見つめ合い停止している両者、たがいに顔はリンゴのように真っ赤だ。

そんな中で、先ほど木刀を揮おうとしたとは思えないぐらいに、箒は消え入りそうな声を出した。

「……………そろそろ、どいてくれないか一夏」

「……………あっ、ああ」

だがいにぎくしゃくとした動きで、体勢を立て直す二人。

起き上がったも顔を直視するのが恥ずかしいのか、テーブルをはさんで背中合わせに座っている。

「その、……ごめん箒。まさか同居人がいるとは思ってなくてさ」  
「い、いや、こっちこそ不用心な姿で出てしまったからな、おまけに木刀まで持ち出して暴れるなんて……私のほうこそすまなかつた」

一言二言交わしただけで沈黙する二人、お互い親しい異性とあんなにも密着したのだ（ただし、箒のほうは片思いの相手だが、一夏のほうは仲の良い幼馴染でとどまっている）、おまけに二人とも思春期の真っ只中、いろいろと想像してしまい、ますます顔を真っ赤にしていた。

「あ、あ、箒」

「あ、あ、一夏」

意を決して口を開いても、タイミングが被ったせいでまたもや沈黙する二人。

「い、一夏のほうから言ってくれ」

「あ、ああ、悪いな箒。……その、男子が同居人でいろいろやりにくいと思うけど、これからもよろしく頼む」

「こ、こちらこそ、よろしく頼む一夏」

「ありがとう箒、後……ひとつ頼みごとがあるんだけど、いいか？」

「頼みごと？ 私にできる範囲ならば構わないぞ」

一夏の突然の発言、だが箒にとっては一夏に頼られるのはまんざらでもないようだった。しかし

「おおっ、ほんとか箒」

「ああ、ほかならぬ一夏の頼みだからな」

「実はさ、俺にISのことを教えてほしいんだ」

「えっ!?!」

一夏の頼みごとの内容を聞いて、硬直する箒、いくらISの開発者である篠ノ之束の妹である箒とはいえ、ISそのものに関しては、ほかの一般生徒と変わらぬ知識しか持つておらず、操縦経験に関してもいまだ箒は一年生、僅かばかりしかない。

「どうしたんだ、いきなりそんなことを言っつて」

「今日のHRで、俺とセシリアの試合が決まっただろ。だけど俺、ISに乗ったのって一回しかないんだよ、だから誰かに教えてもらわないと話にならないからな」

「そうか、だが」

落ち込んだ様子で、一夏に向き直った箒は、うつむきながら自身の不甲斐無さに齒噛みしていた。

「だけど、私には姉さん並みの知識があるわけでもないし、IS適性だっつて、一夏の力になれないと思う」

そんな箒に対し、一夏も箒に向き直り

「そんなことないさ、箒が協力してくれるんなら百人力だよ。ISの知識とか適性なんて関係ない、だから協力してくれるか箒」

一夏のその言葉、箒のISの知識や経験ではなく、箒自身の力が必要だと、そういわれた箒はうれしさで、さっきの暗い雰囲気などまったく間に消失していた、好きな相手からこれほどまでに求められる、それだけで歓喜が箒の体中を満たしていた。

「そこまで言われては仕方ないな、微力ながら力を貸そう」

「本当か!!」

「ああ、二言はない」

「ありがとな、箒 これで希望が見えてきたぜ!!」

「全く、調子のいいやつだな一夏は」

心強い助っ人を得られたことで喜びのあまりつい、箒の両手を握りしめた一夏、箒のほうも一瞬面くらったもののまんざらではないように、口では一夏をたしなめつつもその顔には笑みが浮かんでいた。

ここでひとつ、重要なことがある。

一夏の恰好は普通の制服姿だが、箒のほうは先ほどの一件のせいでバスタオル一枚というありさまだ。つまり、どうということかというところ

一夏が箒の手を握った拍子に、止め方が甘かったのかずれ落ちるバスタオル、身を隠すものがすべて取り払われ、文字通り一糸まとわぬ姿となる箒。

再び顔を真っ赤にしてフリーズする両者、先に再起動を果たしたのは箒だった。

「見るな！！ 一夏の馬鹿っ！！」

「ちよ、まつ!?!」

直後、部屋に平手打ちの音が綺麗に響き渡った。

|||||

同時刻、学生寮の屋上に佇む一人の生徒の姿があった。

赤い髪が夜風に舞い、その鋭い眼差しは空の彼方を見据えていた。その生徒の名前は衛宮志保、数年前にドイツで一夏を救い、今はこうしてIS学園に在籍している。

目的は、今後ドイツのようにISと対峙する可能性がある今、ISに対抗するための手段を構築するため、それだけの筈だったのだが

、予想外の事態が起こった。

それはもちろん世界初の男性のIS操縦者、織斑一夏の登場だ。

今は一介の学生にしか過ぎない彼女だが、かつて幾多の戦場を駆け抜けた経験が、ひとつの予感を導いていた。

「世界が、動くな」

彼女の第六感は、世界初の男性のIS操縦者、織斑一夏の登場をきっかけに何かでかいものが動くと、そう確信していた。

「どう動くべきかな、静観か、それとも」

志保のその呟きは、夜の闇に溶けて行った。

|||||

同時刻、どことも知れぬ研究室

暗闇の中、多種多様なディスプレイだけが光を放つ、そんな中に一

人の女性がいた。

かわいらしい衣服を身に纏い、頭にはなぜかウサギの耳を模した力  
チューシャがついていた。

機嫌良く鼻歌を歌いながらも、その両手は高速で動き大量のデータ  
を処理していた。

だが、その動きもあるデータを見て動きを止める。それは今年度の  
IS学園の入学生のリストだ。

今年はIS学園に織斑一夏が入学するせいで、様々な組織が動く  
と予想していた彼女はいろいろと警戒していたのだが、そんな中、予  
想外の人物をリストの中に見つけたのだ。

彼女の存在を知ったのは数年前、一夏を誘拐した犯人を独自に調査  
していた時に知ったのだ。

ISを生身で撃破した規格外の存在である彼女を

そう、魔術、彼女はその存在を知っている。

かつて幼い頃に出会い、自分の世界を広げてくれたあの老人、その  
人に連れられたことは異なる世界。

そこで目にした異能、 魔術

世界に満ちる力、魔力を使い、様々な現象を引き起こす技術

そして彼女は、その魔術に見覚えがあった。

あの世界で出会った中で、一番理解不能だった人物。

正義の味方、そんなものを目指し続けた一人の男、かつて幼いころ  
に一回出会っただけだが、それでも強烈な印象を残した彼、もしこ  
の少女が、彼と同一人物ならば、これからどういう風に動くのか非  
常に興味があった。

だからこそ接触せずにいたのだが、あのあと何ら行動を起こさず、少々落胆したものだ

「うむ、まさかいつくんと同じくIS学園に入学するとはね、面白いことになりそうだね!!」

笑顔を浮かべながらそんなことを言う彼女、しかしその直後笑顔を消し、真剣な表情でモニターを見据える。

「さてと、これから世界は大きく動く、そんな中であなたはどうかのかな。衛宮志保、いや、衛宮士郎<正義の味方>」

歴史を刻む歯車はこのとき、音もなくそのギアを上げたのだ  
た

## 第4話

入学初日の夜、少々のハプニングはあったものの、一夏と篤は寮の自室でセシリアとの試合の対策を話し合っていた。

「しかし一夏、対策といってもどこから手をつけようか」

「そうだよなあ、俺の場合、何一つとして決めるためのとっかかりがないからなあ」

「そもそも、ISの本格的な試合は目にしたことがあるのか？ 知識のみと実際に目にするこの差は大きいぞ」

「ISの試合か……千冬姉はとにかく俺をISから遠ざけようとしてたみたいだからな、ほとんど見たことがねえ」

「ほとんど？ ならば一回ぐらいは見たことがあるのか」

その篤の問いに、一夏は盛大に顔をしかめ

「いや……………、あれはあれで参考にならないな。もうなんつーか、斜め上どころか異次元突入してんじゃねーの、ってぐらい無茶苦茶だからな、あれは」

一夏の脳裏に浮かぶのは、数年前のドイツの事件。

あのときは助けられたことへの感謝と、繰り広げた戦いのカッコよさしか頭になかったが、時がたつにつれてあれがどれほど出鱈目なのかを理解していった。

もし仮に、ここIS学園で「生身でISを撃破するにはどうすればいいですか?」と聞こうものなら、全員口をそろえて「何言ってるの、ひょっとして新手のジョーク?」と、変なものを見る目で言われること間違いなしだろう。

「一体お前はどんな体験をしたんだ……………」

「言っても多分信じられないだろうから言わない」

「そう言われると余計気になるんだが……………」

「じゃあ正直に言おう」

そう言っただけで居住まいを直す一夏につられ、箒も緊張した面持ちで続きを待った。

「幼いころの織斑一夏は、正体不明の謎の組織の誘拐されたが、通りすがりの正義の味方の少女に助けられた、安堵する一夏だったがそこに謎の組織がISを出してくる。……………恐怖におのく一夏、だがしかし、正義の味方が不思議な力を使い、生身でISを撃破したのだ!」

真面目な表情で、まるで特撮番組のナレーションのようなノリで話す一夏。

その顔面に、容赦のない箒の右ストレートが突き刺さった。

「ぶげらっ!?!」

「真面目に話さんかっ!?! この馬鹿ものっ!?!」

一応、一夏は嘘を言っていない。ただ、真実があまりにも嘘臭すぎるだけだった。

顔を抑えながら、痛みで悶える一夏を見ながら、箒は脱線した話の流れを切り替える。

「馬鹿な話はこちらまでにして、そもそも一夏、試合当日はどんなI Sに乗るんだ？」

「それに関しては千冬姉が、俺の専用機を用意しているって言うってたな」

「ほう…どんな機体なんだ？」

「あゝ悪い、聞きそびれた、明日にでも千冬姉に聞いてくる」

「そうか、ならこの話の続きは明日だな」

## 翌日

昼休み、校舎の屋上で二人は昼食をとりながら、昨日の話の続きをしていた。

ちなみに昼食は、一夏が朝早く起きて作ったお弁当だ。試合に関して箒が助力してくれることへの礼だそうだ、何かと家を空けがちな千冬に変わり、長年家事をこなしてきた一夏手製の弁当は、見た目からして食欲を誘う珠玉の出来だった。

彩りと栄養のバランスもしっかりしている思い人のお手製弁当を見ながら、箒は複雑な心境だった、確かに一夏が弁当を作ってくれたのはうれしいが、……………普通逆じゃないだろうか。

自分がお手製の弁当を作り、それを一夏に食べてもらい「おいしい

よ、箸」とか言ってもらう、幾度か想像したシチュエーションは、ほかならぬ一夏の手によって碎かれた。箸がなかなか進まない箸を心配したのか、一夏が声をかける。

「どうしたんだ箸、食欲がないのか？」

「い、いや、そんなことはない、どのおかずもおいしそうだからな。どれから箸を付けようか迷っていたんだ」

「そっか、今回ののはどのおかずも自信作だからな、どんどん食べてくれ」

「うむ、いただきます」

そうして箸はまず、卵焼きから口に含んだ。しっかりと出汁が利いた卵焼きはおいしかった、出汁とは違う塩味がするのはきつと箸の気のせいだろう、卵焼きを噛み締める箸の目元に光るものがあったかは定かではない。

涙が出そうなくらいにおいしかった弁当を食べ終えた箸は、昨日の懸案事項の結果を一夏に尋ねた。

「それで、一夏の専用機の詳細は分かったのか？」

箸の問いに、一夏は頭を抱えながら、至極真面目な雰囲気です極阿呆な答えを言った。

「なあ箒、 初心者いじめって許されざる行為だよな」

「はあ？ いきなり何を言ってるんだ一夏」

「たとえばロボットゲームでチュートリアルもなしにいきなりステージが始まったり、最初のステージにもかかわらずかなり強いボスキャラが配置されてたり」

「だから何を言って」

いきなりわけのわからぬ、いや、一部の者には多いに賛同することを言いだした一夏に、箒は怪訝な目を向けるが、続く一夏の言葉に箒も頭を抱えそうになった。

「俺の機体、武装が接近戦用ブレード一本だつてよ、おまけに武装は追加できないという、涙が出るほどありがたい仕様だ」

「……………それは、新手のいじめか？」

「だよなあ、誰だつてそう思うよなあ」

そう言いつつ一夏はため息をつく、箒もまさかここまでぶっ飛んだ機体だとは思ってもみなかった。

素人の考えでも、ここはバランスのとれたオールマイティな機体をあてがうのが常道だろうと思う。

機体の詳細が分かれば、それなりに方針は立てられると思ったのだが、余計にどうすればいいか分からなくなってしまった。

「どうすりゃいいかな」

「私が言いたいぞそれは、そんな機体では突っ込んで斬れ、としか言いようがない」

「だよなあ、それしか打つ手がない」

「一応、部活の先輩とかにも、その点を踏まえて話を聞いてみよう」

「ありがとな、篤」

「フフツ、助力するといった手前、これぐらいしないとカッコがつかないだろう」

そう言って微笑む篤に、一夏は少しだけ、試合に勝てる望みを見出した。

## 放課後

「瞬時加速<イグニションブースト>?」

「ああそうだ、それしか手がないな」

その日の夜、夕食を食べ終えた二人は、学生寮の裏手の林にいた。そこで一夏は、篤から耳慣れない単語を聞いた。

篤の説明によれば、瞬時加速とはISのPIC<パツシブイナーション>のPIC<パツシブイナーション>を使用した加速方法で、PICによって慣性を打ち消し、文字通り一瞬でトップスピードに持っていくマニュアルだ。

「つまり、セシリアの攻撃を何とかしのいで、隙を見て瞬時加速を使って懐に潜り込み、一気に斬り伏せろってわけか」

「ああ、しかし訓練機が全部出払っていて、試合前の実機訓練は不可能でな、……一応、瞬時加速に関してのデータは資料室から持つ

てきたから、イメージトレーニングくらいはできるぞ」

そう言つて資料を一夏に手渡す筈、ISの操縦がパイロットのイメージによるところが大きい以上、実機訓練が行えない今、それが最善の手だろう。

「じゃあ、できるのはそのぐらいか」

「いや、もう一つあるぞ」

「へ!？」

間抜けな声を漏らす一夏を、その声を聞きながら筈は脇に置いてあった竹刀袋から、竹刀を二本取り出した。筈はそのうちの一本を一夏に投げ渡す、一夏はそれを危なげなくキヤッチした。

「後出来ることと言つたら、剣を振つて少しでも感を研ぎ澄ませることだ。相手は私が勤めよう、不服か？」

「いや、全然、異論はないぜ」

「そうか、なら……あれから、腕は鈍っていないか見てやるう」

「それはこつちのセリフだぜ、筈!！」

お互い不敵な笑みを浮かべつつ、同時に竹刀を構える二人。それからしばらくの間、夜の林には剣劇の音が鳴り響いていた。

|||||

それから数日が過ぎ、試合当日、一夏はアリーナのピットにいた。後もう少して試合の開始時間だというのに、一夏ははまだISを身に纏っていなかった。

それもそのはず、ようやく今になって届いたからだ、一夏の専用機が、そしていま、待ちに待った一夏の専用機が搬入口から、その姿を現した。

それはく白>だった

白い鎧、そうとしか形容できない機体だった。シンプルな作りのフレームに、背部に浮かぶ一対の非固定部位、一夏はそれを見据えながら確信する。

これは俺の剣、俺の為だけの剣だ

「これが、俺の機体ですか、山田先生」

「そうです、これが織斑君の専用IS<白式>です」

「織斑、ボケっとしていないで、さっさと装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ、出来なければ負けるだけだ、わかったな」

千冬にせかされながら一夏は、まるで主を待ちわびるかのように解

放されている<白式>の装甲の中に、自分の体を潜り込ませる。

<白式>は主の存在を確認し、即座に一夏の体と機体各所を接続する。一夏はまるで、もともと自身の体であるかのような一体感を感じていた。

手や足だけでなく、本来人間の体には備わっていない筈のスラスタ・各種センサーですら、自分の為だけにあつらえたかのように感じられる。

視界に直接投影されるモニターの各種ステータスは、すべて正常を示し、同時に一夏に最適な機体となるために、高速でデータの処理を行っている。それが完了した時こそ、<白式>は新に一夏の専用機となる。

そして、<白式>のレーダーが一つの反応を捕らえる。

<ブルー・ティアーズ>、セシリア・オルコットの駆る第三世代型IS、これから一夏が刃を交える相手だ。

知らず一夏はこぶしを握り、<白式>の腕が鋼の擦れる音を立てた。その音を聞きながら、一夏はこの一週間のことを思い返していた。筈は約束通りに自分のできる範囲で、最大限助力してくれた。しかし、これから戦う相手は代表候補生に選ばれるほどの実力者、自分の勝つ確率は限りなく低いだろう。

だからと言って臆してなんかいられない、勝つにしろ負けるにしろ、筈の思いを無駄にするような無様な戦いだけはしない、そのぐらいの意地は俺にだけあってある。

「じゃあ、行ってくるぜ筈」

一夏は振り返り、後ろにいた箒と向き合いそう言った。

ISのハイパーセンサーのおかげで、今の一夏の視界は三百六十度全方位にあるが、それでも一夏はすっかりと箒を見つめた、無茶な頼み事にも、誠心誠意を持って応えてくれた、大切な幼馴染を

そして箒は、そんな一夏に勝てでもなく、負けるまでもなく、ただ一言

「 がんばれ、一夏」

笑顔を浮かべて、そう言った。

それは一夏にとって、最も心強い加勢に他ならなかった。

そして一夏は、〈白式〉を浮かばせ音もなくアリーナへと向かう、その胸の裡に溢れんばかりの闘志を滾らせて

|||||

そして、アリーナに足を踏み入れた俺は、視線の先にいる一機のI Sを認識した。

「あー、逃げずに来ましたのね」

腰に手を当て、天空に優雅にたたずむセシリア、その容姿と雰囲気はまるで一枚の名画のように、非常に様になっていた。

そのセシリアが纏っているISは、青を主体としたカラーリングに、騎士をイメージさせる四枚のフィン・アーマーを背中に装着した、イギリスの第三世代型IS<ブルー・ティアーズ>だ。

その手にはすでに主兵装である六七口径特殊レーザーライフル<スターライトmk?>が握られているが、セシリアの余裕の表れなのか銃口は下げられたままだ。

「最後のチャンスをおげますわ」

銃口を下げたまま、セシリアは俺を指さしながら言った。しかし、その態度からろくでもないことを言いだすのは明白だった。

「チャンスって？」

「私が一方的に勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿をさらしたくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくってよ」

予想通りのろくでもない言葉、しかしセシリアの様子からして、本気で慈悲のつもりで言っているのだろう。

だからそんな言葉に、俺は馬鹿丁寧に返すつもりは毛頭なかった。

「一週間前にも同じこと言ったけどな、……少しは自分の言動見直したらどうだ、そんなのはチャンスとは言わねえんだよ馬鹿!!」

その俺の啖呵に、セシリアはその白磁のように綺麗な肌を、瞬く間に赤色に染めた。

同時に勢いよく跳ねあげられながらも、ぴったりと俺に狙いをつけるくスターライトmk?>の銃口、独特の甲高い音を立てながら、その内部に光が収束していく。

「フフフツ、円舞曲くワルツ>を躍らせる程度で許して差し上げようと思いましたが、あなたに必要なのはどうやら、鎮魂歌くレクイエム>のようですわね!!」

怒声とともに、銃口の中で荒れ狂う光が解き放たれ、一筋の閃光となってアリーナを突き進む、その到達点はもちろん俺だ。

ISのセンサーがけたたましく警告を鳴らし、俺は機体をひねり何とか直撃こそは避けた、レーザーが通り過ぎた後の装甲には、焼き抉ったような跡が残り、視界に写るディスプレイには今の一撃で減少したシールドエネルギーの数値が表示される。

(とりあえず動く!! 止まってちゃただの的だ)

俺はそう考えく白式>を急速上昇させる。最初の考え通りに今は、とにかく逃げ回る、それしかない。

その間にも閃光はく白式>を貫かんと幾度も放たれる、そのたびに高熱で大気は歪み、く白式>のシールドエネルギーを少しずつ削っていく。

円舞曲<ワルツ>を躍らせる　その言葉通りに、セシリアの絶え間なき苛烈な射撃によって、俺は無様なワルツを踊らされていた。せめて盾の代わりぐらいにはなるだろう、俺はそう思い<白式>唯一の武装、接近戦用のブレードを展開し握りしめる。

「射撃専用のこの機体に、ブレード一本で挑むつもりとは、よほどあなたは無謀な行いが好きなのですね。……………その愚行の付け、身を持って思い知りなさい!!」

しかし、それはセシリアのさらなる怒りを買い、射撃の苛烈さはさらに増し、もともと激しかった弾幕は、まるで流星雨の様相を呈していた。

そんな中をとにかく俺は逃げ回る、ただでさえ一か八かの作戦だが、今はさらにフィッシングが終わるまで耐え抜くというのが追加された、機体が万全でないのに突撃を仕掛けても返り討ちにあつのは目に見えてる。本当にこの試合、初心者いじめにもほどがある。

## 二七分後

「よくもここまで持ちこたえますわね、あなたのそのしぶとさだけは称賛に値しますわ」

少々の呆れを声に含ませながらセシリアは言った、<白式>のダメージは小破程度だが、これまでの一方的な展開は誰の目にもどちら

が優勢か瞭然としていた。

試合開始から今までセシリアには隙はなく、徹底的に自分の距離を維持し、レーザーライフルによる射撃を続けていた。

派手な見た目、言動からは想像つかないその戦い方は堅実そのものだった。

「このままでは埒が明きませんわね、少々癪ですがこれを使って、一気にけりをつけさせていただきますわ」

直後、<ブルー・ティアーズ>の背部のフィン・アーマーが外れ、自律飛行を行う。

その先端には砲口が覗き、明らかに攻撃用のパーツであることが見て取れる。それを見て俺は冷や汗を流した。

(もしかして……………ロボットアニメでおなじみのやつ?)

「お行きなさい、<ブルー・ティアーズ>!!」

いやな予想はえてして当たるもので、セシリアの指示のもと四つの猟犬は主人の敵を打ち砕こうと、鋭角的な機動で俺に向かってきた。そのまま<白式>の上下左右に回り込む四つの猟犬、そして放たれる閃光。

「くっ……………」

その一撃で右肩の装甲と、左足の先端の装甲が打ち砕かれる。その衝撃で俺は体勢を崩すが、無理やりスラスターを全開にし続ける攻撃を何とかよける。

これまでとは違い全方位からの流星雨に〈白式〉は、見る見る間にシールドエネルギーを削られる。

セシリアに踊らされる円舞曲はさらにリズムを早め、一夏の裡の負の二文字が色濃くなってきた。

そんなとき、〈白式〉がディスプレイにある言葉を表示した。

す  
フィットイング完了、一次移行〈ファーストシフト〉開始しま

その一文とともに、〈白式〉は光に包まれた。

光が消えた後には、先ほどの傷だらけの姿ではなく、傷一つなく、洗練されたデザインラインへと変化した〈白式〉の姿があった。

何が起こったのか、一夏も、そして、セシリアも明確に理解していた。

「一次移行〈ファーストシフト〉ですって、……じゃあなたは、今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの!？」

その事実茫然とした言葉を漏らすセシリア、しかし、そこは流石

というべきかすぐに平静を取り戻した。

「ですが、今更劣勢は覆りません。お行きなさい<ブルー・ティアーズ>!!」

そして、再び迫る四つの猟犬、だがそれを見て俺は一つの疑問を抱く。

(もしかして、こいつらは……だったら!!)

そしてその疑問の答えを示すように、放たれた四つのレーザーは先ほどとは違い<白式>に当たることなく虚空を貫いた。

「なっ……いえ、単なるまぐれですわ」

しかしそのセシリアの言葉を否定するように、俺は<ブルー・ティアーズ>の弾幕を避け続けた。

やっぱりそうだ、セシリアの攻撃は、まさにお手本通りとっていいものだ、だからこそ必ず死角から攻撃してくる。

だったら、攻撃を誘導できるということだ、そして撃たれる前に回避行動をとれば何とかよけられる。

ここにきてようやく俺は、僅かばかりの勝ち目を見出した。

しかし

「その程度で、私に勝ったつもりですか」

その言葉とともに、左右からレーザーとは違う衝撃が俺を襲う。

「ぐはあっ!？」

たまらず苦悶の声を漏らす俺をあざ笑うかのように、セシリアの聲が響く。

「どうやらくブルー・ティアーズの動きを多少は見切ったようですが、それなら動きを変えてやれば済むこと、甘いと言わざるをえませんわね」

そして、俺は先ほどの一撃のからくりを理解した、確かにレーザー自体は回避できた、しかし、セシリアはくブルー・ティアーズの半分を、遠隔射撃端末ではなく、質量弾としてそのままぶつけてきたのだ。

その証拠に、先ほど左右から襲いかかってきた二機の先端は少しひしゃげていた。

先ほど見出した勝ちの目は、はかなく消え去り、俺は再び劣勢に立たされた。

二機が射撃、もう二機が突撃を行う四つの猟犬から逃げるように俺

は急速上昇をかける。

しかしそこに、セシリアのさらなる追撃がかかった。

セシリアの腰アーマーから何かが発射され、まるで白い蛇のような軌跡を描きながら<白式>に追いつがる。

「そして、<ブルー・ティアーズ>は四機ではなく六機ですわ!!」

そしてそれは、遠隔攻撃端末ではなく、ミサイル型だった。ミサイル型のそれは<白式>に接近すると近接信管を作動させて、俺を巻き込むように大輪の花火を、二発裂かせた。

「くそっ!?!」

爆風にあぶられ俺は体勢を崩し、その隙を見逃さないセシリアは<スターライトmk?>の砲口を俺に向けた。

「この無様な円舞曲、そろそろ幕引きといたしましょう」

<スターライトmk?>の砲口に光がともる、今までよりひととき強く輝き、最大出力で俺を仕留めようとするのが分かった。

最早回避は間に合わないと悟った俺は、一か八かの賭けに出た。ブレードをひととき強く握りしめ、刃を砲口にまっすぐ向ける。砲口に灯る満月を、半月にするかのように

刹那、砲口から閃光がほとばしる、真上に打ち上げられたそれは、まるで天空に墮ちる流れ星のようだ。

しかし、その閃光は俺が翳したブレードによって、真っ二つに斬り分けられた。

「そ、そんなバカなこと!？」

(今だっ、ここしかない!!)

驚愕に染まるセシリアの顔、それを見た俺は、ここが賭け時と判断した。

残る力を振り絞り、俺は瞬時加速の理論を、イメージを脳内に浮かべて強く念じた。

「おおおおおおっっ!!」

そのまセシリアに、俺は裂帛の気合と瞬時加速のスピードをを乗せて斬りかかった。

|||||

大地に激突するく白く青く、その衝撃は凄まじく、大きく砂塵を巻き上げた。

砂塵に包まれたアリーナは、状況を確認できず、観客たちは固唾をのんで見守っていた。

そして、砂塵が晴れた後には、セシリアの首筋にブレードの切っ先を突き付ける一夏の姿があった。

「俺の勝ちだ、セシリア」

「ええ、私の負けですわ」

その言葉に、アリーナは歓声に包まれた。代表候補生を、素人が打ち破った、その奇跡の逆転劇を目の当たりにしては、この歓声も当然だろう。

そして、その主役たる一夏は、目の前に倒れているセシリアに手を差し伸べた。

「大丈夫か、セシリア」

先ほどまで激闘を繰り広げ、その前にはあれだけ口論を繰り広げたにしては、いささか優しげな態度にセシリアは疑問を感じた。

「ずいぶんと、お優しいですね。先ほどまであんなに激闘を繰り広げていたのに」

「ああ、だって、こんなものは子供の喧嘩みたいなものだろ、だから」

そう言って一夏は、少々照れくさそうに笑みを浮かべ

「喧嘩の後は仲直りしないと、虫のいい言葉かもしれないけど、これから仲良くやって行こうぜ」

これほどの戦いを、子供の喧嘩の一言で済ませてしまっ一夏に、セシリアはなんだかもうばからしくなってしまう、つい笑いがこぼれてしまった。

「フフッ、そうですね。では、これからは仲良くしまし

ようね、一夏さん」

「ああ、これからよろしくな、セシリア」

そう言って、二人は笑顔で握手を交わす、機械越しではあったが、それはとても温かな握手だった。

|||||

それを、アリーナから遠く離れた、校舎の屋上から見つめている人物がいた。

勿論その人物の名前は、衛宮志保だ。志保は一夏との接触からいろいろと詮索されるのを嫌い、こつしてわざわざ視力強化の魔術を使い、一夏の試合を観戦していた。

「しかし、レーザーをブレードで切り裂くとは無茶をする」

試合の感想を呟く志保、その言葉は何ら変哲もないのだが、続く言葉は異常だった。

「なあ、そうは思わないか？」

今この屋上には志保一人しかいない筈なのに、まるで他の誰かがいるみたいに志保は言う。  
事実、この場にはもう一人いたらしい、志保の問いかけに答える声があった。

「おおよそ気付かれてたんだ。ならばお呼びに答えましょう!!」

その言葉とともに、光学迷彩だろうか、景色の一部がゆがみ始め、そこから一人の人物が姿を現した。

「愛と正義の魔法少女！！ カレイドルビー  
まじかる  
タバネここに推参！！」

現れたのは………おそらくは二十歳代の美人の女性、そこはいい、問題はその格好だ。  
まるでアニメの魔法少女のような格好、具体的に言えば管理局の白い悪魔の格好だ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あれ、外した？」

そんな阿呆なことを呟く女性に、志保は頭を抱えて言った。

「もうなんか、いろいろと突っ込みどころ満載で、何から言っただからないが、とりあえずひとこと言わせてくれ、  
歳考  
えたらどうだ、アンタ」

その志保の言葉に、女性は表情は変えず、無言で手に持つえらくメカメカしい外見のステッキを構える。  
そして、ステッキの先端に桜色の光が収束する。

「デイバイーン、バスター!!!」

もうなんかいろいろなものに喧嘩売りつつ、桜色の閃光が発射される。

「ちょっと、まで〜〜!」

志保の虚しい叫びが屋上に、悲しく響き渡った。

## 第4話（後書き）

<あとがき>

みんな老人としか書いてないのにすっごく反応するなあ、そして今回の話はいろいろとはっちゃけすぎたかな？

## 第5話

今現在、IS学園にある校舎の屋上は、とてつもないカオス空間と化していた。

そこにいるのは二人の人物、一人は並行世界にTS転生した元男で、今は高校一年生の少女。

もう一人は、世界最強の兵器であるISを開発した若き天才科学者、何故か恰好は魔法少女だが、年齢的に盛大に無茶をしているとしか言いようがない。

改めて言葉にすると、むちゃくちゃすぎるものである

「それで、一体あなたは誰なんだ？」

こんな事態にやけになったのか、若かりし頃の衛宮士郎のような、ぶっきらぼうな口調で質問する志保。

というか、カレイドルビーとか名乗ってる時点で、あの世界を知っている、もしくは 行ったことのある人物は間違いないのだが、志保はそこを指摘することを一瞬ためらった。

あのいろんな法則をガン無視した、出鱈目の塊である愉快型魔術礼装にしてみれば、今の自分は格好の獲物だろう、「TS士郎……いいものです、ジュルリ……」とか言いながら契約しようとするのはまず間違いない、今の自分は女性とはいえ、そんな羞恥プレイは死んでも御免こうむる。

「フフッ、それは秘密だよ」

そう言いながら光に包まれた彼女は、先ほどの羞恥プレイのような格好から、普通の、といつても頭にウサギの耳を模したカチューシヤを付けているあたり、かなりセンスが常人とは乖離しているようだ。

そんな彼女に対し、志保はまず一番重要なことを確かめた。

「あんたの素性はともかくとして、……………今の变身って、あのルビの力によるものか？」

「ううん違うよ、今の变身はISの量子変換技術によるものだしね、あの子とは仲のいい友人だけだね、契約はしていないよ」

その一言にホッと胸をなでおろす志保、この世界において自分の素性を知っているかもしれない人物を目の前にして、そんな反応をするあたり、よほど、ルビーの引き起こした事件の数々がトラウマになっているようである。

ちなみに、もし本物のカレイドルビーがここにいた場合

「魔法少女 ブレイド 志保りん」

なるものが爆誕し、IS学園対TS魔法少女の大いなる戦いが幕を開けていただろう。

こうしてIS学園誕生以来最大のピンチは、人知れず発生し、人知

れず回避された。ちなみにその場合、志保の固有結界を展開するのに必要な、大量の魔力をカレイドルビーの機能によって並行世界から、ほぼ無尽蔵に供給できるため、割かしまじでIS学園の全ISを倒しかねない。無茶苦茶ノリノリで、その場合もちろん志保は洗脳済みだ。

常の雰囲気などふっ飛ばし、やたらハイテンションなノリで無限の剣弾をぶっ放し、周囲を瓦礫の山に変える魔法少女（元男）……… 本当に下らないがやばい危機である。

「次の質問いいか」

「いいよ」

そして志保は、最も重要な質問を口にした。

「俺とあんた………、前にあったことがあるのか？」

その質問に彼女は、こう答えた

「ううん、あなたとはこれが初対面だよ、衛宮志保。 だけ  
ど、衛宮士郎となら、かつて会っているけどね」

「やっぱりか」

「ありゃ、わかってたんだ」

「あんな恰好をすればいやでも予想はつく、どこで会ったかは、思

い出せないけどな」

「じゃあ思い出すのを期待しておこうと、それじゃあ私はこの辺でおさらばするねっ」

踵を返し立ち去ろうとする彼女、その背中に志保は声をかける。

「結局、あんたは何のために来たんだ？」

「今日のところは単なる顔見せ、後は、あなたが本当に”衛宮”なのかの確認だね。      じゃあね、正義の味方サン」

そうして、彼女は嵐のように現れ、嵐のように去って行った。

志保は明確に感じる、これから起こる騒動の予感に頭を抱え

「この後始末はどうするんだ……………」

彼女が放った桜色の砲撃の惨状、ひしゃげた鉄柵、抉り取られたコンクリートの床に、さらに頭を抱える。

しかし、このまま放置しておくわけにもいかず、志保はため息をつきながら片付けを開始した。

投影魔術すら使って行う片づけは、熟練の技を感じさせ、それを行う志保の背中には哀愁が漂っていた。

|||||

学生寮のとある一室で、一人の少女が作業にいそしんでいた。機械式のキーボードではなく、最新式の空間投影式のキーボードを自在に操り、次々にデータを処理していく。

長方形のレンズの眼鏡の奥の瞳は、どこか虚ろな印象を感じさせる、それも相まって、どこか人を寄せ付けぬ雰囲気少女は発していた。少女の名前は更識簪なむしき・かんざし、IS学園生徒会長の更識楯無なむしき・たてなしの妹だ。

その彼女が、いま取り組んでいるのは自身に与えられた専用IS>打鉄式式<の組み立て、本来ならば製造元である『倉持技研』が責任を持って、最後までやるべきなのだが、ここ最近の事情の急激な変化によってそうもいかなくなった。

世界初の男性のIS搭乗者、織斑一夏オリハツカの専用機>白式<の製作に人手を回したせいで、>打鉄式式<に人員が回らなくなってしまった。

普通なら、そこは組み立てを待つだろう、しかし、その選択は簪にとって選べない、選びたくないものだった。

彼女の姉、更識楯無は才気あふれる才女だった。天は二物を与えず、その言葉に真つ向から喧嘩を売るように様々な方面で、その才能を見せつけた。

勉強、武道はもちろんのこと、IS作成までやってのけてしまった。当然、周りは彼女を褒め称えた。

流石は楯無さんね

すごいなあ、憧れちゃいます

こんなにできたお姉さんを持って、妹さんは幸せね



ない。だから私は<打鉄式式>を引き取り、自分の手で完成させることにした。

無謀なのかもしれない、姉の才能と自分の才能、比較すれば天と地ほどの差がある。

ISを自身の手で組み上げるのは、姉のような天才にしかできないのかもしれない。

だけど、このか細い蜘蛛の糸のようなチャンスを、私は手放したくなかった。

これを成し遂げて、ようやく私は更識簪になれる……………そう思ったから

そのためにも、私は立ち止まってはいられない、決意を新たに私は再びモニターと向き合う、高速で流れるデータの羅列に目を通してると、いつの間にもやら、外の景色はすでに暗闇に包まれていた。もうそんなに時間がたったのだろうか……………作業を始めたのは三時ぐらいたったのに、机の片隅に置いた時計の針はもうすでに八時を示していた。

晩御飯どうしようか……………そう思っていると、頬にいきなり冷たい感触、不意打ち極まりないその感触に私は奇声を発してしまった。

「うひゃうっ!?!」

背後に目を向ければ、そこにはルームメイトである衛宮さんの姿、その手には夕食を乗せたトレイと、結露を表面に滲ませたペットボトルの緑茶があった、さっきの感触はあのペットボトルだろう。

そんなことをした志保に対し、私は恨みがましい視線をぶつけた。

「……どうして、あんなことしたの？」

「さっきからいくら呼んでも、全く返事をしてくれなかったからな。何をしているかは知らないけど、ご飯ぐらいはちゃんととらないと体を壊すぞ」

「うん、わかった……」

そして衛宮さんは手に持ったトレイを私に差し出してきた、トレイにはほかほかと湯気が立つ雑炊が乗っていた、量のほうもあまり食べるほうでない私にぴったりの量だった。

「学食に残ってたのが、更識さんの好みに合わないやつばかりだったからな、肉とかあまり好きじゃないだろ？」

「うん、あまり好きじゃない」

「だから、ありあわせのもので雑炊を作ってみたんだ」

わざわざそんなことをしてくれたんだ衛宮さんは、じゃあ、ありがたく頂くことにしよう。

私は衛宮さんからトレイを受け取ると、スプーンを手に取った。

「衛宮さん、その……ありがとうございます」

「どういたしましたして、遠慮しないで食べてくれ」

そう言つて、にっこりほほ笑む衛宮さん、彼女が作ってくれた雑炊は暖かくてとてもおいしかった。  
なぜか、衛宮さんは私が食べている姿を見て終始、ニコニコしていたけど何故なんだろう？

あれかな、自分が作った夕食を食べてくれるからうれしかったのかな、うん、そう考えると衛宮さんってちょっと可愛いかも……って、何考えてるの私！？

そんなことを考えたせいで顔が赤くなってるのが、鏡を見ていないのにわかつてしまう、いや、違うのこれは！ これは雑炊を食べて温まったからなの！！

……そんな中でも衛宮さんは、終始ニコニコとしていた。

「……………ごちそうさまでした」

しばらくして、私は雑炊を残さず食べ終えた、衛宮さんはありあわせのもので作ったって言うってたけど、そんなことを感じさせないくらいにおいしかった。

「うん、お粗末さまでした。食器のほうは私が片付けておくよ、…評価のほうは、聞かなくてもわかるしな」

「えっ、それってどういうこと？」

「終始笑顔で食べてくれたからな、気に入ってくれてうれしいよ」

そう言つて流し台のほうに食器を洗いに行った衛宮さん、その後ろ姿を見ながら、私は完全にフリーズしていた。

えっ！？ じゃあ、さっき衛宮さんがニコニコしていたのって、私

が笑顔で食べていたから!？」  
その事実気づいた私の顔はまた真っ赤になっていくのを感じる、  
今度は雑炊のせいにできそうもなかった。

その後、私は作業を再開したのだけれど、何故か効率は上がらなかつた。

仕方ないから、アニメでも見て気分転換することにした、今回見ることにしたのは『魔法少女マジカル ブシドームサシ』だった。

テレビ画面を縦横無尽に飛び回る魔法少女の活躍を見ると、眠気が襲ってきた。

何とか抗おうとするものの、睡魔は容赦なく襲ってきて……………

チユンチユン……………窓から差し込む朝日と、小鳥の囀りで私は目を覚ます。

どうやら、あのまま眠っていたらしい、そしてなぜか私には毛布がかかっていた、毛布をかぶった記憶なんてないんだけどな、誰が……………って、衛宮さんしかないか。

「起きたんだ簪さん、毛布もかぶらずに寝ると風邪をひくぞ」  
「うん、ありがとう」

私の過程を肯定するように、衛宮さんから声がかかる、やっぱり毛布をかけてくれたのは衛宮さんだったんだ。

そこで終わってくれたのならよかったんだけど、続く言葉は昨日と同じように私を混乱の渦に叩きこんだ。

「それにしても、アニメを見ながら寝てしまうなんて、可愛いところあるんだな簪さんは」

可愛らしいって、えっ、私が!? 衛宮さんが、私のこと可愛いって……………

ボンツ!! というほどの擬音がつきそうなくらいに、私の顔は真っ赤になった、衛宮さんはもうちょっと自分の発言を意識したほうがいいと思う。でも……………

可愛いって言われたのは、ちょっと嬉しかったな。

何故だか今日は、いつもより頑張れるような気がした。

## 第6話

学生寮から校舎に続く道を、志保と簪の二人が並んで歩いていった。まあ、入学してから一緒に登校するのは変わってないのだが、雰囲気から全然違っていった。

なんと言っかちよっとピンク、その発信源は簪であり、その原因は朝の一言、それで志保の存在が単なるルームメイトから、少し気になる存在にランクアップしたらしい。

いままで簪への評価は更識楯無の妹、というのが付きまっていた。そこにかけられた、志保にその意識がなかったとはいえ、簪そのものへの言葉、しかも可愛いと言われれば、簪の乙女心が起動するのは当然だろう。

「なんだか今日の簪さんは機嫌がいいよな、なにかあったのか？」

「う、うん、ちょっといいことがあった」

「そうか、よかったな」

自分の一言が原因とは、まったく思いつかない筋金入りの鈍感がそこにいた。

この時志保が男のままであれば、骨身に刻まれた経験によって多少勘づくこともあっただろう。しかし、今の志保は女性であり、男性に恋心を抱くほどではないとはいえ、女性であることはある程度受け入れている。

つまり、どういふことかというのと、今の自分が女性から恋心を抱かれるとか、起る筈がないと思っっているのである、百合って何それおいしいのという状態だ。

いまの志保は肉体年齢が周りと変わらぬとは言え、中身は幾多の凄

まじいほどに濃い経験を味わった大人である。  
その雰囲気は周囲の女子とは一線を画し、入学から一週間ほどしかたつてないとはいえ、すでにクラスの中では一目置かれる存在となつている。

気付いてないのは志保本人だけだ、前世のころと同じぐらい、いや、よりひどい状況になっている。

「おゝ、か〜んちゃん、おっはよ〜」

間延びした、まさにのほほんという言葉が似合いそうな、のんびりとした声が二人に届く。

声の主は、ぶかぶかの袖を揺らしながらのんびりと近づいてくる、声のイメージを裏切らぬ、まさにのほほんとした少女だ。

「おはよう……本音」

「うんうん、今日も〜元気そうだね〜、か〜んちゃん」

いつものように、少し不愛想な簪の態度を見て、元気と判断できる当たり、それなりにこの二人は付き合いが長いのもかもしれない。

「簪さん、この人は？」

「この子は、布仏本音、私の実家に代々仕えている家系の生まれで、

……一応、私の専属使用人？」

「ひ〜ど〜い〜、かんちゃんなんてはてなマークを付けるの〜。と

ころで〜、そっちの子は〜？」

「衛宮志保……、私のルームメイト」  
「衛宮志保です、よろしく布仏さん」  
「本音でいいよ、その代りわたしもエミヤンって言うから」  
「エ、エミヤンですか……」  
「うんうん、なんかこう、ビビツときたんだよ」  
「……………いいですよそれで」

本能的に、この手合いに何を言っても無駄だと判断した志保、頭を抱えながらもエミヤンなどというあだ名を受け入れた。  
その様子がおかしかったのか、簪の口から笑い声が漏れる。

「クスツ……………エミヤンって」  
「簪さんまで……………」  
「あっ!?!」……………「ごめんなさい」  
「いや、いいよ、そのくらい。別にエミヤンって呼んでも構わないぞ」  
「エ、エミヤンはちょっと……………」  
「そっか?」  
「う、うん、……………だから、あの……………し、志保って呼んでいい?」

上目遣いで頬を赤らめながら頼む簪、志保はそれを見て、ただ単に名前呼び捨てるのが恥ずかしいとしか思っていなかった。  
故に、何の逡巡も見せずに即答する、もちろんOKという形だ。

「いいぞ、それくらいなら」  
「じゃあ、これからは……………し、志保って呼ぶね」

「むふふ、かんちゃんつてば可愛いな、ルームメイトを名前で呼ぶだけでそんなに照れちゃつて、ウリウリ」

「ちょ!?! 本音、抱きつかないで……」

「だつて、かんちゃんが可愛いんだもん」

「フフツ、仲がいいんだな、二人とも」

その仲睦まじい(?) 光景を見た志保の手が、ふらふらと簪の頭へと延びる。

まるで子犬をなでるような手つきで、簪の頭をなでる志保。簪は数瞬の間、気持ちよさそうにしていたが、すぐに我に返った。

「つて……志保もなんで頭をなでてるの!?!」

「いや……なんとなく?」

「うんうんわかるよ、その気持ち、かんちゃんが可愛いから仕方ないんだよ」

「可愛いって……そんな」

そうして三人は和気あいあいと校舎へと向かって行った、校舎にたどり着くと本音だけは一組なので廊下で別れた、相変わらずのほんとした足取りで……彼女は多分一生あの調子なのだろう。

あ………こけた、と思つたらくるくと回ってバランスをとった、本当にいろいろと変な少女である。

その後、志保と簪は四組の教室へと向かう、その時の簪の表情はいつもより柔らかかで微笑ましいものだった。

その時まで

|||||

### 午前の授業が終わって昼休みの時間

屋上で二人一緒に昼食を取った後、そろそろ午後の授業の時間の為、二人は教室に向かっていた。

ちなみに昼食内容は志保お手製の弁当だ、簪にとっては大変満足な食事だったが、昨日と同じように志保が自分の食事シーンを見ながらニコニコしているのが、不満といえば不満だった。

ただ単に、気になる人物から笑顔を向けられて照れていただけでも言うが……………

そして、二人が教室に近づいたときに、教室の中からクラスメイトの話し声が聞こえてきた。

「そついえばさあ、うちのクラス代表って更識さんだけど、専用機ってどんなのかしら？」

「聞いた話だと、倉持技研の新型だって」

「え、でも、今あそこ一組の織斑君の専用機にかかりつきりらしいよ」

「じゃあ、更識さんの機体ってどうなってるの？」

「それがあの子、自分で引き取って独力で完成させるつもりらしいよ、私の父さんが倉持技研に勤めてるから、そこから知ったんだけどね」

「うわっ！！ それって無茶じゃないの!？」

「だよねえ、私も最初に聞いた時無茶だと思ったもん」

「同感、生徒会長じゃあるまいし、言っちゃ悪いけど身の程知らずって奴？」

「あはは、言えてる」

その言葉を聞いた簪からは表情というものが消え、まるで能面のような感じだった。

顔は俯き、拳は力の限り握りしめられ、うっすらと血がにじんできた。

志保がその様子に気づき声をかけようとした時、とどめの一言が発せられた。

「会長みみたいな天才に、追い付けるわけないじゃない」

それがとどめとなった、ガラガラと簪の中で張り詰めていたものが、音を立てて崩れていく。

次の瞬間、簪は踵を返し走り去っていく、目尻に光るものを滲ませながら。

茫然と、志保はその後ろ姿を見つめていた、間が悪いというか、同時に響くチャイムと教師の声。



会長みたいな天才に、追い付けるわけないじゃない

そんなこと、他の誰でもない、自分が一番よくわかってる。

私に姉さんほどの才能がないことぐらい、だって………生まれか  
らずと、遙か彼方にある姉さんの背中だけ見てきたんだから。  
近くにあってもいつまでも届かないそれは、まるで塵気楼の様で…  
…水面に写る月の様で

届かないのなんて、最初っからわかってた

けどそれを認めたくなかったのに、認められなかったのにつ!!

私の望みは、そんなに大それたものだったの、ただ私を見てほしい

………それだけなのに、

思考はどんどんと深みにはまってゆき、だめだとわかっていても止  
められなかった。

気付けば授業開始のチャイムが鳴っていた、授業………どうしよう、

………いいや、このままサボってしまおう。

涙は止まらず、動く気も起きなかったその時、ここにいるはずのな  
い人の声がした。

「やれやれ………、見つけたぞ簪さん」

振り返ってみれば、そこにはルームメイトの姿。

どうして？ 授業はもう始まっているのに、そんな内心が顔に出ていたらしい、聞かれるまでもなく志保は答えてくれた。

「あんな泣き顔見ていれば、放っておけるわけもないだろう」

当然のことだ、と言わんばかりに志保は言う、けど今の私にはそれすらも煩わしく感じてしまった。

自暴自棄になるのを止められない、黒いものが体の奥からどんどんわいてくる、黒いものは罵詈雑言となって私の口を飛び出てきた。

「私のことなんか放っておいてよっ！！……どうせ志保だって、あれ聞いて私のこと馬鹿にしてるんでしょっ！！」

「そんなことなんてないさ」

「嘘よッ！！ 無謀だって、身の程知らずだってそう思ってる！！ 志保だって姉さんのこと知ってるでしょっ！！」

「ああ、この学校の生徒会長で、成績優秀、文武両道、おまけに自身でISを制作して、学生にもかかわらずロシアの国家代表にもなってる、ちよっと調べればすぐにわかるよな」

「そうよ、ずっとずっと姉さんは光り輝いていた、妹の私はずっと姉さんの影にいた……、誰も私を見てくれない、誰もが私を姉さんの妹としか見ないっ！！」

「それは違う」

静かに、だけどしっかりと志保はそう言った。

「えっ!？」

同時に私は暖かなものに包まれた、志保が私を抱きしめた、と気付くのは数瞬の後。

どうして、と混乱する私に、志保は優しく声をかける。

「簪さんの気持ちを知ってやれる、そんな、自惚れたことを言うつもりもない。私は簪さんじゃないからな、その苦しみを一緒になつて支えるなんてできない、だけど」

「倒れそうな体を、支えることぐらいだったらできるわ」

……このまま顔は隠しておくから、思う存分泣くといい、気の済むだけ泣けば、多少はすっきりすると思うぞ、と言葉は続いた。

それで限界だった、私は志保の胸の中で、幼い子供のように泣きはらした。

そして私の意識は、穏やかな暖かさに包まれ眠りに就いた。

|||||

気付いた時に感じたのは、体を覆う草の感触と、頭に感じる柔らかな感触。

目を開ければ、おそらくさっきの校舎裏の近くの芝生だろうか……

「ん？ 起きたのか、簪さん」

頭上からかかったのは志保の声、それでようやく、自分がどういう体勢なのか気がついた。

それに気付いた途端、逆流しそうな勢いで頭に血が上る、どうして、どうして……！？

「どうして！？ 志保に膝枕されてるの私！！」

「あの後簪さんが、泣き疲れて寝ちゃったからだが？」

当然のことをしたまでだ、と言わんばかりの志保に対して、頭を抱える私。

なんでそんなにも平然としているのか、ひよっとして私のほうが間違ってる！？ そんなことを思うぐらいに志保は平然としていた。

あれ……？ その時、私は一つのことを疑問に思った、後から考えなおせばなんで気がつかなかったのかと思うぐらい、当然の疑問だ

った。

「ねえ…志保、どうして私のこと、……最初から名前で呼んでいたの？」

「なんで、今更そんなこと？」

「……お願い」

私の懇願に志保はちよつと照れくさそうにして、答えを口にする。

「それは……、名字で呼んだら、簪さんのお姉さんごっこちゃんになるだろ。これから三年間一緒の部屋で過ごすんだから、そういうこととはしたくなかったんだ」

それは、私を初めから更識楯無の妹ではなく、更識簪として見てくれていたということ。

なんだ、私の望みは……もうかなっていたんだ。

私を私として見ていてくれる人は、こんなにもすぐそばにいたんだ。志保にとつてしてみれば至極当然のことかもしれない、だけど、それはまるで颯爽と現れ、困っている人に手を差し伸べるヒーローく正義の味方くみたいだった。

だから私は、ヒーローく正義の味方くに助けられたならば当然のこと、いわゆるお約束を、感謝の言葉を口にした。

「……ありがとう、志保」

「そんな礼を言われるようなことしたか？」

予想通り、やっぱり志保はなんで礼を言われるのか分からないという顔をしていた。

うん、やっぱり志保は私にとってのヒーロー<正義の味方>だ。

「ねえ、もうちょっとだけ、……こ、このままでいてもいい？」

「別にいいぞ、あんまり気持ち良くないかもしれないけどな」

「……ううん、そんなことない」

そうして私たちはしばらくのんびりしていた、授業中だと  
いうことも忘れて

放課後、当然のごとく二人一緒に担任に叱られたのは、いまさら言うまでもないだろう。

## 第6話（後書き）

<あとがき>

百合ってこんな感じでいいんだろうか、恋愛シーンを書くのも初めてなのにこんな無茶をしてしまうとは（汗

気付いたらこんな感じになってました、7巻読んでいたらこんな妄想が浮かんでしまって……簪を可愛く表現できていたらいいんだけど

**本編とは全く関係ないやばいネタ(前書き)**

完全に劇物です、お読みになられる際はご注意ください!!

## 本編とは全く関係ないやばいネタ

IS学園の職員室で、書類整理にいそしむ一人の美女、名前は織斑千冬。

世界で唯一の男性のIS操縦者、織斑一夏の姉にして、IS世界大会優勝経験を持つ、文字通りの世界最強の個人である。

「ふっつ……」

淡々と仕事をこなすその手によどみはなかったが、仕事とは別の懸念が千冬にはあった。

唯一の家族にして、最愛の弟……一夏のことである。

本来女性にしか扱えぬその特性上、IS学園の生徒はすべて女性である、一夏ただ一人を除いて。

この年頃の女の子はとにかく、異性というものに多大なる興味を抱く。

学生らしく節度ある接し方ならばいいが、そうでない場合が起こるのを千冬は恐れていた。

鼻真目に見ても一夏はいい男である、ルックスはそれなりに整って

いるし、困っている人がいたら手を差し伸べるぐらいの度量はあり、おまけに家事万能、欠点らしい欠点など鈍感なところくらいだ。

欠点が本当に致命的に過ぎる、後かなり鼻屑目に見ているんじゃないかと突っ込んだ方は、もれなく白騎士の刀の錆になりますからご注意ください

いつか、一夏に最愛の人ができた時、私はそれを笑って祝福できるのだろうか。

みっともなくいつまでもすがっていそうで……、そんな醜態をさらしてしまうんじゃないかと、時折浮かぶその想像が怖かった。

いつまでも一夏の憧れでいたい、女々しいが、そう思ってしまうのだ。

憧れであり続けるというのは結局のところ、弱さを見せないということだ、それを成す一番の手段は一定の距離をとり続けるということ。

一夏の誘拐事件の直後、ドイツからの誘いを受け入れたのも、一夏を危険にさらした不甲斐無さでボロボロになった、織斑千冬という鍍金を張り直したかったからだ。

だけど、一夏をもっと身近に感じていたい、触れあいたいという欲求が私の裡にあるのも、また事実。

その矛盾は、昔からずっと私を苛んでいた、それはこれからもずっと、私を苛んでいくのかもしれない。

「全く、私らしくもない」

処理し終えた書類をまとめながら、私はその矛盾を心の奥底に封じ込めた。

堅く、堅く  
願わくば、二度と顔を出すことのない  
ようにと、願いを込めて

その時だった

「痛っ!?!」

右手の指先に走る小さな痛み、どうやら書類の端で指先を切ってしまったらしい。

愚にもつかないことを考えていたせいか、と自嘲しながら、千冬は机の引き出しの中に絆創膏を入れていたことを思い出す。

この時、不幸だったのが絆創膏を千冬の体に対して、右側の引き出しに入れていたことだろう。

つまり、血の付いた指先を引き出しの中に入れてしまったのだ、引き出しの中に災厄を振りまくものが入っているともしゆ知らず

引き出しの中から声が響く、可愛らしい、しかし、とてつもなく胡散臭い声だ。

「血液による認証確認、起動に必要な鈍感な意中の男性に対する素直になれないスーパーオートメ力確認！！ おおっ、こ、これは凄まじいパワーです！！」

手にしてしまったのは、くねくねと動くおもちゃの魔法少女のステッキみたいな何か。

なんだこれは、それが千冬の第一印象だった。とてつもなく胡散臭いうえに、私の直感が全力でこれに関わるなと告げている。

よし、捨てよう、そう思い窓を開け全力で投擲しようとするが、離れ……ない！？

「ふっふっふっ、無駄無駄無駄ア！！ 既に契約はなされました。しかし、安心してください、そこまで大それたことはしませんよ、思い人に対しすこし素直になるだけです。私はあくまでそのサポートに徹しますから」

契約だのなんだの、わけのわからぬ言葉を聞きながら、私の意識にもやがかり始める。

あれ？ 私は何をしようとしてたんだ。……………一夏、そうだ一夏を……

「そうです、その一夏さんを我が物にするのがあなたのしたいこと

です。そのためには力が必要です、……………後はお分かりですね？」  
「そうだな、ルビー……………」

そして千冬は勢い良くその杖、カレイドルビーを掲げる、閃光が職員室に広がった。

万華鏡のごとき輝きが消え去った後にいたのは、一人の女性、否

「魔法少女マジカル                      ウィンター                      千冬！！                      ここに見参  
！！」

純白の衣装に身を包んだ、一人の魔法少女（？）がそこにいた

「力がみなぎってくる、感謝するぞルビー、これで一夏は私の物だ  
あっ！！」

「キャ〜千冬さん素敵〜！！                      このまま思っ存分突っ走ってください  
いつ！！                      群がる敵をなぎ倒し一夏さんを我が物にするのです！！」  
「承知！！」

そして飛び立つ千冬、この後起こったことについては詳しくは語るまい、ただ、一人の赤い髪の少女が力の限り奮戦したことをここに記す。

**本編とは全く関係ないやばいネタ（後書き）**

<あとがき>

ほんとにすみません、第五話のシーン書いていると、この妄想が浮かんだので（汗

不快になられる方が多いようならば、すぐに削除いたします

## 第7話

いま、志保がいるのはIS学園生徒会室、今朝がたクラスの担任から、昼休みにここに来るように言われたわけだが………室内に居るのは志保を除き三名、そのうち一人は昨日会った布仏本音、本音のそばに寄り添う眼鏡に三つ編みのいかにも委員長といった感じの三年生、そして

部屋の中心の机、おそらくは生徒会長の机だろう、それに腰掛けているということはこの人物こそが簪さんの姉である、IS学園生徒会長、更識楯無なのだろう。

確かに髪の色とか、簪さんの姉であることを如実に表している。

その盾無さんだが、まるでどこぞの司令官のように机に両肘をつき、顔の前で両手を組んでいる。

表情は組まれた手と、前髪によってここからではよく見えない、そして何より

(いや、とてつもなく怖いんですけど!? 会長をこんなに怒らせるようなことしたか私は!?)

そう、目の前の生徒会長様は現在進行形で、大魔神も真っ青になるぐらいに、全身から怒りのオーラを立ち昇らせていた。

よくよく見てみれば、ISらしきものが陽炎のように揺らめいては消えている、おそらくはISを量子変換直前で出し入れしているのだろう、え〜と……つまり、なにか気に障る事を言ったらISではこるということか？

本当に声を大にして言いたい……………どうしてこうなった!?

「楽にしていいわよ、一年四組所属、衛宮志保さん」

にこりと、微笑む会長、そう、吹雪を想像させるような冷たい微笑みだ。

こんなものを向けられて楽にできるわけがない、壮絶に雰囲気と言葉が合致していなかった。

ああ、どうして自分に関わってくる女性はこうも一癖も二癖もある人物ばかりなのだろう、あかいあくまとか、きんのけものとか、高校の後輩とか、割烹着のあくまとか……………

こんな時簪さんに出会って本当によかったと思う、かなうことなら彼女にはこのままずっと成長してほしいと痛切に願う。

もし万が一、彼女もこんな風になり果ててしまったら、しばらくは立ち直れそうにない。

明日の昼御飯は、より手間暇かけて作ろうと決めた、簪さんの食事風景を存分に見て癒されることにしよう。

などと、少々危険な方向に現実逃避していると、会長が本題を告げた。

「今日、ここに来てもらったのはね、昨日の無断欠席について、二、三点聞きたいことがあるのよ」

「そこまで……………問題になるほどのことでしょうか？」

「うっん、そんな事ないわよ。泣きながら走り去って行ったクラスメイトを慰めにいった。ただそれだけのことだもの、手放しに誉めることはできないけど、あの子の姉としてお礼を言わせてもらっわけどねえ」

パチン、と手に持った扇子を小気味いい音を鳴らして閉じると、会長は扇子の先端を会議用のディスプレイのほうに向ける。それに合わせ、本音がディスプレイを操作する、するとそこには

まるで猫のように気持ちよさげに芝生に寝転ぶ簪さんに、穏やかな笑みを浮かべて膝枕をしている自分の姿、時折簪さんの頭を撫でたりしているところまでバッチリ映っている。

うわぁ、こうして客観的にみると、ものすごく恥ずかしいなこれは……  
……  
実を言うと、こうして映像をとられるのは想定内だった、IS学園なんていう重要機密満載の場所が、世間一般と同程度のセキュリティーナはずがない、実際、昨日も監視カメラは確認していた。けどまあ、あの流れでどいてくれなんて言えるわけないし、そこまで大それた行為ではないから放置してたんだが、どうやら、会長にとっては大それた行為だったらしい。

「こんな……こんなにもうら、コホン、……破廉恥な！！ 行為を学園内でするなんて、嚴重に注意しなきゃいけないわね」

「いま、思いつきりうらやましいって言いかけたよな、アンタ」

「そして学園というところは、何かを学ぶのが本分。そしてここIS学園で一番重視されるのはISの操縦技術」

「ああ、………そういうことですか」

いい加減、会長の目的も大体わかった。

昨日簪さんから聞いた話から推測すると、あまりにも出来過ぎた姉に対し簪さんはコンプレックスを抱いている、当然姉妹の仲はあまり良くなく、妹と仲良くしたい姉は不満が溜まっていたんだろう。

そんなときに、妹と仲睦まじくしているところを見てしまって、たまりにたまったものが爆発したということか。

言葉にすると可愛らしい嫉妬だが………お願い

いだから、その癩癩を発散するのに、物騒なものを持ち出さないでくれ……

かつての経験で慣れているとはいえ、疲れるんだそういうことは……

………、今度、保健室で胃薬をもらってくるか、ハア………憂鬱だ。

「あなたには、私自ら実践形式でISの操縦を教えてあげるわ！！」

「ワイイ、ウレシイナア」

予想通りど真ん中ストライクな言葉を言った会長に対し、凄まじい棒読みで返しても誰にも責められないだろうと思う。

「……………」

「さて、これで準備はOKね」

「ええ、人伝に聞いていたあなたの有能さを遺憾なく、間違った方向に全力で出し尽くした結果ですけどね」

「なんで私はここにいますか……………」

生徒会室での問答の後、衛宮志保、更識楯無、山田真耶の三名は、それぞれISを装着してアリーナに集結していた。

志保と楯無はともかく、一年一組副担任である麻耶がなぜここにいるかという点、一言で言つて、押し付けられたからだ。

楯無が行った手回しは完璧なものであった、アリーナの使用許可に始まり、志保が使う練習用IS<打鉄>と各種武装の貸し出し許可、後で問題にならないために後輩への実技指導という形も整えた。

そして、万が一の不慮の事故が起こった場合に備え、監督役の教官一名を選出してほしいと教師陣に依頼し、結果、その役目が真耶に回ってきたのだ。

ただ単に、押しの弱い麻耶に対し、他の連中が面倒事を押し付けたともいう。

ちなみに、同僚である織斑千冬が真つ先に真耶に押し付けた、まさしく鬼の所業である。

「さて、今からお仕置き（実技指導）を始めましょうか」

「おい！？ 本音と建前が逆だ！！」

「知ってる？ 建前って投げ捨てる物よ」

「断じて違う！！」

「お願いですから、早く始めて早く終わらせましょうよ……………」

「そうね、さっさと始めましょうか」

「はあ……………ほんとに疲れる」

「溜息つくと幸せが逃げるわよ」

「誰のせいだっ!!」

「お願いします、早く終わらせて!!」

ひっかきまわす楯無に対し突っ込む志保、二人ともが盛大に真耶のことを無視していた、……………おい、それでいいのか正義の味方。

そんな不毛な問答を終えると、二人は表情を引き締める。理由が理由だけにイマイチ締まらないが。

それを見て取った真耶は、試合開始を告げる、その眼には光るものが滲んでいた。

「それでは、更識さん対衛宮さんによる、実戦形式の訓練を始めます。用意はいいですか？」

「勿論OKですよ」

「こちらも同じく」

「それでは、試合……………開始!!」

麻耶の号令とともに、二人は同時にバックステップを行い距離をとる。

楯無のほうは、流石に本格的な訓練も行っていない一年生に対して、初手から全力で仕掛けるつもりはないらしく、様子見に留めていた。時間をかけてじっくりいたぶるつもりなのかもしれない……………

対する志保のほうも様子見に留まっていた、先に言った通り、志保の操縦経験は素人に毛が生えた程度、せいぜいが学園入試の際に乗

ったぐらいだ。

勿論、だからと言ってただやられるだけというのも癪なので、相応に粘るつもりでいた。

だからこそ、不用意に動かず、まずは動作の感覚を把握することに勤めていた。

同時に視界に投影されたディスプレイを操作し、武装の確認を行う。

（武装は……近接戦用の日本刀型のブレード一本、アサルトライフル<063ANAR>二挺、スナイパーライフル<061ABSR>一挺、グレネードランチャー<NUKABIRA>一挺、全距離に無難に対応できるラインナップだな、一応会長に無抵抗な標的を撃つ意思はないということか。まあ、これだけあれば、一応戦えるか  
）

武装の確認を終えた志保は、アサルトライフルを量子展開し、両手に顕現させる。

シンプルなデザインにまとめられた二つのライフルの銃口から、マズルフラッシュが断続的に飛び出る。

楯無はその銃撃を、軽やかな機動を描き、余裕を持ってよけてみせる。

そのよどみない機動を見た志保は、楯無の高い技量と、自身が空戦で勝てる可能性がないことを悟る。

（国家代表になるのだから、相応の技量があつて当然か、私が空に上がったところで即座に叩き落とされるのが目に見えている。地上戦のみに絞ったほうがまだ可能性があるか……）

そう判断すると、スラスターを吹かしジグザグに大地を滑りながらアサルトライフルを撃ち続ける。

その動きは回避機動をとっているというより、一刻も早く動きに慣れるためといった感じだ。

その動きは、先の楯無の回避機動と違い、ぎこちなさが随所に残るものであり、志保の推測の正しさを物語っていた。

（ふうん、ISの要である空戦を切って捨てたのね。いくら操縦時間の差がダイレクトに出てくるからといえ、思い切ったことするものだけ）

楯無のほうも、志保の機動からそのことを読み取った、だからと言って手心を加えるつもりはなく、自身の専用IS<ミステリアス・レイディ>の専用ランス<蒼流旋>に内蔵されている四門のガトリングガンを発射する。

単純比較にして、志保の二倍の火力が吐き出される。当然このまま撃ち合いを続けるならば確実に志保がじり貧になるのだが、現実とは違っていた。

（くっ…何なの？ この並外れた射撃精度、とてもじゃないけどただの一年生ができることじゃないわよ！？）

まるで、吸い込まれるように自身へと向かう弾幕を見ながら、楯無は内心で毒づいた。

楯無が放つ銃弾も、志保に対し確実に有効打を与えているのだが、

その状態で五分に持ち込まれるということは、楯無より志保のほうが射撃の腕で上回っているということだった。

(ひよつとしたら、この子、何らかの武術を学んでいるのかしら、妙に戦いなれた感じがするというか、普通こんな状況に追い込まれれば、パニックになって出鱈目な行動をとるのに、堅実な行動しかしてないわね。………事前に調べた限りでは、目立ったところのない平凡な子だったのに)

そう、開始直後に不用意に動かず、空戦を行う事の不利を悟って地上戦のみに限定し、まずはアサルトライフルの射撃を行い、回避機動をとりつつ機体に習熟していき、射撃精度は国家代表も認めるほど。

こんな素人いるわけがない、これがもし、いきなり見事な空戦をやったのけたぐらいなら、並外れた才能や素質で済ませられるが、しかし、志保が行った行為は、才能などとは無縁であり、対極に位置する行為だ。

明らかに、場慣れした者のそれである、そして、それによって楯無は大きく勘違いをしてしまう。

平凡な経歴であるにもかかわらず、異質な強さを見せつけ、国家代表である自分の妹に急接近している。

更識家が代々、諜報関係に従事していることと、最愛の妹がらみであることを差し引いても十二分に怪しかった。

(ここは、後に何とか復帰できるぐらいに痛めつけたほうがいいのかしら………なんにせよ、少々本気で行ったほうがいいのかもしいわね)

少々物騒なことを考えつつ、楯無はスピードを上げていく、ほぼ無意識のうちにく打鉄>と同程度に抑えていたスラスト出力を、<ミステリアス・レイディ>本来のレベルにまで引き上げる。

一層強い輝きを放ちながら、複雑な機動を描く<ミステリアス・レイディ>、機体を包む水のヴェールの輝きに彩られながら、妖精のごとき舞を披露するその姿は、まさしく霧纏の淑女の名にふさわしいものだった。

その幻惑するような軌道に志保は戸惑いを見せる、だんだんと射撃の命中率が低くなり、五分だった戦況は確実に楯無のほうに傾きつつあった。

しかし、志保の戸惑いの原因は他にもあった。

(くっ、照準が微妙にずれる……………、仕方がない、FCS<火器管制>の内、照準関係をすべてカット!!)

この学園の上級生、教師陣が聞いたら、口をそろえて馬鹿か貴様!!  
! と言いそうなことを志保は平然とやった。

ISの照準というものは、操縦者本人による照準と同時に、ISのほうもFCSによる自動補正をかけるのだ。

お互い高速、かつ、従来の航空兵器と一線を画す柔軟な機動性能で動く敵機など、IS側のサポートがなければ当てられるはずがない。しかし、その補正もあくまで普通の人間が使うことを想定して作られている、いくら魔術を使っているとはいえ4?先ぐらいなら、平然と何の補助もなく命中させられる人間用には作られていない。

そして、FCSを使わないということは、必然的に敵機側のロックオンに対する警告が消えるということであり

(なんで完全マニュアル照準でこんなに狙いが精確なのよ!? やっぱりこの子には何かある!!)

勘違いの上に成り立つ疑念を、さらに強化してしまうはめになったのだった。

そして楯無は<ミステリアス・レイディ>の固有武装である清き熱情<クリア・パッション>を使うことを決意した。

この武装はナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物へ散布し、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や熱で相手を破壊する応用性の高い武装だ、拡散範囲は限られていたが初見でこれを回避することはかなり難しい。

楯無は、志保の周りを旋回するような軌道をとつつ、<クリア・パッション>を散布していく、勿論その間にもガドリリングガンによる射撃を行い、志保が<クリア・パッション>の有効範囲から抜けないように縫いとめていた。

これでは<クリア・パッション>を起動させれば、志保は爆炎に飲み込まれて終わる。

しかし

突然、志保はアサルトライフルを格納すると、グレネードランチャーを展開する。

いきなりの武装変更に首をかしげる楯無をよそに、志保は楯無からの射撃を無視して、グレネードランチャーを全周囲に乱れ撃った。

極大の火炎が志保を包むように乱れ咲き、アリーナに轟音が響き渡

る。

傍目から見れば志保が、ガドリングガンの被弾を無視してまで意味不明な行動をとったように見える。

しかし、楯無からしてみれば、不可視であるはずの<クリア・パッション>を察知してグレネードの爆炎で吹き飛ばしたようにしか思えなかった。

事実、爆炎によって<クリア・パッション>は吹き飛ばされ、志保はその有効範囲から抜け出てみせた。

明らかに<クリア・パッション>の存在を認識しなければ、とるはずのない行動だった。

(どうやってたらそんなまねできるのよ!? まさか見えてたって言うの?)

流石の楯無もこれには動揺を隠せず、惚けた顔をさらしてしまう。

それは志保に、自身の行動の正しさを確信させた。

(やっぱり何らかの、不可視の兵器を展開していたか)

志保が<クリア・パッション>を察知できたのは、かつての経験からくるものだ

衛宮士郎の戦いの中には、外法に走った魔術師の討伐も幾度となくあった。

そういつたときはたいてい、魔術師の拠点<工房>に自ら踏み入った。

工房というのは魔術師の拠点であり、自身が探求した魔道を守るた

めの要塞でもある。

必然的に幾多のトラップが仕掛けられている、おまけに衛宮士郎の魔術耐性はお世辞にもいいといえず、いやほとんど一般人と変わらないといってもいいだろう。

故に、魔眼による暗示やトラップを喰らうことは一番避けたいことであり、そういったものに対する警戒は、並外れて鍛えられていた事実、かつて戦った魔術師の中には、水をミスト状にして操り敵の体内に直接毒物を打ちこむといったことをしてきたの者もいた。

<クリア・パッション>などの様な兵器は気付かれないからこそ有用であり、気付かれてしまえばそれも半減してしまう。

ちなみに今回志保が気付けたのは、周囲の湿度の急激な上昇を感じたからだ。普通ならば気にもかけないような事象にも警戒を向けるのは流石だと言っているが、それによって楯無の警戒心はトップレベルにまで引き上げられたのは、志保にとっては不幸というほかなかった。

(決めた……これが終わったら、この子のことを徹底的に調べるわ！！　ここまでしておいて何も無いつて有りえない)

(なんだろう……抵抗すればするほど、深みに嵌まっている気がするな……ここは勝負に出てさっさと終わらせるべきか?)

何か、いやな予感を感じる志保と、当初の目的をすっかり忘れている楯無、その時

カチカチッ

そんな音を鳴らして志保が撃っていたアサルトライフルが弾切れを告げる、自身のミスを悟り顔を顰める志保に対し、ここをチャンスと見る楯無、楯無はガドリリングガンを打ち続けながらもう片方の手に蛇腹剣<ラスティール・ネイル>を展開、志保に対し突撃を仕掛ける。

このタイミングでは武装の再展開は間に合わない、楯無はそう判断したが

あろうことに、志保は弾切れになったアサルトライフルを楯無に向かって投げつける。

鉄塊二つが高速で楯無に飛来する、それを楯無は悪足掻きと判断する、確かにその判断は間違っていない、通常ならば命中したところでISには何らダメージを与えないだろう。

しかし、それは普通に投げた場合の話、志保は普通になど投げていなかった。

志保が使った技は鉄甲作用と呼ばれるもので、聖堂教会に伝わる投擲技法であり、投擲物に出鱈目な威力を付加することができる技だ。かつて、聖堂教会の切り札、埋葬機関の第七位と出合った際に教えてもらい、衛宮士郎の魔術との相性の良さも相まって、好んで使っていた技でもある。

命中した途端、轟音を伴って楯無の体が大きく揺れる。

(嘘!?　なんでこんなに威力があるの、ってマズイ!!)

ありえない衝撃に一瞬楯無の動きは止まる、何とか視線を戻せば、いつの間にやらスナイパーライフルを構えた志保の姿、無慈悲に放たれる弾丸は、狙い過たず楯無の頭部に命中した。

（これで決まったか？）

弾丸が命中したことを確認した志保、しかし、必殺を期して放たれた弾丸は

楯無の頭部にのみ展開された水のヴェールによって防がれていた。

（何だと！？）  
（危なかったあ…でもこれで！！）

同時に楯無は瞬時加速と同時に<ラスティ・ネイル>を揮う、スナイパーライフルというとり回しの悪い武器を構えている志保は、その一撃を完全によけることはできなかった

揮われた銀閃は、直撃はしなくとも<打鉄>のシールドエネルギーを大きく削り取る。そして

「志保さんのシールドエネルギー残量零、更識さんの勝利ですね」

試合を見届けていた真耶の宣言により、この戦いは楯無の勝利に終わった。

|||||

「やっぱり勝てませんでしたね」

「私として戦いになったことが、不思議でたまらないんですが…

…」

「そうよねえ、私もここまで手こずるとは思わなかったわ」

戦いを終えて、三人はISを解除して集まっていた。

当然の結果だというような表情をしている志保に対し、楯無と真耶は怪訝な目を志保に向けていた。

普通、素人と国家代表が戦えば、瞬殺で終わるのが道理だ。

にもかかわらず、今の一戦は戦いとして成立していた、そんなことをすれば訝しむのも無理はない。

実際最後の一撃は、楯無にとってもかなり危ない一撃だった。

あれがもし決まっていれば、勝者は逆転していただろう。

「……………ほんと、あなたって怪しいわね、いろいろと教えてほしいわ」

「そ、そうですか!?!」

ジト目で睨みつける楯無、それにたじろぐ志保、そこに

「私も、いろいろと教えてほしい、……………姉さんにね、……………何をやっているの?」

絶対零度の冷たさを帯びた、簪の音が響く。

「え…………? 簪ちゃん、どうしてここに」

「本音から聞いたの、姉さん……………」

思わぬ乱入者にたじろぐ楯無、まあ、堂々と言えることではないこととの自覚はあったのだろう。

志保はそんな混乱した状況に頭を抱え、真耶のほうはそそくさと逃げていた。

「え〜と、簪ちゃん、あのね……………」

何とかこの場を収めようと必死になって言葉を探す楯無、そんな姉を目の前にして簪はついに爆発した。自分を救ってくれた、好意を抱いている人物に私刑まがいのことをされては簪のほうも我慢の限界だったらしい。抑えきれぬ衝動が、言葉となって楯無に向かう。

「お姉ちゃんなんか、

大嫌いっ!!!」

その言葉に、楯無は完全に固まった、目に入れても痛くないほどに愛している妹からの完全な拒絶の言葉は、楯無にとっては致命的な一撃だった。

さすがにこれ以上はまずいと判断した志保は、二人の間に割って入った。

「ちょっと落ち着け、簪さん」

「でも、志保!!!」

「なんでお姉さんがこんなことをしたか教えようか？」

「えっ……」

「ちょ………待ちなさい!!!」

志保の思いもよらぬ一言に焦りを見せる楯無、姉としては妹にはかっこいいままでいたいのに、それを言われては、姉の威厳は木っ端みじんに崩れ去るだろう。

焦りを見せる楯無を無視して、志保は言葉を続ける。

「いいや待たない、簡単にいえばな、妹と仲良くしたいのに、見も知らぬやつが妹と仲良くしているから、嫉妬したんだよ」

「そ、そうなの!？」

「そうそう、昨日の膝枕の映像を見ている会長、ほんとに不機嫌だったからな」

「あ、あれ……………見られてたの!？」

「ああ……………、姉としての威厳が崩れ去る、ひどいわ衛宮さん! あなたにはデリカシーというものはないの!！」

「悪いが昔から鈍感だのなんだの言われ続けたからな、そういうたことは期待しないでくれ」

涙目になって志保に詰め寄る楯無、秘密を暴露された怒りというより、秘めた想いをさらされた恥ずかしさが勝っているようだ。

しかし志保はそんな楯無の追及などどこ吹く風で、昨日の膝枕を姉とはいえ、他人に見られていたことを知って、恥ずかしさのあまりフリーズしている簪に声をかける。

「そつだ簪さん、今日の夕食だけど、会長と一緒に食べないか？」

「え……………姉さんと？」

「え……………簪ちゃんど？」

志保の突拍子もない言葉に、更識姉妹は再び固まるのだった。

## 第7話（後書き）

<あとがき>

みんなカレイドルビー大好きですね（汗

しかし、あの話の続きを書くなんて、作者にできるのか？

## 第8話

アリーナで行われたハイレベルだが非常に下らない戦い、某生徒会長がシスコンをこじらせて暴走し、いろいろな人物を巻き込んだ騒動は、最愛の妹の介入によって鎮圧された。

ちなみにアリーナでの試合の記録は、閲覧制限がかけられることとなった。

IS学園ではアリーナを使用する際は、どんな時であろうとも記録を保存することが義務付けられている。

ISというのはどう取り繕うが強大な力を持った兵器である、いかに搭乗者を保護する機能が優れているが、不測の事故が起こる可能性がある。

そういうことが起こった際、原因と責任を明確にするためだ。また、生徒たちにそれらを閲覧できるようにもしており、他者の機動・戦術を見てさらなる技術の向上にも役立てるようにしている。

しかし、志保と楯無の戦いの映像が参考になるかといえば……・もちろん否である。

それも当然のことだろう、楯無はともかく志保のほうはセオリーを完璧に無視している、しかもそれで国家代表と互角に戦ってしまった。

FCS切って射撃するような戦いをだれが参考にできるといいのか、それが後日、映像を見た教師陣の一致した感想だった。

その後、この映像は閲覧制限がかけられ、衛宮志保を要注目人物として注意を払うこととなった。

……つくづく、衛宮の名を持つ者には幸運というものがないよ  
うだ。

そして、騒動の中心にいた姉妹はというと

学生寮の一室で、湯気が立ち上る夕食が並べられたテーブルをはさみ対峙していた。

志保の突然の提案でこんな状況になったせいかわ、互いに無言のままだ。

簪にしてみれば、自身に今までのしかかっていた重荷を、無自覚且つ悪意がないとはいえ作り上げていた姉だ。

いままで簪を突き動かしてきたのは、姉への反逆心、最近はルームメイトによつて幾分かは薄れたとはいえ、長年にわたり堆積していたそれは、簡単には消えはしない。

楯無にしてみれば、最愛の妹……だが、ここ数年の仲は最悪だった。楯無自身も、簪が自分に対してどういった感情を抱いているのかは理解している。

だけどどう接すればいいか、これが他人ならば楯無はズバツと切り込んでいったらどうだろう。

しかし、身内だからこそ楯無は躊躇していた、端的にいえば照れているのだこの女傑は、そのあたりはまだこの少女が、年相応であることの証なのだろう。

「どうしたんだ、まるで初めてのお見合いの席みたいに固まって」

能天気な声でそんなことをのたまいつつ、その手には出来たての炊

き込み御飯を持ちながら志保がやってきた。  
そのまま淀みのない手際で配膳を終えると、志保も同じようにテーブルに着いた。

「さあ、用意できたぞ、冷めないうちに食べてくれ」

その言葉に簪と楯無は同時に箸をとり、夕食に手を付ける。  
はつきり言つて雰囲気は最悪だった、険悪な、とはいかないまでも重苦しい雰囲気が食卓を包んでいた。  
しかし

「おいしい」

志保にとつても自信の逸品である炊き込み御飯を口にした簪が、顔に喜色を浮かべながらそう言った。

「それはよかった、まだたくさんあるからな、どんどん食べてくれ」  
「……うん、ありがとう志保」

そう言つてハムハムと、そんな擬音が似合いそんな感じでご飯を食べ続ける簪、その様子はまるで小動物の様な可愛らしさを持っていた。

それを見て楯無は一言

「衛宮さん、グッジョブ！」  
「いいから鼻血を拭け、あんたは」

そう言いながら、ビツ！と親指を立て、整った鼻筋からは妹への赤き愛情をあふれさせていた。  
志保は頭を抱えながらも、楯無にハンカチを差し出していた。

「……どうしたの、姉さん、志保」  
「な、何でもないわよ、簪ちゃん」  
「そうそう、単に会長が手遅れというだけだ」  
「……？」

訳が分からない、という感じで首を傾げる簪を見て、楯無の赤き愛情がさらにあふれ出た。  
そのシスコンっぷりには、流石の志保もちょっと引いていた。  
そんなとき、志保はある事に気づく、そして簪に対し

「ご飯粒ついてるぞ、ほら」  
「えっ！？ どこに？」  
「ほらここにだよ」

そう言って、そのご飯粒を指先で拭いとる、志保はそれをそのまま口元へと運んだ、志保の口の中に消えるご飯粒を見ながら、簪は顔を真っ赤にさせる。

「あ、あの！？ え、えっと志保……………」

「どうしたんだ？」

「だ、だってそれ、か……………間接キス……………」

「ハハツ、変なことを言うんだな、簪さんは、女性同士で間接キスも何もないだろう？」

笑いながら鈍感極まりない言葉をのたまう志保、簪のほうはといえは明確に“間接キス”という言葉が発してしまったせいか、余計に顔を真っ赤にしている。

「……………志保の馬鹿」

「……………なんでさ」

そつぽを向き拗ねる簪に対し、志保は全くわけがわからずにかつての口癖を漏らす。

その時だった、志保に向かって強烈などす黒いオーラが向けられた。そのオーラの発信源は当然

「……………その役目は、普通姉のものよねえ」

「……………いいから落ちつけ、また簪さんに嫌われるぞ」

目の前でラブラブな様子（楯無主観）を見せつけられた楯無だ、それを志保は鋼の精神でもって平然と対応する、単にこういう手合い

に慣れているとも言っ  
た。そんなふうには、多少の騒動はあったもののつつがなく夕食は終わった。

|||||

「ごちそうさま、今日もおいしかったよ、志保」

「ごちそうさま、簪ちゃんの言うとおりにねえ、本当においしかったわ」

「好評のようだなによりだ、食器は私が洗っておくから、二人はゆつくりしてくれ」

志保はそういって、慣れ手つきで緑茶を二人分注ぐと、手際よく食器を片づけ流し台のほうに向かった。

後に残されたのは、簪と楯無に二人だけ、再び食事前のように無言になってしまふ二人、しばらくの間静寂がその場を包み、食器を洗う音と水音だけが静かに響いていた。

「ねえ……………簪ちゃん」

その静寂を破るように、楯無は常の飄々とした雰囲気ではなく、不安げに簪に声をかける。

「……………どうしたの？ 姉さん」

簪もまた、先の食事時とは違い、声色に暗さを滲ませていた。

「あのさ………簪ちゃんがく打鉄式式を一人で作るうとしてるって聞いたけど、本当？」

その問いは、簪にとっては、楯無から最もしてほしくない質問だった。

姉の幻影を振り払うためにしていることを、ほかならぬ姉本人の口から聞かれる。

それはとてつもなく惨めだ、惨めなはずだった、しかし

「うん、姉さんみたいにうまくいってないけどね………」

「大丈夫、私だって必死に苦勞しながら組み上げたんだから、…簪ちゃんならきつとやり遂げられるわよ」

「ありがとう、姉さん」

「だからね、姉さんにも手伝わせてほしいな………って、思うんだけど、だめ？」

それは楯無なりに簪に歩み寄ろうとしているのだろう、おずおずとそう頼んできた。

少し前までの簪ならば、意固地になってその申し出を拒否しただろう。

簪の脳裏に浮かぶのは、今日の、いつそ情けないと言っていい姿を見せた、完璧な人だと思っていた姉の姿

「だめ、＜打鉄式＞は私の手でくみ上げる」  
「……そう、わかったわ」

簪の明確な拒絶の言葉に、楯無は落胆する。しかしその様子は、あらかじめ想定していたような、そんな感じだった。

「                    だけど」

「え！？」

続く言葉は楯無の想定の外だったのだらう、きよとんとした顔を見せていた。

「わからないところがあるから、………教えてもらっても、いいかな？」

照れながらそう頼む簪を見て、楯無は自分と同じく簪もまた、少しは歩み寄ってくれたのだと感じた。  
それを実感すると、楯無の顔に今日一番の笑顔が浮かぶ、更識家当主でもなく、IS学園生徒会長としてでもなく、更識盾無の本心からあふれ出た、屈託のない笑顔だった。

「勿論、ほかならぬ簪ちゃんの頼みだもの、OKに決まっているじゃない」

「ありがとう、姉さん」

「フフツ、簪ちゃんにこんなふうにお礼を言われるなんてね」

「…やっぱり、さっきの頼みことは無し」

「あ〜ん、ひどい〜」

軽口をかわしながら、笑顔で会話する二人。

姉妹ならありふれた、しかし、この二人にとっては数年ぶりの光景だった。

「……簪ちゃん、最近変わったわね」

「そうかな？」

「うん、だって少し前なら、私にさっきみたいな頼み事しないでしょ？」

「たぶん、そうだと思う、……私はずっと姉さんのことを、何でもできる天才で、私はずっとその陰に隠れている存在だって、…そう思ってた」

「じゃあ、今は私のことをどう思っているの？」

「姉さんだって、ダメなところとか、カッコ悪いところもあるんだなって、何もかも完璧な存在じゃないって思ってる」

「当然よ、表にはいい面を見せているだけで、私だって欠点くらいあるわよ」

「今日の一件みたいに？」

「うう、簪ちゃんがいぢめる……」

そう言って泣きまねをする楯無、しかし、次の瞬間にはピタッとそれを止めると簪に質問をした。

「簪ちゃんが変わったのって、やっぱり衛宮さんのおかげ？」  
「うえ！？　そ、それはその……」

突然の質問に、簪はあたふたと慌てふためき、顔にはあつという間に朱が差していた。

それは明確に、先ほどの問いの答えを示していた。

「やっぱりねえ、あの子って確かに、さりげなく人助けとかしそうだしねえ」

「うん、そうだと思う」

「今日だって、私を誘ったのも、私と簪ちゃんの仲を気遣ったのとだと思っし」

「姉さんは、志保のことをどう思ってるの？」

「そうねえ……、いろいろと怪しいと思ってるわ、今日だって私と互角に戦ってたし」

「それはそうだけど……」

「だけどね」

「裏があるとは思っているけど、いい人だと、そう思っているわ」

茶目つ気を含ませて、楯無はそういった。

そこにちょうど、食器の片付けを終わらせた志保がやってきた。

「何の話をしているんだ？」

「うん、秘密ね、それは」

「じゃあ、いいです」

「ひどくない？ それって」

「そういうことを言っている人物を迂闊に突つくと、ろくなことにならないですからね」

「そうしたほうがいいよ志保、姉さんって基本的に悪戯が好きだから」

「うう……二人ともいぢめる、いいもんいいもん、どうせ私にはそんなポジションがお似合いですよ〜だ！」

床にしゃがみながら指先でのの字を描く楯無、簪はそれを見て笑いを洩らしながら姉をなだめる。

「フフツ、拗ねないで、姉さん」

「ああつ、もう、簪ちゃんは優しいわね！」

「もう、抱きつかないでよ姉さん」

「やれやれ、忙しいことだな」

感極まって簪に抱きつく楯無、簪のほうも口では嫌がりながらも、そこまで悪い気はしていないようだ。

志保はその光景を、呆れながらも優しく見つめていた。

そうして夜は更けていき、部屋からはしばらくの間、三人のにぎやかな声が響いていたのだった。

|||||

夜もだいぶ更けたころ、月明かりだけが光る室内で、のどが渴き目が覚めた私は、冷蔵庫の中にあるミネラルウォーターを飲んでいた。ついでにトイレも済まして、コップを片づけると、私はベッドに戻ろうとした。

その途中、ベッドで寝ている志保の姿が目に入る。

月明かりに照らされる紅い髪、日頃纏っている凜とした雰囲気が消え、志保に対して失礼かもしれないけど、まるであどけない少年の様な寝顔だった。

ゴクリ、と音が鳴る。

それが自分が唾を飲み込む音だと、数瞬間の間気付かなかった。

揺らめく月明かりのもとで眠る志保の姿は、幻想的な美しさで、大人の雰囲気と子供の雰囲気が混じり合った、何とも言えない魅力があった。

胸が高鳴り、心臓が早鐘のごとく脈打つ、別に自分には同性愛の趣味はないはずなのに……

よく見れば、寝返りを打ったのだろうか、志保の体はベッドの端のほうによっていた。

それはちょうど小柄な人間なら入れる、そう、自分ならちょうどいいぐらいで

( って、何を考えてるの私!?)

いつの間にかやら、自分が志保と一緒に寝ることを夢想していたことに気づく、だけど

（私たち女どうしなんだから、別にそんなにも忌避するようなことじゃ……ない？）

そう　　ほかならぬ志保自身が言っていたじゃない、間接キスぐらい女性同士で騒ぐことじゃないって、だったらこれぐらい別に

……

そうして私は自分のベットではなく、志保のベットへと足を進める。一歩一歩進めるたびに、鼓動はそのリズムを際限なく高めてゆき、耳障りな音を耳元で鳴らし続ける、静寂であるはずの部屋がまるで戦場のように感じられた。

そうして私はようやく、志保のベットへとたどり着く。

志保を起こさぬよう静かに入り込む私、その間爆音の様に響く心臓の鼓動で、志保が目覚ますんじゃないかとびくびくしていた。

ただベットに寝転ぶ、そんな単純なことだけでとてつもなく長い時間をかけて私は、ようやく志保の隣で寝たのだった。

顔を向ければ、すぐそこには志保の寝顔、あまりに近すぎて志保の吐息が私の顔にかかる。

体は密着して、直に志保の体温を感じている。

そんな状況では、まともに眠りにつけるはずもなく

(どろじしよろ、……緊張しすぎて全く眠気が来ない!?)

そんな時だった。

「……………うつん」

そんな寢息を漏らしながら、志保が寢返りを打つ、腕が回されちよ  
うど私に抱きつく体制になる。

ただでさえ寝れない状況なのに、こんなことになってしまっただけはも  
っと寝れなくなってしまう、おまけにこの状況では脱出も不可能だ。  
自業自得とはいえ、こんなことをしてしまったことに後悔してしま  
う。

(ど、どろじしよろ!?) やっぱりこんなことするんじゃないかった)

そんなことを考えながらも無情に時は過ぎていき、私は人生の中で  
一番眠れぬ夜を過ごしたのだった。

ちなみに、朝起きてからの志保の反応はといえば

「寝ぼけて違うベットに入り込むなんて、そそっかしいな簪さんは」

まるで、幼い子供が可愛げな失敗をしたかのように、笑って許したのだった。  
想定道理とはいえ、こんなにも平然とされるのは何か間違っていると思う。

「……志保の鈍感」

「なんでさ!?!」

## 第8話（後書き）

<あとがき>

なんだか会長が書いて行きたびにどんどんダメな子になってしまう、  
どうしてだ……

ちなみに感想で鈴派から簪派に変わったの？　なんてことを聞かれたのですが、実を言うと志保は最初っから一夏とは違うクラスにしようと考えていたからで、別に鈴と一緒にのクラスにしたことにそこまで意味はないという……　ああっ！！　ごめんなさいセカン党の人たち、石投げないで！！

しかし……いまだ一巻の内容すら終わっていいえ、この話志保と一夏のダブル主人公だから、当然進む速度も二倍遅いんだよなあ（汗

## 第9話

閃光が走る、空を舞うく白式>を撃ち落とさんとするために、それをく白式>は体をひねりかわす。

かわすと同時にく白式>はスピードをあげるが、行く手をふさぐようにして四筋のビームが光の格子を形作る。

急制動をかけるく白式>、PICがあつてもなお殺しきれぬ慣性が一夏の体を襲い、ギシリと軋みをあげる。

一息つく間もなく四機のくブルー・ティアーズ>が、獲物に噛みつかんとする猟犬のように、高速でく白式>に飛来する。

ただし、過日のクラス代表の時とは違い、ビーム砲の銃口に打突用バレルガードが追加されている。

だとすれば今のくブルー・ティアーズ>は獲物にかみつくと猟犬ではなく、雀蜂のごとき機動性を持った猛牛といっていいだろう。

閃光の後を追うように四方より迫るくブルー・ティアーズ>に対し、一夏はそのうちの一つ、右斜め上から迫るそれに狙いを絞り瞬時加速をかける。

刹那、く白式>のいた空間を三つの猛牛が駆け抜ける、そして残る一つは

眼前に迫るくブルー・ティアーズ>に対し、一夏はく白式>唯一にして無二の刃く雪片式型>を構える。

そして、激突する瞬間の刹那を見切り、く雪片式式>の刃をもって

迫りくる猛牛の角を、精妙なる刀捌きによって往なしてみせる。

誰もが予想するような盛大な激突音を響かせることはなく、わずかな金属音と小さな火花だけが結果を知らせる。

その様はまるで華麗なる闘牛士のようなようだ。勢いはそのまま、ほんのわずかに向きを変えられたくブルー・ティアーズはく白式の後方へと突きぬけていく。

そうして一夏は四つのナイトを置き去りにして、本丸であるクイーン、セシリア・オルコットへと突撃する。

対するセシリアの顔にはいまだ余裕が見える、この程度、想定の内だと言わんばかりに。

次いで撃ち出されるのはミサイルだ、白煙を伸ばしながら二つの鉄塊がく白式に襲いかかる。

先と違い、一夏はそれを刃先にて往なすのではなく、飛燕のごとく二度振りぬき、ミサイルの信管を断ち切った。

勢いを失い四つに分たれた鉄塊が落下する、これで残るくブルー・ティアーズの武装はレーザーライフルくスターライトmkIIのみ、高い射撃精度と射程距離を持つその武装は、それを実現させるため長大な銃身によって近距離での取り回しに難がある。

実質この距離では役に立たない、一夏は己の勝利を確信し、く雪片式型を握る手に力を込める。

それに呼応して、く雪片式型から白い光が迸り、純白のエネルギー刃を作り出す。

く零落白夜 対象のエネルギーをゼロにすることによって、  
対エネルギー兵装に絶大な威力をもたらすく白式の単一仕様能力ワンオフビリティ、  
ISにとっての絶対斬撃、それが今、放たれようとしていた。

しかし、セシリアの顔にはいまだ余裕が浮かぶ。

その時だった、ISのハイパーセンサーによって全周囲への視界を認識できる一夏が、後方に置き去りにしたくブルー・ティアーズがこちらに向け、ビームを放ったのを捕らえたのは

しかし、一夏はその攻撃は問題なしと判断する。

なぜならばくブルー・ティアーズはロックオンすらしていない、その証拠にく白式からのロックオン警告は一切ない。

その予想通りに、四筋のビームはく白式にかすることすらなく

ガラクタと化したミサイルに命中する。

花開く火球、熱風に炙られ、衝撃波と飛礫がく白式を揺さぶる。

当然、そこにレーザーが撃ち込まれる、セシリアは自身の策が見事に成功したことに、満足げな笑みを浮かべた。

『く白式へのシールドエネルギー零、勝者セシリア・オルコット』

そして、機械音声がく白式へのシールドエネルギーが零になったの

を告げたのだった。

「フフツ、これで私の勝ちですわね、一夏さん」

「くっそ〜、次は勝つからな!!」

「せいぜい期待してお待ちしておりますわ」

誇らしげな表情で勝ち誇るセシリア、ストレートに悔しさが顔に出ている一夏。

しかし両者の間は険悪な雰囲気ではなく、爽やかさすら感じさせる健全なものだ。

お互いに腕を競い合い切磋琢磨する、ライバル、という表現が一番適切だろう。

降下し、大地に降り立った二人はそれぞれ自身のISを待機状態に戻す、一夏のく白式>は白いガントレットに、セシリアのくブルー・ティアーズ>は青いイヤークアスになる。

そのまま二人はアリーナのピットに戻る、そこにはもう一人いた。

「お疲れ、一夏、セシリア、」

そこにいたのは黒髪の少女、篠ノ之箒、箒は二人にスポーツドリンクとタオルを手渡す。

一夏とセシリアはそれを受け取り、汗を拭いて喉をうるおす。

その様子を見ながら、箒が先ほどの模擬戦の感想を漏らす。

「それにしても、大分上達したな、一夏」

「ええ、この前のクラス代表決定戦の時より、機動がスムーズですわね」

「そりゃここ数日、放課後になるたびに模擬戦やってるからな、多少は上達してないとおかしいだろ？」

「しかし、この上達速度ははつきり言っておかしいと思うがな……」

「そうですね、まだまだ粗がありますけど、搭乗時間の短さを考えれば、驚異的といっていいですわ」

「それでもセシリアには最初の試合以外、負け越し続けているけどな……」

それを聞いたセシリアは、堂々と胸を張る

「当然ですわ、あの時は確かに私の油断で無様な負けをさらしましたが、それがなければ当然の結果です」

「その割には、『クラス代表の座をかけて、再び戦いなさい!!』とか言わなかったよな？」

「当たり前ですわ!! そんなみっともない真似できるわけがありません、何よりあの勝利を勝ち取った一夏さんに対する侮辱ですわ!!」

その様子に一夏は笑みを漏らす、口ではなんだかんだ言いながら、しっかりと自分の勝利を認めていてくれることに、あんなまぐれ勝利にもかかわらずにだ。

実際セシリアはいいやつだと一夏は思っている、この模擬戦だってセシリアが提案してくれたものだ。

クラス代表決定戦の翌日

『一夏さん、曲がりなりにもクラス代表になったのですから、一日も早く腕を磨かなければいけませんわ、ですから、私直々に指導して差し上げますわ』

なんて、非常にありがたいことを言ってくれたのだ。

考えようにとつては、公衆の面前で素人に負けるといふ失態をさらす原因にもなったやつに、そこまでしてくれる。

いまだ素人の一夏にとつては、その申し出はありがたいものだった。

「ありがとな、セシリア」

「いきなりなんですの？」

「いや……こうして模擬戦の相手をしてくれることに、ちゃんとお礼を言っただけだと思っただけ」

「最初に言っただけですよ、クラス代表になったのですから、一日も早い上達が必要だと」

そしてセシリアはいったん言葉を区切り

「……………と、友達なら、当然ですわ」

そっぽを向き、消え入りそうな声でそういった。

一夏からは表情は見えないが、きつと真っ赤にしているのだろう。

「そっか……、けど、だからこそ言わせてもらっせ、ありがとう、セシリア」

「どっ、どっいたしましてすわ」

顔をそむけていても、耳まで真っ赤になってしまっっては意味がないぞセシリア、そんなことを思いながら二人のやり取りを見つめる箒。そして箒の乙女の勘が、セシリアはやがて強大な敵になると確信していた。

昔と変わらぬ、片思いの幼馴染の無自覚たらしっぷりに、嘆息する箒であった。

「……………またか、こいつは」

「なんか言ったか？ 箒」

「なんでもないっ!!」

全然欠片も自覚のない一夏の様子を見て、再び箒は溜息をつく。溜息はむなしくアリーナに溶けて消えていったのだった。

|||||

「転校生？」

翌日の朝、教室に入るなりクラスメイトから聞いた噂話によれば、こんな時期に転入生が来るらしい。いまだ四月である時期に、入学ではなく転入なんて、国の推薦でもなけりや難しいはずなのだが……

「それが中国の代表候補生らしいよ」

その予想を裏付けるように、クラスメイトが言葉を続ける。しかし、中国の代表候補生か、いったいどんな奴なんだろうな。そんな奴ならば学校行事でいつかは戦うかもしれない、そう思うとまず人となりよりも、どんな機体を使うのが気になってしまふ。代表候補生をわざわざ送りこむぐらいなら、機体も当然最新鋭の機体でもものすごく強いんだろつなあ、まともに戦えるかが今から心配になってきたな。

「あら、私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

どうやらセシリアにはそんな心配とは無縁の様だ、羨ましくさえある。

この堂々とした佇まい、少しはこっちに分けてほしいものである。

「その転校生、気になるのか？ 一夏」

「そりゃ当然、代表候補生なんだから、すぐにクラス代表になって、今度のクラス対抗戦で戦うかもしれないだろ？」

その俺の予想に、篤は「確かにな」と同意を示す、そしてもう一つ、

同意を示す声が響く。

その声はセシリアでもクラスメイトでもない、IS学園に来てから初めて聞いた声、しかし、その声は俺がかつてよく聞いた声だ。

「ええ、そうよ、あんたの予想は当たってる」

声の主は、見慣れたツインテールを揺らしながら、教室の入り口に立っていた。

俺は内心で思い浮かべた名前を、一年ぶりに口に出す。

「鈴……？ お前、鈴か？」

そう、一年前に国元に帰った幼馴染、鳳鈴音の名を

## 第10話

「さて……説明してもらおうか、一夏」

「さて……説明してもらいますわよ、一夏さん」

しかめっ面をさらして、俺を睨む二人がいるのはIS学園の食堂だ。あの後、教室にやってきた千冬姉の出席簿アタックによって、鈴は自分のクラス、一年二組へと退散していった。

あの時の驚き様から言って相当ビビってたみたいだな、鈴のやつ昔っから千冬姉のこと苦手だったからな。

「あんた失礼なこと考えているでしょ」

「そんなことないぞ？ ちよつと昔を懐かしんでいただけだ」

「嘘ね、大方朝にあたしが千冬さんに撃退された時のこと考えてたんじゃないの」

「よくわかつたな、さすが幼馴染」

「あつたり前でしょ、一夏の単純思考なんてすぐわかるわよ」

うん、こういう流れるような会話、すごく懐かしいな。

中学時代もこうやって、いろいろと馬鹿話に花咲かせてたっけなあ

……

「無視するな！… このうつけっ！…！」

「この私を無視するとは……いい度胸ですわねえ、一夏さん」

そこに飛び込む怒声が二つ。いけないいけない、懐かしさのあまり二人をのけものにしまった。

「悪い悪い、別にそんなつもりはなかったんだが」

「だったら、ちゃんと説明しろ！」

「そうですわ、淑女をないがしろにするなんて、殿方のすることではございませぬわ！」

何故だか妙に機嫌が悪い二人をなだめるために、鈴のことを説明しようとしたのだが……

「んじゃ説明するよ、こいつは」

「凰鈴音、“一夏”の幼馴染よ！」

鈴のやつが割り込んできやがった、それも妙に俺の名前を強調してだ。コイツほんとに目立ちたがりと言っかなんというか……とにかく前に出たがる性格なんだよな。

「ほっ……」

「へえ……」

ほら見る、そういうことするから二人の機嫌がさらに悪くなってるじゃないか。

「詳しく言うけど、小学五年に俺と同じ学校に転校してきたんだ。ちょうど四年の時に引越して言った筈と入れ替わる形だな、そして中学二年のころに引越したんだよ……まさか中国の代表候補生になってるとは思ってたけどな」

「それはあたしだって同じよ、まさか一夏が男性初のIS操縦者になってるなんてね」

向こうのテレビでいきなり一夏の顔が出てきてほんとビビったわよ……とぶつくさ言っている鈴。  
するといきなり何かを思い出したかのように、俺のほうに向きなおりながら言った。

「そつだ…一夏、あたしがISの操縦……教えてあげよつか?」

「おまえが?」

そりゃ代表候補生になってるぐらいだから、腕のほうも相当なものなのはわかつちやいるが……

「そんなものはいらん!! 一夏は一組の代表だ。二組の貴様の手はいらん!!」

「そつですわね、横から割り込むのは無粋ですわよ」

炎のように怒る筈と、冷たさを感じさせる静かな怒りを見せるセシリア、まあ、その気持ちはわからんでもないよな。誰だって自分が教えている奴が、いきなり現れたやつに鞍替えしたらそりゃ不機嫌にもなる。

「なんなの、あんたたち」

そんな二人にどうでもよさげな視線を向ける鈴、あれは絶対二人をどうでもいいやつって思っているな。

「一組所属のイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ！」

「一夏の最初の幼馴染、篠ノ之箒だっ！！」

どうやらそれを聞いて、少しばかりの興味を持ったらしい。形のいい眉がピクリと跳ねる。

「ちょっと聞き捨てならないのが聞こえたわね……一夏の最初の幼馴染、ですって？」

「そうだ、一夏と出会ったのは貴様より先だ」

「ふん、だからどうしたってのよ、古い幼馴染よりつい最近まで一緒だったあたしのほうが上ね」

「何っ！！」

なんでこの二人はこんなことでヒートアップしてるんだ？ しかも

周りから「修羅場!？」「元カノ同士の争いとか初めて見た」とか訳のわからないのが聞こえるんだよな。

「どうせあんたなんか、再会するまで忘れ去られてたんじゃないの?」

「そんなことはない!」

「じゃあ証拠見せてみなさいよ」

「ああ、いいだろう」

「へっ!？」

そんな言葉を返されるとは思っていなかったらしい鈴を横目に、箒は携帯を取り出し画像ファイルを開く、映し出される画像は

「どうだ!!　これが私と一夏の仲の良さを示す証拠だ!」

「なっ!？」

中学三年の、剣道全国大会の時に撮った写真じゃないか。ちゃんと保存してくれていたのか。

それを見た鈴の表情は、信じられないものを見るような目つきだ。

あんな写真ぐらいならいくらでも一緒に撮ってやるのにな。

後、周囲の人たちはなんでこんな写真ぐらいで歓声をあげているんだ?

「な、なによそれぐらい!？　あたしだってそのぐらい!」

「そのくらい……何だ?」

ニヤリ、となんだか勝ち誇ったような笑みを浮かべる篤、だから一体お前らはなんで争っているんだ？ マジでわからん、誰か教えてくれ。

「そんなうらやま……じゃなかった、写真はないけどあたしと一夏の間には約束があるんだから!!」

「約束？」

「ええ、そうよ、当然覚えているわよね、一夏」

「いきなりだな、おい！ ええと、ちよっとまで」

鈴のいきなりの無茶ぶりに、それほど高性能でもない自分の脳をフル回転させる。

ええと、鈴との約束……そうだ、確か鈴はあまり料理が得意じゃなく……

「確か、鈴の料理の腕が上がったら……」  
「そう、それよ!!」

花開いたように晴れやかな表情になる鈴。この感じ、これで当たりみたいだな。いきなりの無茶ぶりにもちゃんと応える自分の脳細胞に感謝しつつ、記憶の海からの残りの言葉を引きずり出す。

「 毎日酢豚を奢ってくれるってやつだよな」

喧騒に包まれていた学食全体が、静寂に包まれる。あれ、この反応、なんか間違えたのか？  
おつかしいなあ、確かにこんな約束だったはずなのに。  
ちよつと恥ずかしいが、鈴に確認してみよう。

「なあ、これで合ってるよな鈴」

「さ、さ……………」

うつむき何やら呟いている鈴、やばい、なにか盛大に間違えたのか、俺？

ばね仕掛けのおもちやの様に勢いよく顔を跳ね上げる鈴、その眼には光るものが……………って、鈴のやつ泣いてるのか！？

「最っ低!!!!!!!!!!!!!!」

同時に放たれるアップパーカット、その拳は俺の顎にクリティカルヒ



「よく来たわね、一夏」

赤み掛った黒いカラーリング、両サイドには一対の非固定部位<ア  
ンロックユニット>が浮かぶ。

その手には本来少女には不釣り合いなほどにでかい青龍刀。しかも  
柄の両端から刃が伸びている形だ。

それを軽々と保持しているISの名は、中国の第三世代型IS<甲  
龍>だ。

当然、その操縦者は現在仲互い真っ最中の鈴だ。先の一言にも平坦  
な声色の中に、機嫌の悪さが滲み出ている。

正直、全力で戦える、と言ったら嘘になる。一年ぶりに出会った幼  
馴染と仲が悪いままってのはいやだし、昔みたいに仲良くつるんで  
た時みたいに笑いあえる仲に戻りたい。

けど、なんで食堂の一件であいつが怒ったのかが未だにわからない  
んだよなあ……。

そんな状態で謝ったとしても、またあいつを傷つけるだけだろう。  
何より今はクラス代表としてここにいる。個人的な問題が原因で無  
様な戦いをしたら、クラスみんなに失礼だ。

気持ちを切り替えた俺は、鈴の静かな気迫に呑まれないように、精  
一杯の虚勢を張った。

「おいおい、一組のクラス代表は俺だぜ？ 来るのは当然だろ」

「ふん、じゃあせいぜい、みつともない負け姿をさらしなさい」

「ああ、精一杯粘った後でな」

「私に勝てると思ってんの？」

「さてな……、だけど、経緯はどうあれ、今の俺はクラスメイトの期待を背負ってる。一矢ぐらい報わせてもらっぜっ！！」

俺の決意表明に対し鈴は無言、今の鈴が俺に対しどどういう感情を抱いているのかは推し測れない。

だが、二刀一対の青龍刀<双天牙月>を構えるその姿には戦意が満ちていた。

俺もそれに応えるように<雪片式型>を量子展開、純白の刃を手中に顕現させる。

そしてアリーナに鳴り響く試合開始の合図、それを聞いた俺と鈴は同時にスラスターを吹かす。

加速する機体、アリーナの中央にて二つの刃が噛み合い、金属音と火花をまき散らしたのだった。

|||||

初手は互いに上段からの振り下ろし、音を立てしのぎを削る二つの刃。形状から言えば通常の日本刀をISサイズにスケールアップしたようなく雪片式型>に対し、<双天牙月>は馬鹿げた、といったいいほどに巨大だ。容易く相手の獲物を折ってしまいそうだが>雪片式型<難なく耐える。

がちりと固定されたかのような拮抗状態、一夏は刃をずらし、滑らせるようにして>双天牙月<をいなす。

巨大な獲物を揮う>甲龍<の力が真下に叩きつけられ、大地に亀裂を作り上げる。

飛び散る飛礫、それを薙ぎ払うように一夏が放つ、返す刀での横薙ぎの一撃。

それを鈴は大地に叩きつけた刃とは逆のほうを切り離し、それを左手で逆手に持ち、一夏の斬撃の軌道に割り込ませる。

再び上がる火花、それを一夏は一顧だにせず斬撃を放ち続ける。

もとより<白式>は近づいて斬る、ただそのみしかできぬ機体だ。いまだ空戦機動が完璧とは言い難い一夏にとって、この状況になったのならば、斬り続けるよりほかはない。

まっすぐに、前へと、ひたすらに、愚直に、唯それだけしか知らぬ、そう言わんばかりに刃を揮う。

純白の刃が煌めく、空を舞う燕のように軽やかに、幾多の方向から飛びかかる。

愚直な戦法をとってはいても、その剣閃の冴えは見事の一言。幼きころから剣術を学び、全国大会を優勝するほどの腕前は、例えばISに乗っていたとしても陰ることはない。

ならば、<双天牙月>という埒外の獲物を揮い、それらを見事にさばき続ける鈴の腕もまた、一廉のものということだろう。

重くてでかい、そんな武器を使うのならばとるべき戦法は一太刀にすべてをかける。それ以外にはありえない、しかし、ISという最新兵器がまったく新しい剣法を生み出す。

力が強い、単純な言葉にすればそれだけだが、重さとでかさという不利を打ち消してしまえるパワー、さらには、手首の関節駆動用モーターの回転を使つての変則的な剣閃。

それらと二刀という数の差が、本来圧倒的にスピードで有利なはずの一夏の斬撃と拮抗させていた。

一夏の斬撃を飛燕と例えるならば、鈴の斬撃はさしずめ龍の爪牙と  
いったところか

切り裂くのではなく、屠り砕く暴風と、それをかいくぐる純白の燕  
の絶え間なき舞踏が続く。

燕の一太刀を鈴は、己が獲物の巨大さを楯として使い防ぐ。

一対の龍の爪牙を、一夏はその軽やかさを使い華麗にいなす。

速さと重さ、互いに使う術理が違うがゆえに、その剣舞は激しさを  
増しながらも噛み合ってゆく。

最新鋭技術の固まりであるはずのIS同士の戦いでありながら、そ  
の戦いは原始的な斬り合いのみ。

大空を制し、重力に逆らえる機動性がありながらも、両者はアリー  
ナ中央にてひたすらに切り結ぶ。

たがいの一歩も引かぬのは意地故にか。絶え間なき剣舞は大地を抉  
り空を切り裂く。

一夏の上段からの振り下ろし、鈴はそれを身をひねりかわす。鈴の  
体を舐めるように振りぬかれた銀閃は、その特徴的なツインテール  
をわずかに切り裂く。

振り下ろされた一撃はそのまま地面をも切り裂く 否、あた

かも燕が舞うような神速の切り返し。

下方から舞い上がる燕を見やり、鈴の顔には焦燥が浮かぶ。

だが、鈴とて代表候補になるほどの手練、即座にく双天牙月へにて  
その一撃を防ぐ。

試合開始直後のように、再び鏢迫り合いへともつれこむ二人。

両者ともにスラスターを吹かし、腕部関節部の動力機構がうなりを  
あげる。

二人の表情は対照的だ。

「……すげえな、やっぱりお前はすごいやつだよ」

一年の間にこれほどの力量を、しかも昔から何かしらの武術を収めていたわけでもないにもかかわらず、修めるに至った幼馴染への感嘆、それを素直に顔に出す一夏。

「……うっさい、嫌味のつもり!？」

対して、そんな自分に追いつがる一夏への苛立ちか、あるいは、自身の奥底にある感情を御しきれぬものなのか、焦燥と苛立ちをあらわにする鈴。

そのいら立ちを吐き出すように、<甲龍>の非固定部位の中心の宝玉に光が灯る。

一夏はそれを、何がしかの遠距離兵装発射の前兆と判断する。

これまで拮抗していたかのように見えるこの試合、しかしそれは鈴が<甲龍>に搭載されているであろう射撃兵装を一切使わず、一夏と同じ土俵に立ち続けていたからだ。

それは一夏とて重々承知している。ならばこそ、そのような前兆を気につけぬはずもなかった。

その警戒をあざ笑うかのような、見えざる一撃。

「ぐうつ！！　なんだ!？」

警戒していたはずの一夏を突如として襲った一撃、あれほど警戒していたにもかかわらず、射線や火点は少しも見えなかった。

衝撃による痛みをこらえながらも、一夏は先の一撃の正体を考察しようとする。

しかし、悲しいかな、一夏のIS関連の知識もまた素人同然といえるものであり、このような特殊極まりない兵器の正体に思っていたれるわけもなかった。

そんな愚考の合間にも、不可視の一撃は放たれ続けている。

まるで地雷が爆発したかのように突然爆発する大地、それだけでなく、不可視の一撃が至近を通り過ぎたのだろうか、顔面近くの空気が挟られるような感触さえある。

焦燥の只中にいる一夏、そこに〈白式〉の管制システムがその兵器の正体を伝える。

敵機の攻撃は、空間自体に圧力をかけ、その際に発生している衝撃波を砲弾として撃ち出しているものと思われれます

しかし、兵器の正体がわかったからといって、打開策が即座に見つかる。そんな都合のいいことが起こるわけもなく、ひたすら逃げの一手を打つ一夏。

先の拮抗など見る影もない一方的な展開、逃げる一夏と撃ち続ける鈴。

いかに龍の爪牙をかくぐることのできる燕とて、見えざる暴風には敵わないのであろうか。

このままでは一夏の敗北は必至、観客の目にもそう見えた。

このような敗北一步手前な状況、ひっくり返そうと思つたならば、相応に賭けねば可能性などあるはずもない。

無茶と呼ばれるようなことをして、望む結果を勝ち取れる運があるか否か、勝負の分かれ目はそこにある。

意を決する一か、<白式>はただでさえ尖った性能の機体でありながら、さらには燃費も悪いという、どうして素人にこんな機体を乗せようと思ったのか、少々どころではなく正気を疑う機体だ。

故に、ぐだぐだと思いを重ねる時間すらなく、一夏は賭けに出るしかなかった。

その決意を鈴もまた感じ取る。一夏は素人だ、しかし、素人であるからこそどんな手をとるか分からない怖さもある。

だからこそ、鈴の中には油断など一欠けらもありはしなかった。

<白式>が動く。

逃げの一手を打っていた<白式>は踵を返し、<甲龍>に突撃する。言葉にすればただそれだけ、しかし、ひとつだけ普通ではないところがある、

高度だ、地を這うような低空飛行でありながら、際限なくスピードを引き上げる。

あれでは下方への回避などとれず、逃げる範囲を自ら狭めている。

そのことをいぶかしみながらも照準を重ねる鈴。

秒にも満たぬ時が過ぎれば、不可視の衝撃は発射され、<白式>はそのまま地に落とされるだろう。

その秒にも満たぬ時に割り込むように<白式>は、<雪片式型>を大地に突き立てる。

そのまま大地を切り裂きつつ、一夏は瞬時加速を発動、そのままの勢いで刃を振りぬく。

跳ね上がる燕とともに、大量の飛礫が舞い上がる。

音速など生ぬるい、世界すら置き去りにするような瞬時加速のスピードは、唯の飛礫をして即席の散弾銃へと作りかえる。

飛礫が鈴の視界をふさぎ、一瞬とはいえ<甲龍>の動きが止まる。

茶色のシャワーが通り過ぎた鈴の視界に写るのは、大地を切り裂いた勢いで大上段に<雪片式型>を振りかぶる一夏。

回避機動をとろうにも、すでに<白式>は瞬時加速を発動している。この試合が始まってから初めて、鈴の顔に倒せぬことからではなく、倒されるかもという不安からくる焦りが浮かぶ。

交錯する二機。

一夏の手に、手応えは……………なかった。

一夏の一撃はわずかに<甲龍>のスラスターを切り裂くにとどまつた。鈴はあそこから<双天牙月>による防御を成功させていたのだ。

「今のは、ちょっと危なかったわよ、一夏」

一夏の背にかかるのは鈴の称賛、唯一といっていい奇策を破られた一夏の内心に悔しさが渦巻く。

初めからこの結果を高い確率で予想していたとはいえ、一夏も男だ、悔しさぐらいわき出てくる。

ギリッ、と音を鳴らし、奥歯を噛み締める。予想外に大きい音が出たな、と悔しさ渦巻く内心の片隅でそんな下らない言葉を浮かべた時だった。

アリーナを貫く暴虐の光が降り注いだのは

「何だっ!?!」

「一体、何よッ!?!」

鈴と一夏はそろって驚きの声をあげる。見れば鉄壁の筈のアリーナのシールドが破られ、無残な大穴をあけている。

もうもうと粉塵がビームの余波で立ち込める中、なにかがアリーナに降り立つ。

<白式>と<甲龍>のハイパーセンサーが同時に、その何かを確認する。

それは黒い”IS”だった。

## 第10話（後書き）

<あとがき>

次でやっと一夏と志保の再会シーンです。たぶんそこまで書けるはずです（オイチヨットマテ  
後今回の鈴は、原作以上に悲惨な気がする。

## 第11話

それは異形、だった。

操縦者の表情すらうかがい知ることのできぬ全身装甲<フルスキン>、人体のバランスを無視し異様に延ばされた両腕。ISであることはわかる。しかし、不気味に輝くカメラアイがまるで幽鬼の様な雰囲気を感じさせる。

それが、ただひたすらに不気味だった

それが一夏と鈴が抱いた言葉だった。その嫌悪感を振り払うように鈴が叫ぶ。

「ここはあたしに任せて、逃げなさい!! 一夏!!」

その言葉に不敵に笑う一夏。あるいはそれは、恐怖に押しつぶされそうな自身の情けなさを糊塗するためのものか……

「幼馴染の女の子を置いて、そんなみつともないまねできるかよ」

その言葉だけは、偽らざる一夏の本心。これから起こる戦いはきつと、命の危機があるのだろう。

だけど、逃げたくなかった、守られなくなかった。

これまでの一夏の人生は守られてばかりだった。最愛の姉に、そして、あの時であった正義の味方に……

誰かを守るようになりたい。それが一夏が今、胸の内に抱く思い、目指す場所だ。故にここで引く道理など一片足りとて在りはしなかった。

その決意を感じ取ったのか、鈴は苦笑する。

(そっか……そうだった。こっぴつやっだったよね一夏って、……  
……変わってないなあ)

「そこまで言うんだったらへまするんじゃないわよ!」

「やっとな、お前」

「へ!？」

「おまえにはやっぱり、笑顔のほぅが似合っぜ」

「ちよ!？ こ、こんな非常時に何言ってるのよ……え、笑顔のほぅが似合っつか……」

「……………その馬鹿二人、状況を考える」

非常時らしからぬ和気あいあいとした雰囲気打ち壊す、絶対零度の静かなる一喝。  
発したのは当然、織斑千冬だ。そして、一喝で縮こまる二人にそのまま指示を与える。

「いまの状況を説明するぞ。現状あの正体不明のISは、こちらに敵対する意思があるものと思われる。おまけに奴のビームは、アリーナのシールドを貫通するほどだ。放置しておけば、避難中の観客に被害が出る恐れがある。しかも同時にアリーナのシステムにハッキングがかけられ、シールドの解除は現時点では不能、急ピッチで解除を進めてはいるが、しばらくの間増援はない」

「つまり、その間」

「あたしと一夏で、あいつと戦えってわけね」

その言葉に返したのは、悔恨を押し殺した沈黙。  
守られるべき生徒が矢面に立ち、守るはずの教師が後方で、ただ立ち尽くす。

その不甲斐無さが、その沈黙に滲みでていた。

「ああ、そつだ。……………あいにくと私には、教え子の葬式に参列する趣味などない。……………死ぬなよ」

その一言は、二人にとっては万の援軍にも勝る。

「ああ、勿論、死ぬ気なんてさらさらないぜ!!」



にカメラアイが光る。そして、操縦者の身体への負担など、歯牙にもかけぬ急速反転。

一拍の間を置き、黒いISのいた空間を貫く不可視の一撃。必中を期して放たれた攻撃も、手傷どころかかすり傷一つ、付けるには至らない。

そのことに感じる苛立ちが、鈴の顔を焦燥で彩る。

続けて一夏が上方からの一撃を仕掛ける。生身の人間ならば一刀のもとに唐竹に断ち割るそれは、さしずめ断頭台の一撃か。

だがしかし、黒いISはそれを無造作な振り払いで弾いて見せた。そこに再び放たれる<甲龍>の<龍砲>も、あっけないほど容易くよけられる。

返礼とばかりに黒いISは、腕部に煌々と輝きを纏わせる。放たれるは、必殺の閃光。

その威力はすでに、アリーナのシールドを貫通して見せたことで証明されている。

そんなものを喰らえば、いかなISといえただでは済まない。

それだけはさせまいと、必死の形相で回避行動をとる二人。

二人の間の空間を、閃光が貫く。あまりの高熱に着弾地点の地面がガラス状になっている。

それを見た一夏の脳裏に、一瞬、ぞつとする光景が映し出される。

その光景を実現させる二射目の閃光を放とうとする黒いIS。

それをさせまいと、再び突撃する一夏。そこからは、先の光景の焼き直し。

斬りかかる一夏。

撃ち続ける鈴。

それらをものともせず、反撃し続ける黒いIS。

ひたすらに続く、命をかけた舞踏。繰り返され続けるそれは、見る者に永遠に続くように感じさせた。その最中、一夏は一つの疑念を抱く。

「なあ……鈴、あいつ本当にISか？」

「はあ！？ こんなときに、いきなり何言ってるのよ！！」

「いや、あのIS……徹底的に同じ行動しかとらないよな」

「確かにそうだけど……」

確かに、黒いISの行動パターンは単純だ。

接近戦では多数のスラスタ―による高い機動性でよけ、敵機が離れたところにいるのならばビームを放つ。

確かにシンプルな行動パターン故に隙が少ないとはいえ、あまりにも同じ行動を取り過ぎていた。

「あいつ、無人機なんじゃないかと思ってな」

「無人機なんてまだどこも、実用化していないわよ！！ そんなのありえない」

「そうか？」

「そうよ！！ それに無人機ってわかったところで、あいつを倒せないんじゃない意味がない！！」

「そりゃそつだな！！」

そうしている合間にも撃ち続けられるビーム、絶死の威力を持つ閃光のシャワーは、いまだやむことなく降り注ぎ続ける。

打開策の見えぬ状況は、僅かずつにだが、二人の機動の精度を落とすしていく。

じりじりと削られゆく体力と、機体のエネルギー。少しずつその数を増やすかすり傷が、戦いの流れを暗に示していた。

長い時を戦いに費やした者ならば、必ず胸に刻む言葉がある。

最悪の事象は、最悪のタイミングで起こる

鈴に向け黒いESが、ビームを放つ。完全な回避ができないタイミングだったとはいえ、本来ならばかすり傷程度で済むはずだった。

そこが、〈白式〉の一撃で僅かに切り裂かれた場所でなければ

小さな装甲の亀裂、そこから舐めるようにビームは入り込み、<甲龍>の脚部スラスタに甚大な被害をもたらす。その悪夢的な偶然、起こりえぬはずのそれは、当然のごとく致命の隙をもたらす。

片膝をついた鈴に対し、黒いISは右腕を掲げる。死を告げる輝きがその手の中に灯る。

「やらせるかあああつ！！！！」

そのあとに続く光景を作らせまいと、雄叫びを上げながら一夏はその間に割り込む。

手のうちにある<雪片式型>の輝きは際限なく増し、単一仕様能力が起動していることを示していた。

直後、放たれた閃光は、一夏が掲げた<雪片式型>によって切り裂かれる。

エネルギー兵装に対しての切札、対ISの最強の刃は、堅牢なアリアナのシールドですら貫くビームすら意に介さなかった。

だがしかし、<雪片式型>はその性能と引き換えに、莫大なエネルギーを消費する短期決戦用の兵装だ。

その証拠に、ビームを切り防いだ<白式>のエネルギーゲージは大きく目減りしており、次の攻撃を防げば、後はもう二人もるとともに、閃光に貫かれる運命しか待っていなかった。

「くそっ!!」

刹那の後に訪れる死を予感し、弱音が口から洩れる。右腕を下げ、今度は左腕のビーム砲を撃とうとする黒いISの動きが、やけにスローモーションに見える。

最早二人の死は覆せそうになかった、本当に？

かつて誰かが言った、英雄く正義の味方への条件は、逃れ得ぬ死の運命を覆すことだと。

「泣きごとを言うのはいいが、その前に右によける」

そして、正義の味方はここにいる。

「えっ!？」

間抜けな声をあげながらも、一夏は通信越しに聞こえる謎の言  
うとおりに動く。

いや、謎の声というのは正しくないだろう。どうやら布でも当てて  
いるのか、聞こえるのはくぐもった声だが、纏う気配が声の主の正  
体を如実に示していた。

そして、それを証明するかのように、一夏の真横を、かつて見た奇  
跡が駆け抜ける。

暴風を纏い、射線上のすべてを空間ごと捻じり貫く一本の剣。

それは狙い過たず、黒いISの左半身を貫くと、まるで硝子のように  
に砕け、破片は空に溶けて消えた。

それでもなお抗おうとする黒いIS、残った右腕を振り上げてビー  
ムを放とうとする。だが遅い

「これで決めるっ!?!?!?!」

残りすべてのエネルギーをつぎ込み、正真正銘、最後の一撃を放つ  
一夏。

降りぬかれる純白の閃光。一瞬の交錯の後、音もなく黒いISの右腕が、肩口から切り裂かれていた。そして、黒いISのカメラアイから光が消え、波乱に満ちた戦いの幕が閉じたことを示していた。

|||||

「よくやったな、二人とも」

耳に響く、千冬のねぎらいの言葉。精根尽き果てた一夏は、それを聞きながらISを解除して座りこむ。

「なあ、千冬姉、あの攻撃って誰が撃つたのかわかるか？」

いまの一夏の胸の内を占めるのは、再会を焦がれていた憧れが、同じ学び舎にいるかもしれないという喜びだった。

やはり彼女は正義の味方なのだ。かつて一度助けた自分の為に、こうしてまた手を差し伸べてくれた。それがたまらなくうれしかった。

「……いや、ご丁寧に射撃地点と思われる場所の監視カメラは、すべて壊されていてな、いったいどのだれがあんなことをしたのか、皆目見当がつかん」

「ほんと、……一夏とあたしを助けてくれたことには感謝してるけ

ど、いったいどこのだれなのかが、ものすごく気になるわね」

二人の言葉には、感謝と疑念、その二つが混ざり合っていた。

確かにそうだろう、事実を知っている自分も、彼女のことをほとんど知らないのだから。

しかし、ただ一つ言えることがある。

「 たぶん、正義の味方だと思っぜ」

その子供じみた一夏の答えに、鈴と千冬はそろって苦笑する。

「アハハツ、その表現はぴったりね」

「フツ、確かに、そうかもしれないな。……二人とも、今日はご苦労だった。後の処理は私たちがやっておく、事情聴取も明日に回すから、今日のところはゆっくりと休め」

その言葉を聞き、一夏は疲労で軋む体を動かし立ち上がる。

「ああ、そうさせてもらっよ、千冬姉」

「あたしもそうするわ、本当に疲れたし」

そうして二人はアリーナを後にし、更衣室に向かった。



道行く人とぶつかる、なんて間抜けはさらさなかった。そうして、俺は屋上への扉の前にやってきた。この向こうに彼女がいる。そう思うと柄にもなく緊張していた。そう使われることはないからか、ギギギ、と音を立てつつ扉を開けた。

かつての別れ際のように、沈みゆく夕焼けの中、赤い髪をたなびかせて、彼女はいた。

「ん？ ようやく来たか」

そう言って振り向く彼女、夕焼けに彩られた彼女は、相変わらず綺麗で見惚れてしまいそうだった。

「……その、なんて言ったらいいか。久しぶりだよな、IS学園にいたとは思わなかった」

「数年ぶりなものな、そっちも元気そうで何よりだ」

「ああ、縁があったってことなんだろうな」

「フツッ、そういえば、そういうことを言ってたな」

そう、縁があった。だからこうして再会できた。

だから、一番彼女に言いたかった、数年ぶりの思いが詰まった言葉を、俺は言う。

「だからさ………君の名前を、教えてくれないか？  
が、あるんだからさ」

縁

俺の問いに、彼女は笑みを浮かべる。

「衛宮志保。それが私の名前さ」



あなたのことを、知りたい。

顔も知らず、名前も知らず、だが、内よりわき出る思いは止められなかった。

もし仮に、誰か一人のことを思い続ける。それを恋と言つならば

それは、恋をしているのかもしれない。

< NGシーン >

再会を果たす、一夏と志保。たがいに名前をかわし合い、これから  
のことに思いをはせる。

「これからよろしくな、志保」

そついつて手を差し出す一夏。

「ああ、こつちこそよろしく、一夏」

志保もそれに応えて、右手を差し出す。近づく両者、夕焼けの中二人の距離は縮まってゆき……

ここで思い返してほしいのだが、一夏はここに来るまで全力で戦闘を行い、ここに来る時も疲れた体を無視して全力で走ってきた。

つまり、どういうことかということ……疲れきっているのだすごく。故に

これまでの疲れがどつと出たのか、バランスを崩す一夏。

密着する二人、それは互いの唇に柔らかな感触を残す。

驚きに目を見開く二人、数秒の硬直の後、弾かれるように離れる二人の顔は、夕日の赤とは違う赤に染まっていた。

「そ、そのごめん！！ ちょっと足元がふらついて……あの……その……」

（すっげえ柔らかかったな、……って何考えてるんだ俺は、事故とはいえ女の子の唇を奪うって、最低だ……）

「い、いや……じ、事故みたいなものだし、そこまで気にするな！」

（お、男とキスをしてしまった。わ、私にはそんな趣味はない……断じてないぞ！！ あ、でも……今の私は女性だから、別におかしいことじゃない！？ ……って、何を考えているんだ私は！！）

予想外の出来事に、大絶賛混乱中の二人。その混乱はしばらくの間続いたらしい。

ちなみに余談だが、同時刻、織斑千冬の機嫌はなぜか最悪だったらしい。

## 第11話（後書き）

<あとがき>

ようやくここまで来た。待ち続けていただいた読者の皆様、本当に済みませんでした。

これからも、読んでくれるとうれしいです……と、言いたいですが、仕事のほうで出張が決まり、次の更新がいつになるか分からない状況です。

出来る限り、早く更新できるように心がけますので、読者の皆さま方にはいましばらく、ご辛抱のほどをお願いします。

後NGシーンに関しては、流石にべたすぎると思ったのでおまけ扱いにしました。

TSものに関して、このようなシーンは賛否が分かれると思いますので、不快になられるような方が多ければ削除いたします。

## 第12話

「衛宮志保、それが私の名前さ」

数年越しに叶った願い、聞きたかった一言。  
当然の返礼として、俺も自身の名前を口にする。

「織斑一夏、今さら言うまでもないかもしれないけどな、  
それが俺の名前だ」

こんな感じで、俺の数年越しの願いは果たされた。

ここで俺はひとつのことに気づく、このあと何話すか全く思い浮かばねえ！！

名前を聞くことばかりが頭の中を占めていたせいだろうか、……いや、待てよ……元々ここに来たのは志保に呼び出されてきたからだ。まさか、ただ俺に会いたかった……って言う訳じゃないだろう。……それはそれで嬉しいけどな。

「それで、おれを呼び出した理由、聞かせてもらってもいいか？」

志保は一瞬、キョトンとした顔をしたあと、当初の目的を思い出したらしい。

「ああ、そうだったな……何、そこまで大仰なことじゃない」

「そうなのか？」

「ひとつ聞くが、もし私が今日、呼び出さなかったらどうしていた？」

「へっ？ そりゃあ……志保を探して学生名簿とか探すけど」

やはりか…、そんなこと呟きながら顔を押しさえる志保。

それはまるで、当たってほしくないがほぼ確信を抱く予想が当たったようだった。

「考えても見る、お前はこの学園で誇張なしに一番目立っているやつだぞ。そんなやつが一人の生徒に注目すれば、必然的に私も耳目を集めてしまっただろう？」

そうすれば私の抱える秘密も、ばれる確率が高まるしな。と、言葉を続ける志保。

確かに志保の言う通りだ。つまり、志保が俺をここに読んだ理由ってのは……

「理解してくれたようだな、だから一夏を呼び出したんだ」

「つまり、……誰かの目があるところじゃ、志保のことを知らぬ存せぬで通せってことか」

そうしなければならぬ理由もわかる、だけど……せつかく会えたって言うのに……

そんな俺の落胆を見てとった志保は、苦笑していた。

「そんな見捨てられた、子犬のような顔をしなくてもいいぞ」

「なっ!? そんな顔していねえよ!!」

「いいや、していたぞ。写真にとっておくべきだったかな?」

ニヤニヤと笑いながら、志保はそんなことを言う。確かにそうなれば寂しいなとは思ったけど、そんな顔はしていないぞ、絶対。

「まあ、一夏が寂しがりなのは置いといて」

「ちげえよっ!!」

「私と一夏が知り合った偽の話をつくって、口裏を合わせてくれたことだ」

「……成程」

「偽の話とはいっても、一夏が落とした財布を私が届けた、ぐらいでいいんだがな」

「そんなんでいいのか?」

「奇をてらい過ぎても不自然だからな、そのぐらいで十分だよ」

「そうか……わかった」

「ありがとう一夏、明日からそういうことで頼むぞ」

懸念が解消され、微笑みを見せる志保。

いまだ、彼女の人となりをそれほど知っているわけでもない。

だけど……この笑顔を見て、志保と知り合えたのは嬉しいと、

そう、感じたんだ。

「ああ、わかったよ志保」

「じゃあ、一夏、また明日な」

「ああ、また明日、  
志保」

たぶん、今の俺の顔はだらしなく緩んでいるだろう。

その証拠に、志保の顔には疑問が浮かんでいる。

また明日も会える。ただ、それだけのことが嬉しいなんて志保には、  
どうやら思い至らなかつたらしい。

そして俺たちはそれぞれ自室に戻る。おそらく、充実するだろうこ  
れからの日々に、思いを馳せながら

|||||

翌日。

早朝の通学時間、そこを歩く二人の少女。

志保と簪は、変わらず仲睦まじい様子で歩いていた。もっとも、互  
いの認識には微妙な齟齬があったが。

そこにかかる男子の声、場所が場所ゆえにその声の主は当然、一夏  
である。しかも、箒、鈴、セシリアの三人を伴いながら。世の男  
子が血涙を流すであろう光景を、平然と受け入れるのは流石、とい  
つていいのだろうか。

「おはよう、志保」

「朝からなんと言うか、流石と言うか……まあ、とにかくおはよう一夏」

これに、驚きの声をあげるのは四人。前日には全く面識がなかった（四人はそう認識している）のだから、疑問に思うのは仕方ない。

「……はい!?」「……」

四人の中で一番先に質問をしたのは、以外にも簪だった。

簪以外の三人の恋する乙女は、いきなり現れ、いきなり親しげに片想いの男子と話す女性の登場に、軽いパニックに陥っていた。

「……ねえ、いつの間に織斑君と仲良くなったの?」

不安げに志保に聞く簪。いまだ自信の気持ちを確認してない簪だが、それでも志保が異性と仲良さげに話すのは、少々思うところがあるらしい。

「ああ、昨日一夏が落とした財布を、私が届けたんだ」

「……………それだけ?」

「そつだぞ?」

何かおかしいか？ という風な顔をして返す志保。  
簪はそれに対し、無表情な中に少しの不満を混ぜながら、志保の腕に自分の腕を絡ませる。  
ギョツと志保の腕にしがみつくと、まあ、誰がどう見たって簪が焼きもちを焼いているようにしか見えないのだが、志保にはそれがわからなかったらしい。

「……………どうしたんだ？」

「……………なんでもない」

「いや……………気付かねえのか、志保って鈍感？」

「なんだろう……………それを、お前に言われるのはすごい納得がない」

その様子を見て四人は納得する。

この二人、似た者同士なのだと、恋する乙女鋭敏な感覚が感じ取った。

互いに顔を見合わせ、頷き合う四人。無言のアイコンタクトで友情を確かめ合う四人。

「えっと、簪さんだったか…仲良くなれそうなのがするな、私たちは」

「……………そうだね」

「うんうん、鈍感の相手は、精神的に疲れるわよね」

「その心情、全面的に理解できますわ」

「そこまで言う……………ってことは、織斑君も？」

簪の問いに、力強く頷く三人。日頃は一夏を巡り水面下の戦いを繰り広げる三人だが、その一点においては微塵の狂いもなく同意できるらしい。

その感情は、簪にも深く同意できるものであり、三人に対し哀れみにも似た視線を向けていた。

そして、件の二人はその様子に、当然全く何も気づいていなかった。

もげろ、そう言うしかなかった。いや、しかし志保の場合はどこをもげばいいのだろうか。

|||||

放課後。

「ねえ……………志保、ちょっとついてきてほしいところがあるの」

「別にいいが？」

別に用事もない志保は、簪からの頼み事を二つ返事で引き受ける。そこに扇子を閉じる音が響く。パチン、という音に目を向けると、そこにいたのは楯無だ。

「フッフッフツ……………、早々二人きりでいちゃいちゃさせないわよ、衛宮さん。というか、私も混ぜなさい」

「……………あんだ、仕事はどうした」

「当然、有能な部下に押し付……………もとい、指示を出したわ」

「……………時々、あんだがこの生徒会長であることに、強い不安を感じるんだが」

「それで、どこにいくの？ 簪ちゃん」

「うわぁ……………あっさりスルーしやがった」

「え、えつとね……………整備部の方に、やっぱり、専門の人の意見を聞いた方がいいと思うから」

変わらず軽妙なやり取りを交わす、志保と楯無。これで結構、この二人は息が合っているのかもしれない。

そんな二人にちよつとついていけない簪。アワアワと、二人の間で戸惑う様子は大変可愛らしかった。

実を言うと、入学当初の簪のクラスメイトからの印象は、無愛想な取っつきにくい子、だったのだが、今ではなんとというか可愛い子、というものだ。

原因はもちろん、志保とのやり取りを見てだ。志保のそばにいるときの、無愛想な中に覗く笑顔を見て、大多数のクラスメイトが撃沈されたのだ。

「衛宮さんと一緒にいるときの簪さんに、最近犬耳と尻尾が見える」

「志保×簪は正義<ジャスティス>!!」

こういう意見が、今ではクラスメイトの一致した意見だ。

……………これでいいのだろうか、一応ここは超の付くほどのエリート校なのだ。

「ふうん、整備部に、ね……………」

「確か、<打鉄式式>だったか、簪さんの専用機は」

「そう、まだまだ完成していないけど」

＜打鉄式式＞、純国産の第二世代量産機＜打鉄＞を開発した、倉持技研が開発中の第三世代機だ。

色々な事情により、開発は中断され、現在は簪がそれを引き継いでいる。

＜打鉄＞と違い、機動性を重視した構成で、完成した場合、最大の特徴となるのが、八連装×六門の自立追跡型のマルチロックミサイルだ。最も、その管制機能の完成の目処はたっていないのだが。

そんな感じで話していると、整備場のところまでたどり着いた。

「ほくら、簪ちゃん」「う、うん」そんな感じで、少しばかり尻込みする簪を、楯無が押し、三人は整備部へと入っていった。

「およ？ かんちゃんだ、どうしたの？」

入って一番最初に耳にしたのは、のほほんと間延びした声。

整備道具を使うからか、常とは違い袖口を手首までまくった本音だ。

「本音もいたの？ 奇遇だね」

「そうだよ、会長とエミヤンも一緒なんだね」

「そうよお、簪ちゃんったら、最近はいつも衛宮さんにベツタリでお姉ちゃんとしては寂しいわ」

「ああ、だから会長、最近ずっとお仕事頑張ってるんですね」

「ほう、成程、さっきの一言は照れ隠しということか、素直に簪さ

んと一緒にいたいから、仕事を頑張って終わらせた、といえはいいものを」

「うっ……、だ、だって恥ずかしいじゃない」

日頃、振り回されている事への意趣返しに、楯無をからかって見せる志保。

そんな二人を、簪は呆れたような、羨ましいような視線で見つつ、本音に用件を伝えた。

「……………あのね、＜打鉄式式＞をここのひとたちに、ちよっとみてもらおうとおもって…」

「そっか、わかったよ。おい、みんな、ちよっと来て」

本音の呼び掛けに、整備部の面々が集まってくる。

簪はその光景に、一瞬気圧されながらも＜打鉄式式＞を展開する。

志保はそれを見ながらも、簪の肩を叩き、楯無の方を指差す。

戸惑いに揺れる簪に、笑顔でウイंकをひとつして見せる志保。それに勇気付けられたのか、簪は楯無に話しかける。

「姉さんにも、……………ちよっと見てほしいな」

おずおずと頼み込む簪を見て、楯無が平静を保てるはずもなく。

「もっちろんよー!! 簪ちゃんの頼みとあらば、この私の持てるす

べてを使って、応えて見せるわ!!」

ISを展開していようがお構い無に、抱きつく楯無。

姉のテンションに、少しばかりついていけない簪は対応しきれずに、軽いパニックに陥っている。

「……………いいから、落ち着け。妹との仲がよくなってきて、嬉しいのはわかるがな」

それにあんたが離れないと、<打鉄式>を調べられないだろう。

そう言いつつ、手慣れた様子で楯無を引き剥がす志保。

その光景を見た整備部の面々は、ただ苦笑するしかなかった。

「それじゃあ、この機体を見てみましょうか」

気をとりなおした面々の中で、リーダー格の三年生が音頭をとった。

簪は機体を展開したまま降りようとしたが、なかなかうまくいかず四苦八苦していると、見かねた志保が手を差し出し、簪の体を抱き締めながら降ろしてやった。

思わぬ接触到簪は頬を赤らめ、楯無は先んじられたことに歯噛みし、整備部の面々でめざといものは、簪から漂うほのかなラヴ臭に狂喜していた。

そしてやっぱり、自信の状況に全く気づいていない志保。

……………誰かこいつをどうにかしろ。

その後、整備部の面々プラス楯無が、＜打鉄式＞を調査した。結果は

「問題は推進系ね、出力制御のプログラムとスラスタの同期が出来ていないわ」

「そうですね、このまま組んでいけば、飛行中に事故を起こしかねませんよ」

「……………あつ」

初っぱなから、ドでかいダメ出しを受けて落ち込む簪。

追い討ちをかけるように、ほかにも様々な点を指摘され、さらに簪は落ち込む。

志保はそんな簪を励ましながら、頭を撫でていた。

「そう悲観することもないと思うぞ、改善点が明確にわかったんだ。今から頑張れば学年別タッグマッチに間に合いそうだしな」

「うん……………頑張るよ、志保」

「……………だから、そうなんで姉の役割を奪うのかしら、あなたは」

頬を赤らめる簪、嫉妬する楯無、志保を含めたこの三人が集まると、この形になるのが定着してきたようだ。そんな中、整備部の一人が声をあげる。

「あのう……、マルチロックミサイルのFCSはどうするの？  
あれって、第三世代の技術だから、私たちでも手が出せないのよね」

その指摘、楯無もあえて無視していた事実には、場の雰囲気は暗くなる。

明確な問題。いくらIS学園の整備部といえども、企業の最新技術と同等の技術レベルを有しているはずもなく、明確な解決策がないこの問題を、誰も手を出せずにいたのだ。

その後も、散発的に意見が出るものの、これは、というものはなかった。

そんな中、門外漢ゆえに口を出さなかった志保が発言する。

「……………ちょっといいか」

その場にいた面々が、一斉に志保の方を向く。

楯無や簪のように、実績などがあるわけでもなく、そういった知識もないはずなのに、何を言うのかという思いがほとんどだった。楯無と簪だけは、志保の事だから的はずれなこととは言えないと思っていたが。

「この武装の特徴は、自動追尾による多方向からの飽和攻撃だろ？」

「ええ、そうよ」

「だったら、一般に普及しているIS用の武装を組み合わせて、似たような攻撃を再現したらどうだ？ ミサイルの搭載スペースに、



自身が抱えていた難関が、解決する目処がたったお陰か、簪の表情は晴れやかだ。

一月ぐらい前までは、ゴールの見えぬ問題だった。

だけど、志保と出会ってから、すべてが変わった。

きっと、志保はこれが当然と思っているのだろう。そう思いながら志保を見つめる簪。

ただそれだけで、鼓動は高鳴り、周りの景色が目に入らなくなる。

日が経つにつれて、それはひどくなっていく。

簪はもう、自分の気持ちに気づかないふりをできそうになかった。

ああ、私は志保に、恋を、しているんだ。

これが変だというのはわかっている。女の子同士のこの恋が、全うに実る確率も低いとわかっている。

だけど気づいてしまえば、もう、嘘はつけない。

夕焼けの中、少女ははじめて恋をした。

彼女を救った、ヒーロー<正義の味方>に



## 第12話（後書き）

携帯での投稿なので、文が荒いかもしれません。  
次の話で、あの二人が出るかな？

### 第13話(前書き)

今回の話には、クロス作品が増えております、お読みになられる際はご注意ください。

## 第13話

IS学園一年一組の教室は、ざわめきに包まれていた。それを向けられているのは、教壇に立つ二人。

一人は太陽のような輝きを纏う金髪の持ち主。多種多様なタイプの制服があるIS学園においても、珍しいという言葉を通り越して、異端とさえ言える。

中性的な容姿に非常にマッチした、男性用制服を着こなした、フランスの代表候補生。

「シャルル・デュノアです。フランスの代表候補生としてこちらに来ました」

織斑一夏に続く、二人目の男性IS操縦者が柔らかな物腰で、思春期の乙女のハートを撃ち抜く挨拶をした。

たちまち黄色い歓声に包まれる教室。しかし、担任である千冬の睨みで、たちまちのうちに静まった。

千冬はそのまま目配せをして、次の人物に自己紹介をさせる。

それに応じて、一步前が出る二人目。  
シャルルの金髪を太陽と称するなら、月光と称するような銀の長髪。  
目には眼帯をし、纏う雰囲気は抜き身の刃のようだ。

「ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

馴れ合いなどせぬ、そういわんばかりの簡潔な自己紹介。

そのあんまりな様には千冬も頭を抱え、「少しはクラスメイトとの  
協調を考えろ」と言うが、「はっ、努力致します、教官殿」とラウ  
ラは言い。

「貴様らに能力は求めん、私の足を引つ張るな。以上だ！」

「……………こいつは、全く変わっていないな」自身の言ったことを全  
く理解していないラウラの言動に、千冬はため息をついた。  
そんな千冬を尻目に、ラウラは教壇から降りると、一人の生徒の席  
へと向かう。

「な、何かようか？」

その席の主、織斑一夏は突然のことに動転し、目の前に立つラウラ  
に何事か訪ねた。

その間抜け面（あくまでラウラ主観だが）が爛に触ったのか、それ

とも、別の因縁か、ラウラの顔が静かな憤怒に染まる。

「……………貴様のせいです！ 教官の栄光が！！」

怒りと共に、ラウラはその白魚のような腕を振り上げる。

怒りをのせた平手打ちは、一夏の頬に直撃した……………そう、思われ  
た。

もし仮に、一夏が剣の道から離れ、一般人とさほど変わらないよう  
になっていたら、そうなっていたかもしれない。

しかし、今の一夏は剣道で全国優勝を勝ち取るほどの腕前、怒りに  
任せた大振りぐらい、避けることができた。

スカッ

無音にも関わらず、教室にいた全員の耳にそんな音が聞こえたよう  
な気がした。

沈黙が、一夏とラウラの間流れる。

それを振り払うように、ラウラは再び腕を振り上げる。

当然、一夏にそれを食らってやる義理などなく、余裕をもってかわ  
して見せる。

腕を振るうラウラ。 避ける一夏。 腕を振るうラウラ。 避ける一夏。

腕を振るうラウラ。 避ける一夏。

二人はそんな応酬を数回繰り返した。

そのせいかラウラは、幾度となく避けられた羞恥で涙目になり、顔は朱に染まっている。

まるで出来ないことに対し、むきになった子供のようなラウラの様子に、一夏の方もいきなりの暴挙によって、ラウラに抱いていた不満が消えていた。むしろ

(いきなりの事でビビったけど、この子って悪い子じゃなさそうだよな。むしろ可愛い)

バシン！！ バシン！！

そんなことを考えている一夏と、涙目のラウラの頭上に、衝撃が降りかかる。

「何をやっている、ふざけているのか貴様らは……………」

伝家の宝刀（出席簿）でバカ二人を沈黙させた千冬は、これから増加するであろう厄介事に頭を痛めながらも、授業を再開させたのだ。

|||||

「志保、頼みがあるんだ。〈白式〉に遠距離攻撃の手段を追加する方法を考えてくれないか!!」

「随分と流れをぶった切るな、オイ」

普通、ここは転校生二人を話題にするべきじゃないのか？ と、少し電波な事を考える志保。

現在、一夏たちは屋上で昼食をとっている最中だ。

一緒にいるのは一夏と志保に加え、篝、セシリア、鈴、簪、そしてシャルルの七名だ。

ちなみに席順は、志保の隣に簪とシャルル、一夏の両隣に鈴と篝、席決めの際、けんけんに負けたセシリアは鈴の隣になっている。

意中の人の隣に座れた簪、篝、鈴の三名は満足げな顔だ。

唯一座れなかったセシリアは、けんけんに負けた自分の手を見つめながらしょんぼりとしていた。

その分かりやすすぎる、しかし、一夏と志保は全く気づかないその様子に、シャルルは苦笑していた。

「まあ、一夏の頼みはあとで聞くとして……、もうひとりの転校生に殴りかかられたと聞いたが？」

志保の疑問は一夏以外の面々も気になっていたのか、興味津々といった顔だ。

「ほんとあのときはビックリしたよ。いきなりあんなことをしたか

らね……一夏にはあんなことをされた心当たりはあるの？」

学園での唯一の同姓であるからか、一夏とシャルルはもう仲良く  
なっているらしい。すでに名前で互いの事を呼んでいるようだ。

「あゝ、多分、俺が誘拐された一件だろうな」

「……誘拐!?」「……」

平然と言いはなった一夏の一言に驚く皆、しかし、驚愕とは違う反  
応を示すものもいた。

「あれ？ 鳳さんと衛宮さんは驚いていないね、知っていたの？」

それに気づいたのはシャルル、その疑問に対し鈴の表情は憤りが有  
り、志保は複雑な表情をしていた。

「それが起こったのはあたしがまだ、日本にいた頃だしね。一夏か  
ら聞いて知っていたのよ……というより、何で、志保までしっ  
つんのよ」

「私の場合は両親と一緒に、<モンテ・グロツソ>を観戦していた  
からな。噂話程度だが、そういうことがあったと聞いていたんだ」

鈴の問い詰めに、しれっとした顔で嘘をつく志保。

実際には噂話どころか、思いつきり事件に関わっているのだが

「そのせいで千冬姉が決勝戦を棄権したからな、多分、俺の事を千冬姉の栄光を汚す害悪だと思ってるんだろつな」

「逆恨みじゃないか、それは！」

「そうですね、恨むべきは誘拐犯であり、一夏さんにはなんの責もありませんわ」

「うん、私もそう思う」

次々に一夏を擁護する皆、一夏はその気遣いに感謝しながらも、重くなつた雰囲気を変えるために話題を変えた。

「その話はもう置いておこうぜ、ご飯は楽しく食わないとな」

「フツツ、強引だね一夏」

「うっせーシャルル、俺にそういう高等テクはない」

おどけたように胸を張って言う一夏、それにつられて皆の口許に笑みが浮かぶ。

「あっ!?!」

そんなときに簪が声をあげる。見てみれば簪が食べているお弁当（当然のごとく志保お手製）のおかずのウインナーが箸から滑り落ちていた。

コロコロと転がるウインナーを見て、簪がしょんぼりとした表情になる。

それを見た志保の箸先に、ちょうどウインナーがあった。

「ほら、簪さん」

そう言って自分のウインナーを差し出す志保、箸でつまんだままで

「ふえ!？」

「あ、やっぱり私の箸でつまんだのは嫌だったか？」

「え、あ、いやそんなことはないけど」

少し考えれば自分の弁当箱を差し出して、志保のウインナーを受けとればいいのだが、恋心を抱く存在からそんなことをされれば、簪のとする行動はひとつしかなかった。

「……………あむ」

顔をリンゴのように真っ赤にさせ、箸先のウインナーを直接食べる簪。はつきり言って恋人同士の行為である。さすがのこれには志保も少々照れたらしい、簪ほどではないが顔を赤くしていた。

「ま、まさか、直接食べるとは……………」  
「ゴ、ゴメン、……………つい、やっちゃった」

もう二人とも結婚してしまえ、それが二人を見た全員の感想だった。そんな中、シャルルはピンク色に染まった空気を変えるため、苦笑しながら口を開いた。

「二人は仲がいいんだね、まるで姉妹みたいだ。だとすれば衛宮さんがお姉さんかな？」  
「言っちゃったよ、オイ」

あえて恋人ではなく、姉妹と言う表現を使ったのは気恥ずかしさゆえか、しかし、その表現は一人の夜叉を召喚する鍵だった。

「  
簪ちゃんの姉の座は、誰にも渡さない。故に、  
死になさい」

ヒュッ、と風切り音をさせて、蛇腹剣が志保に向かって降り下ろされる。

直前まで確かに誰もいなかったはずの、背後からの攻撃に対し、志

保は余裕をもってかわす。しかも、お弁当やら何やらをきちんと退避させたうえでだ。

「全く、マナーがなっていないな。食事中だぞ、今は」

かわされたせいで地面に突き刺さった蛇腹剣を、志保は両足で踏みつけて、襲撃者の腕から奪い取った。

「エ!？」と、間拔けな声をよそに志保はポケットから電気工事用の結線バンドを取り出し、相手の両の親指をまとめて縛った。続けて志保は瞬間接着剤を取り出すと、先の一撃で飛び散った床の破片を拾い集め、解析魔術を利用して手早く亀裂を埋めた。

この間、わずか数分の出来事だった。手慣れているにもほどがある。

「……………相変わらず、出鱈目だよな志保は、っていつか誰だ、この人」

皆の気持ちを代弁するように、一夏が疑問を発する。

簪は身内が皆の前で醜態をさらしたことに頭を抱え、志保は面倒臭い事をした、面倒臭い人物をどう紹介するか頭を抱えていた。

「……………あゝ、これは簪さんの姉で、ただの阿呆だ。何をどう間違えたか、ここの生徒会長も勤めている」

「うう……………、衛宮さんがいぢめる。私の名前は更識楯無、ここの生

徒会長よ」

本来なら声を大にして否定したい楯無だが、暴れた上に拘束された姿では、説得力が欠片もないと自覚していた。

しゅん、と項垂れて座り込む姿には、公の場での凛々しさなど欠片もなかった。

流星にその姿には簪も哀れに感じたらしく、ポンポンと肩を叩きながら励ましていた。どうやら、すでに簪の中に姉へのコンプレックスは、微塵もないようだった。こつも連日、恥態を晒しては当然かもしれない。

「えつと……元気出して、お姉ちゃん」

「ああつ、簪ちゃんのやさしさが身に沁みるわ」

「しかし、こんなことばかりしては、そのうち簪さんに嫌われるかもしれないぞ」

「そんなことないわよね!!」

「う、うん」

「まあ、見ての通りシスコンだ。取り扱いには十分注意してくれ」

一応、一夏たちも入学式の挨拶で見知ってはいるのだが、そのときと今のギャップがひどすぎて反応に困っていた。

「そ、そつだ志保、さっきの頼み事だけど」

「ああ、そついえばそんなことを言っていたな」

結果、全員が見なかったことにした。華麗に無視したとも言いが。そのスルーっぷりに更に落ち込み、屋上の隅っこで小さくなっている楯無、そこには生徒会長としての威厳など、欠片も存在していなかった。

「たしか、＜白式＞の遠距離武装の件だったか」

「やっぱり、刀一本だけじゃ戦術の幅が狭すぎるからな」

「最近の模擬戦の結果も芳しくないしね」

「ええ、基本的に一夏さんの＜白式＞は、燃費が最悪の短期決戦仕様、距離を保つていれば、そう怖い相手ではございませんわ」

一夏の不満に同意するように、鈴とセシリアが言葉を繋ぐ。

「いっそ酷評と言っていいセシリアの評価だが、事実、その通りのため一夏は何も言い返せなかった。」

「しかし、＜白式＞には拡張領域はないぞ。どうしようもあるまい」「うん、そうだね、きつい言い方かもしれないけど、素人考えではどうにもならないと思う」

そして箒とシャルルが、否定的な意見を言う。

二人の意見はもっともであり、それには一夏と志保以外の全員がうなずいていた。

それもそうだろう、そもそも武装を積むスペースすらないのだから。

「……………やっぱり、無理かな」

ダメ出しをくらい、気弱になる一夏。  
しかし、志保は平然と言った。平然と、何でもないことのように。

「いや、できるぞ」

「……………マジで!？」

あまりにも平然と言われたせいか、一瞬、反応できなかつた一夏。  
それは他の皆も同様だ、ISについてそれなりの知識があるがゆえに、余計に志保の一言が信じられなかつた。

「いやあ、やっぱり言ってみるもんだなあ」

「そんなに大袈裟なことではないがな、昔知り合つた、出鱈目なじいさんにつれていかれた場所で、面白いものを見てな」

(あのワルプルギスの魔女のせいで巻き込まれた厄介事が、こんなところで役に立つとはな、ヒヒイロカネはないが、ここの技術力なら代用できる合金が作れるだろう)

喜ぶ一夏とは対照的に、志保の表情には苦々しさが混じる。

かつて宝石の翁に、様々な平行世界につれ回され、様々な事件に巻き込まれたことを思い出しているせいだろう。

「その面白いものを作るの？ 衛宮さん」

「その通りだ、まあ、作られたのがかなり昔だからな、技術的な問題はさほどないはずだ」

いったい何を作るのか、全員予想してみるが、もとより無理難題なこの問題を解決するものが何か、全く予想がつかないでいた。

「本当にあなたって出鱈目よね」

毎度の事ながら、志保の異常性を認識した楯無が志保に詰め寄る。どうやら、無視されたことに対するショックからは立ち直れられない。

急接近する楯無と志保、それをみて不機嫌そうになる簪を、シャルルがなだめていた。

「いっておくが、今回の事を思い付けたのは、その出鱈目なじいさんのせいだぞ」

「そこまで出鱈目なの？ 志保」

「……………ああ、そうだ、あのじいさんを知っている身からしたら、さっきの会長の暴走なんて子供の癪癪だからな」

ISの武装まで持ち出した会長の暴走が、子供の癩癩レベルとかそのじいさんはどれだけ出鱈目なのか、全員が驚いていた。

「どんな人なのよ、その人は……………」

「不条理と出鱈目と規格外のかたまりが、服を着て歩いているような存在だ」

志保をして、そうまで言わせるその人物の存在に、全員が軽く引いていた。

そんな中、簪が件の代物について聞いた。

「ねえ、志保、さっきいつていたものってどんなものなの？」

「それはできてのお楽しみ、だな」

「むっ、じゃあ、名前だけでも教えてよ」

技術的なことに関しても、それなりに造詣がある簪にとっては、それがどんなものなのか非常に気になった。

しかし、志保はもったいぶってその詳細を明かそうとはしなかった。その態度に、簪は少しむくれて名前だけでも聞き出そうとした。

流石にそれぐらいは、教えないとかわいそうと感じたのか、志保はその名前を告げた。

「 サンダラー、さ」



### 第13話（後書き）

この話の一番のネタキャラは会長です、異論は認めない。  
あと今回は、涙目のラウラが書けただけで満足です。

## 第14話

犯罪の教唆と、そのための道具。

それが、僕が父親から与えられたもの。

母さんが死んだ後、突然近づいてきた父親。

ただ、対面や義務だけで、愛情なんて欠片もなくとも僕は耐えられた。

なんの面識もなかったから、血が繋がっていたとしても、あの人が親であることの実感なんてなかったから。

けど現実には僕の想像を越えていた、まさか実の娘に犯罪を強要するなんて思ってもみなかった。

その時から、〈シャルロット〉は奪われて、〈シャルル・デュノア〉という仮面が与えられた。

〈私〉から〈僕〉に、〈女の子〉から〈男の子〉に、〈ただの平凡な女学生〉から〈フランス代表候補生〉、シャルロットを形作っていた全てのモノは剥ぎ取られ、シャルルという仮面を被るためのものが塗りたくられた。

そうして〈僕〉は、IS学園にやって来た。

世界で二人目の、男性のIS操縦者となって

織斑一夏のデータと、過日のクラス対抗戦で観測された、謎の一撃のデータを入手するために

|||||

自動加工の旋盤が金属を削る音に、僕の意識は過去から現実に引き戻される。

昨日、衛宮さんが言った面白いものを作るため、衛宮さん自ら整備部の施設を借りて、例のものを作っているところだ。

僕も、その品物がどんなものか気になったから、こうして製作過程を見学しているんだけど……………

「やっぱりつまらないか？ デュノアさん」

「ううん、そんなことないよ、後、僕の事はシャルルって呼んでほしいな」

「じゃあ、私の事も志保でいいぞ。シャルル」

そういつて衛宮さ…じゃなかった、志保はにこりと微笑む。

それだけなら普通なんだけど、今の志保の格好って、作業着姿なんだよね。しかも、スパナを片手に抱えてるし…普通、似合わないと思うんだよね、女の子のこんな格好って……………

……………何でこんなに似合ってるんだろう。

職人のかっこよさ、って言ったらいいのかな？

簀さん……だったかな、あの子が見惚れるのが何となくわかる気がする。

そういえば簀さんも一緒に見ていたんだけどな、用事があるってどこかに行っちゃった。

「さて、作業を再開するか」

どうやら志保は、作業の続きをやるみたいだ。

コンピューター制御の五面加工機から、さっきまで作っていた部品を取り出す、形状から推察するに、おそらくリボルバー式拳銃のシリンダーのようだ、ということはサンダラーは拳銃らしい。

次はどうやらバレル部分を作るみたいだ、細長い金属材料を機械にセツトしている。

その手際はとてもスムーズで、僕がさつき志保に抱いた職人というイメージ通りだ。

再び作業に集中している志保は無言で、作業場には静かなモーター音だけが響いている。

僕も静かに、その作業姿に魅入っていた。

「一つ聞いていいか？」

「どうしたの？」

突然の志保の質問、それは

「どうして男の振りをしているんだ？」

シャルル・デュノアという仮面に、亀裂をいれる一言だった。

「な……………何を言っているのかな？」

「ちょうどここにいるのは、私たち二人だからな、他人の目の前でそういう質問をするのは不躰だと思ったんだ」

「いや、そういうことじゃなくて……………、何で僕が男じゃないとか言うのさ」

ああもう、なんか志保のなかじゃ僕が女の子なのが、もう確定しているみたい。

何で？ いつの間にはれたの、志保と一緒にいたのは今日の昼食の時だけなのに。

すると志保は、常の泰然としたようすを崩して、言いにくそうにその理由を言った。

「まあ、所作や体つきで服の上からでもそういうのはわかるんだよ。……それに、下世話な話で言いにくいんだがな、シャルル、胸がでかいだろ？ それを無理やり抑え込んでるから、動きにかなりの不自然さが出てるんだ」

「嘘っ!?!」

いきなりそんなことを言われたものだから、僕はとっさに両腕で胸を隠すような動きをしてしまった。

そんな僕の反応を見て、志保は一言

「その反応は、女の子であることを如実に表してると思うんだがな……」

「あっ!?!」

そうだよ、男の子だったなら胸を隠す必要なんてどこにもないじゃないか、僕の馬鹿っ!?!

どうしよう、もう隠し通すことなんてできないよう……、まさか転入初日にばれちゃうなんて思ってもみなかった。

「……………そうだよ、僕は女の子だよ、はあ」

「あゝすまん、私が言うのもなんだが、そう落ち込むな」

「だってさあ……こんなにも早くばれるなんて思ってもみなかったんだよう」

ああ、だめだ、言葉にすると余計に落ち込んだじゃうよ……、なんか涙まで出てきそう……

「うわっ、おい、泣かないでくれえッ!？」

「だってえ、もうこれではくは犯罪者で、刑務所行きだよ……ぐすっ」

「言わないっ、言わないからっ!」

「……本当に?」

「ああ、本当だ。……全く、綺麗な顔が台無しだぞ、ほら、これで涙を拭いておけ」

「きっ、綺麗っ!?!」

「うん? どうした?」

「な、何でもないよ!」

なんか簪さんが、この子に惚れてる理由が分かったかもしれない……ああいう齒の浮くようなセリフを自然に言うなんて……、そ、それにして綺麗って言われちゃった。

そんなことを思いながら、志保から借りたハンカチで涙をぬぐった。

「ふう……落ち着いたようだな、それじゃあ本題に戻ろうか」

「うっ……戻ってほしくなかったかも」

「しかたがないだろう、……まあ、この時期にそんな恰好ということは、だいたいの想像はつくがな」

「うん……志保の予想通りだよ、僕がこんな恰好してるのはね……」

観念した僕は、洗いざらいを志保に話した。

父親のこと、デユノア社の現状、僕の目的、織斑一夏のデータの入手と、クラス対抗戦の謎の攻撃の調査、すべてを話した。そういえば、謎の攻撃の調査のことを志保に話した時の表情、なんだか変だったなあ、もしかしたら何か知っているのかも。

「　　そうか」

「どうするの？　やっぱり学園側に報告するのかな……ぐすっ」

「お願いだから泣くな、女の子の涙には勝てたためしがないんだ」

困り果てた様子でそういう志保、なんだかその言い方は男の子みたいで、それがなんだかおかしくて……自然と、僕は笑っていた。

「フツツ、変なこと言うんだね、志保は」

「当たり前だ、泣いた女性を相手にするぐらいなら、ISを相手にするほうがまだ楽だ」

「あははっ、志保って結構冗談言うんだね」

「シャルルに笑ってもらえたのなら、冗談を言ったかいはあるというものだな、…ああ、君には笑顔のほうが似合うな、泣き顔なんか似合わない」

そんなセリフを言われて、顔っが真っ赤になるのは当然だと思うんだ。

しかも志保に照れが一切ないから余計にね、僕だって女の子なんだから、そういうこと言われると照れちゃうよ。

「志保って、もうちょっと自分の言ったことを自覚したほうがいいと思うな」

「別に変なこと言っていないと思うが？」

「……そこがだめなんだよ」

「……うん、志保のそういうところは、駄目」

「そうそう、簪さんの言うとおり……って、あれ！？ い、いつからいたの！？」

「……シャルルに笑ってもらえたのなら、のあたりから、……駄目だからね、志保に手を出すのは」

そういつて志保にぴったりくっつく簪さん、も、もしかして僕、志保をそういう目で見てるって思われてる！？

違うから、僕はノーマルだから！！ って、声を大にして言いたいけど、今の僕はシャルルだから、不自然なことはないし、下手に言おうものなら簪さんにまでばれちゃうよお……

うつつ、なんかさつきから僕って、グダグダだよ、墓穴を掘ってばっかりだ。

「ところで簪さんの用事は終わったのか？」

「うん、それと、ここの使用時間がもうすぐ終わるから、それを伝えにきた」

「あ………本当だ」

「確かに、ありがとう簪さん、わざわざ伝えに来てくれて」

そういつて志保は簪さんの頭をなでると、工具の片付けを始めた。

あまりにもさりげなく行うから、一瞬、簪さんは何をされたのか分からなかったみたいだけど、すぐに顔を真っ赤にして固まっていた。



二人が去った後、志保はおもむろに携帯電話を取り出し、電話帳から番号を選択した。

他に誰もいない部屋に、電話の呼び出し音が響く。しばらくの後、電話に一人の女性が出る。それは

「                   もしもし、織斑先生ですか、衛宮です。……例の件なんですが                   」

事態は静かに、主演の知らぬ間に進行しつつあった。

## 第14話（後書き）

<あとがき>

やっぱりサンダラーの件は賛否が大きいですね、実を言うとラウラとの戦いにもあまり変化が出ないから、オリジナルの話でも入れようと思ひまして、サンダラーを出したのはその一環です。

だから、なんで志保があっさりとそういうのを作ったのか、そういうのにもちゃんと理由は考えてあります。

まあ、ただ単にカツコイイと思ったのも事実ですが（汗

## 第15話

一夏と志保の二人はIS学園のアリーナのピットにいた。

一夏の依頼で志保が作った武装、サンダラーが完成したため、これからテストを行うところだ。

志保はまるで新しいおもちゃを目の前にした子供みたいに目を輝かせている一夏に、サンダラーを手渡す。

「へえ、これがサンダラーか……」

<白式>のマニピレーターでサンダラーを持ち、一夏はいろいろな角度から観察している。

本来のサンダラーは中折れ式の四連装のリボルバー式拳銃だが、志保が製作した物はISに合わせてグリップを大型化している。

しかし、見た目は少々へんてこなリボルバー式拳銃にしか見えず、一夏は詳しい説明を志保に求めた。

「なあ、これって、他の拳銃となんか違いがあるのか？」

「ふむ、そうだな…機構自体には何の変哲もないリボルバー式拳銃だ。シリンダーには強度が必要だから、ISの接近戦用武装にも使われているSTM鋼スパー・チタン・モリブデンが使われているぐらいだ」

「じゃあ、これってただの拳銃じゆ」

「

志保の説明で落胆の声をあげそうになる一夏、そこに第三者の、それもかなり逼迫した声が届いた。

「一夏っ！！ 大変だよ、アリーナで乱闘騒ぎが起こってる！！」  
「なんだって!?!」

声の主はシャルル、何でもアリーナで、鈴とセシリアとラウラが決闘しているらしい。

その説明を聞いた一夏は、一目散にアリーナへと向かった。サンダラーを掴んだまま

しかもタイミングが悪いことにサンダラーには、最大の特徴である特殊弾頭、通称“赤弾”が装填されていた。

硫化水銀の弾頭にニトロ口を使った炸薬で形成され、射程は短いもののグレネード並みの爆発を引き起こす法外の物である。

要約すれば、リボルバー式拳銃の形をしたグレネードランチャー、それがサンダラーの正体だ。

さて、一夏がそれを認識しているかというところ、……もちろん否である。

そんな出鱈目なもの、素人に毛が生えた一夏：どころか、この学園の教師陣であっても正しく認識できないだろう。

まあ、一夏が志保にこの依頼をしたのも、教師や代表候補生というISを熟知した者でも解決できなかった問題なのだから、誰も知らないような出鱈目な何かを持った誰かでないか、解決できないと思っただけなのだが。

……このことを志保が知れば、間違いなく「白式」を標的にしてサンダラーのテストを行ったに違いない。

「ちょっと、いつてくるぜ志保……！」

「お〜い……はあ、一夏のやつ……！」

走り去る一夏の背に、志保は力なく制止の声をかけるが、勿論そんなもので止まってくれるはずもなく、制止の声はすぐに溜息に変わった。

「まったく……、あの阿呆どもは……！」

そのため息に同調するように、一人の女性の溜息が重なる。

黒のスーツを着こなした世界最強の美女、織斑千冬だ。

千冬はそのまま、志保に対し話しかける。その様子は初対面という感じではなく、面識のある知り合いという感じだったが。

「すまん、愚弟が迷惑をかける……！」

「いえ、気にしなくていいですよ、あれぐらいだったら可愛いものです」

「まるで、もつとどでかい厄介事を引き起こす人物が、身近にいたみたいだな」

「……ええ、いました」

「……奇遇だな、私もだ」

「しかもそういう人物に限って、自分から厄介ごとを引き起こして、こつちを存分にひっかきまわした揚句、自分でさっさと解決するんですよね。……しかも、ぎりぎりの一線は守るからいつの間にか有





ならば、こちらに仕掛けるときにカウンターを狙うしかない。いくらなんでも学園内で銃器を使用するような愚虚を犯す筈がないと、仕掛けるならば接近戦だと彼女はそう判断した。神経を研ぎ澄ませ、只管待ちに徹する彼女、唯一の誤算は敵対者が一人ではなかったことだ。

動きを見せる“二つ”の気配。

そのことに一瞬の動揺をさらし、叩き伏せられる彼女は薄れゆく意識の中、その間抜けさを後悔していた。

「……………まさか、同じタイミングで確保に動くものがあるとは、な……………」

「……………それはこっちのセリフだ、後、教師には敬語くらい使え」

「確かに……………失礼しました、織斑先生」

「おまえは、確か四組の衛宮か」

「ええ、そうです……………まさか一生徒の自分の名前を知っているとはいけませんでした」

「言うておくが、楯無との一戦で、お前の名前は教師全員に知られているぞ」

「……………マジで!?!」

「マジだ」

そんな会話を交わしながら、二人は期せずして共同で確保した諜報員の拘束と、情報の分析を行っていた。

やはりというか、端末のデータは消去され、所持品にも身元を示すものはない。

しかし目的だけは志保が、“見て”いた。

「何かわかったか、衛宮」

「とりあえず所持品からは何も……、しかしおおよその目的はわかっています」

「織斑一夏か」

「ええ」

「よく聞こえたな、かなりの距離があつたぞ」

「いえ、読唇術で見たんですよ、織斑一夏を確保するのは困難だ、とね」

「またずいぶんと、みょうちくりんな特技を持っているものだな」

要注意生徒の意外な特技を知った千冬の携帯電話に、真耶から連絡が入る。

それによれば、確保した諜報員を尋問するための準備が整ったということだ。

それを聞いた千冬は、気絶している諜報員を軽々と担ぎながら、志保に言った。

「さて、こいつの尋問と……衛宮、お前と面談を行う必要が出てきたな」

「……でしようね」

有無を言わさぬその瞳に、志保はただ、従っしかなかった。

三十分後、面談室で志保と千冬は向き合っていた。

「さて、……衛宮、最初に聞こう、どうしてあの諜報員に気付いた」  
「織斑一夏の周囲には、結構気を配っていましたからね、もともと、ここ数日気配が変わったので、……それもあまりよくない方向に、だから今回動いたわけです」

「おおよそ私と同じ理由だな、不幸なことだな、タイミングがずれていればこんな厄介なことにならなかったというのに」  
「昔から幸運には恵まれていませんでしたからね、私は」

だからこうして面倒なことになったと、溜息をつく志保。若しタイミングがずれ、千冬が先に動いたならばそのまま学園が対応して何事もなし、志保が先に動いても匿名で通報すればそれで済む。だからこそ、こんなタイミングは奇跡的に最悪過ぎた。

ぶっちゃけあの時、お互いの技量が高すぎて、お互い仕掛けるまで気付かなかったのだから。

それでも動揺を出すことなく、諜報員を確保することができたのは流石と言うほかない。

「その点に関しては同情もしよう、  
では、最も重要な質問  
をしようか」

同情から一転、千冬は抜き身の刃のような鋭さを帯びて、言葉通り  
最も重要な質問をした。

志保もまた、居住まいを正し、千冬のを言葉を待った。

「おまえは一夏の敵か？  
衛宮志保」

「違います、むしろ味方と云っていい」

「単なる学友の為に、諜報員の確保にまで動くのか」

「ええ、そうですよ…と云いたいですが、それなりの理由はありま  
す」

「ほう、それはなんだ？」

志保の一言に興味を示す千冬、学園の教師陣にとって衛宮志保とい  
う存在は、訳が分からなすぎる存在だ。

楯無が志保と戦った時、素人ではないと思っただのは教師陣にとつて  
も同様だった。

その後、衛宮志保の身辺調査を改めて行ったのだが、全くの白。後  
ろ暗い関係など、何一つ見つからなかった。

何かあるが、何かあるのかまったくわからない謎の人物。それが教  
師陣から見た衛宮志保の評価だった。

「一夏が公にされると厄介なことになる、私の事情を知っているからですよ」

「おかしな話だな、それならば機をうかがっての一夏の暗殺でもしたほうが筋は通る……最も、そんな真似は絶対にやらせんがな」

口調は固いが言葉の端々に滲みでる、姉としての愛情にどこぞの生徒会長を重ねてしまい、つい苦笑を洩らす志保。その笑いが癩に障ったのか、千冬は眉をしかめ、傍らに（なぜか）あつた出席簿（伝家の宝刀）を手に取る。

「すみません、織斑先生の最愛の弟に対する愛情が微笑ましくて、つい……」

「ほう、……喧嘩売っているのか、貴様」

「いえいえ、織斑先生にこれほどの愛情を向けられて、一夏のやつも幸せだと思つて」

「……あたりまえだ」

「ちよつと照れてます?」

「……うるさい」

志保のからかいに視線をそらす千冬、顔が赤いのはきつと夕日のせいだけではないのだろう。

どうにかして、平静を取り戻した千冬は、改めて志保に聞いた。

「改めて聞くぞ、おまえは一夏の味方か?」

“敵”ではなく“味方”という言葉を使う千冬、つまりは志保にこう聞いているのだ。

これからも、一夏の力になり続けてくれるのか、と

言葉の裏に込められた思いを志保は理解して、胸を張って答える。

「ええ、勿論です、あいつの期待を裏切るような真似は、したくない」

志保の脳裏によぎるのは、かつての一夏の純真な眼差し、自分を正義の味方だと、曇りなき瞳で信頼してくれた。

それを裏切るような真似、”衛宮”志保は絶対にしない。

「そうか、その言葉、……とりあえずは信頼しよう」

千冬もまた、志保の言葉に込められた真摯な想いを理解した。

たがいに微笑む二人、その姿は窓から差し込む夕焼けで赤く染まっていた。

そして、日が沈み外が暗くなったのに合わせるように、会話に剣呑さが混じり始める。

「ところで衛宮、一夏の現状で、一番まずい点はどこだと考えている？」

「正直に言うならば、“舐められている”、その一点に尽きますね」

「おまえも、そう思っているか」

「ええ」

あまりにも旨味があり過ぎるのだ、織斑一夏という存在は世界初の男性IS操縦者、使用機体は篠ノ之束が製作にかかった最新鋭機体、そして一夏ははまだISに関わってから数カ月しかたっていない、若葉マーク付きのひよっこだ。

もし仮に、他の最新鋭機の奪取を試みた場合、相対するのは最新鋭機を任せられるだけの技量を持ったパイロットだ。

対して一夏は前述したとおりの有様、しかもく白式>の武装はいくら強力といえどもブレード一本のみ、此方もISを持ち出せばパイロット共々奪取できる可能性は、かなり高くなる。

これほどまでに葱を背負いまくった鴨も、そうそういないだろう。

「これを改善するためには、一夏が独力で敵を倒し、示さねばならないでしょうね」

「自分が敵にあらがえるだけの牙を、戦う力を持っていることを、か……………」

「く白式>がもっとバランスの取れた機体なら、多少はマシだったかもしれないですが」

「それを言ってくれるな、いろいろと思惑が絡み合っただのアレだからな」

「どうにかして、一夏の戦闘能力をあげる、とれる行動と言ったら





「その手を離しやがれ!!」  
「ふん、ついでだ、貴様もここで叩きのめしてやるっ!!」

セシリアと鈴を叩きのめし、つかみ上げているラウラとそのIS〈シュヴァルツエア・レーゲン〉  
それを引き離すように、一夏はサンダラーをとっさに撃とうとして  
しまう。

データにない〈白式〉の遠距離武装の存在にも慌てることなく、ラウラは己が機体の最大の特徴、〈停止結界〉を発動させる。  
対象にかかる運動エネルギーを、文字通り停止して零にしてしまう  
この武装を前に〈白式〉の武装など簡単に止められる、ラウラはそ  
う思っていた。

ラウラに誤算があったとすれば、銃弾の軌道を見切り、必要最小限  
の大きさで、〈停止結界〉を発動させてしまったことだろうか。  
思い出していただきたいのだが、サンダラーには今、赤弾が装填さ  
れているのだ。

盛大な火球が、白と黒を飲み込んだ。  
ラウラのほうは停止結界の範囲が小さすぎたため、爆炎を止められ  
ず。

一夏のほうは、サンダラーがそんな出鱈目な銃など知らぬゆえに、  
至近距離で盛大に発射して自滅した。

「……………ケフツ!?」

「……………ゴホツ!?」

「……………危なかった(ですわ)」

さっきの剣幕などど声やら、目を白黒させてせき込む二人。

足元では、ぎりぎり火球に呑み込まれなかったセシリアと鈴が、盛大に冷や汗をかいていた。

そして、こんなバカ騒ぎをしている阿呆どもに鉄鎚を下す、二人の修羅が現れる。

「……………いい加減にしる、この馬鹿どもが」

「……………テストも説明もしていないのに、いきなりぶっ放すとはいい度胸だ一夏」

「……………へっ!?」

間抜けな反応を見せるバカ二人に、怒れる修羅の鉄鎚がくだされ、アリーナに盛大な金属音が響き渡ったのだった。



## 第15話（後書き）

<あとがき>

やっぱり一夏の状況って、危険すぎるにもほどがあると思うんですよね、今回の話で説明したように……というわけで、そういう方面のごたごたがタッグマッチの前に起こります。

その間ラウラの出番が少なくなりますので、ブラックラビット党の方々にはいましばらくの我慢をお願いします。

後、サンダラーの解説をば……

八房龍之助著の漫画「宵闇眩灯草紙」に出てくる拳銃。

性能の説明は今回の話で言ったように、拳銃の形をしたグレネードランチャーと言う法外なもの。

作中では、ビリー・ザ・キッドとパット・ギャレットが、この拳銃を使い決闘していた。

後、四連装なのに、どう見ても四発以上連射していたのは、突っ込んではいけないのだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5438r/>

---

インフィニット・ストラトスcross BLADE

2011年6月9日22時10分発行